昭和59年 7 月 1 日号（毎月 2 回 1 日、15日発行）第27巻・第13号　通巻610号　昭和54年 6 月 2 日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1984
13
7. 1.



ソ日共同取材

五つの目で見たシベリア ⑥

夏は旅行のシーズン

ソ連の"茶の湯"

第13号　1984年7月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141 東京都品川区東五反田3－9－13
振替口座　東京9－122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101 東京都千代田区神田神保町1－44
振替口座　東京0－13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

米国の科学者の呼びかけに対する コンスタンチン・チェルネンコの回答

米国の著名な科学者リチャード・ガービン（ウォトソン・リサーチ・センター）とカール・セーガン（コーネル大学惑星研）はチェルネンコ・ソ連共産党中央委書記長、ソ連最高会議幹部会議長に手紙を送り、宇宙空間の軍事化に関連して深い憂慮を表明した。

手紙の筆者たちは、前回の国連総会に提出された「宇宙空間における武力行使および宇宙から地上への武力行使の禁止に関する条約」のソ連草案に支持を表明し、宇宙兵器禁止についての一九八三年春の米国の多数の科学者、社会活動家グループのアピールにソ連が前向きの回答を与えたことを指摘している。この問題がますます緊要なものとなっていることを考えて、筆者たちは再び世界各国の指導者に対し、あらゆる種類の兵器の宇宙配備を禁止し、あらゆる国の衛星に損傷を与え、あるいは破壊することを禁止する協定について合意するよう呼びかけ、有人宇宙船の軍事利用制限についても若干の具体的な考えを述べている。

コンスタンチン・チェルネンコはこの呼びかけに次のように答えた。

あなたがたは再び世界各国の指導者に対し、殺りく兵器が宇宙に進出するのを許さぬよう、軍拡競争の新たな方向の出現を防止するよう訴えているが、この呼びかけはきわめて切実なものだ。われわれは、これに関連して著名な米国の科学者たちが表明している憂慮をよく理解している。

宇宙空間は科学者の壮大な成果のシンボルとなった。その平和開発は少なからぬ実りをもたらしている。しかし一部の連中は、宇宙を侵略と戦争の足がかりにしたがっている。米国で発表された計画から明らかなように、宇宙で対ミサイル手段を展開し、種々の衛星攻撃システムの行動の場をつくり、陸上、空中、海上の目標に攻撃を加えるための超新型兵器を配備することが予定されている。

ソ連は、宇宙兵器も含めたあらゆる軍備の拡張競争に断固反対している。

それと同時に、宇宙からの脅威に直面してソ連が自国の安全を確実に保障するための措置をとらざるを得なくなるであろうことも、明らかなはずだ。宇宙を通って軍事的優位への道を切り開くことができるというあて込みは、幻想の上に築かれている。しかしそうしたあて込みを捨てようとしていないが、そのことはきわめて危険な結果をもたらす恐れがある。手おくれにならないうちにそうした事態の進展を阻止することは、責任ある国政担当者、科学者、人類の未来を本当に憂慮しているすべての人々の直接的な義務である。

ソ連は、軍拡競争を宇宙へ移すという不吉な計画が現実とならないようにするため、最大限の努力を払う用意があることを再確認する。われわれの確信によれば、宇宙を兵器配備から確実に守ることをめざす政策が、諸国が必ず守るべき行動規範、一般に認められる国際的な義務とならなければならない。

われわれは、大規模な対ミサイル防衛システムの開発に断固反対する。それらのシステムは、罰を受けない核侵略の実施をあて込むものとみなさざるを得ない。そうしたシステムの創設を禁じた対ミサイル防衛（ＡＢＭ）に関するソ米間の無期限の条約がある。それは無条件に守られなければならない。宇宙に対ミサイル・システムを展開するという構想そのものをきっぱりと放棄することは、この条約の精神と字句に合致し、全人類の利益のために宇宙空間の平和な状態を確保するという課題に合致するものとなるだろう。そうした措置は、世界中いたるところで人類の平和な未来に対する真の配慮のあらわれと受けとめられるだろう。

衛星攻撃兵器禁止問題も一刻も猶予できない。そうした兵器の展開は、情勢の著しい不安定化、奇襲攻撃の脅威の増大を招き、核保有諸国間の信頼確保のための努力をぶちこわすものとなるだろう。あなたがた科学者は、これらすべてがいかに危険であるかを誰よりもよく理解している。

宇宙空間軍事化の恐ろしいプロセスが取り返しのつかない性格を帯びないうちに、緊急の措置が必要だ。ここにはあれこれの一時的優位を確保しようという試みや、宣伝的トリックの入りこむ余地はないはずだ。宇宙の軍事化阻止の問題――それは全人類的意味をもつ問題である。それは抜本的な解決を要求している。そうした解決は完全に実現可能なものだ。諸国民に対する責任を完全に自覚し、合意への意思を発揮する必要がある。

われわれは、兵器の宇宙への進出を阻もうとして、宇宙空間における武力行使と宇宙から地球に対する武力行使の禁止に関して取り決めることを提案した。この合意は、たとえば、すでに存在するそうしたシステムの廃絶を含む衛星攻撃兵器の完全放棄をも前提とするものだ。合意の達成を容易にするため、ソ連は、他の国々が同様の行動をとるまで、衛星攻撃兵器の宇宙への持ち込みに対するモラトリアムを一方的に宣言した。

ソ連のイニシアチブは、世界中で広範な支持を得た。それに見合う実際的措置の作成の着手を拒むどんな釈明も存在しないし、存在し得ない。いっさいの条件や留保なしに、宇宙空間軍事化のすべてのチャンネルをしっかりと閉ざすことを考慮に入れた公式の交渉を開始することが要求されている。このことは、すべての国の政治家、社会活動家の義務である。ソ連は、しかるべき合意が達成されるよう、できる限り努力する決意に満ちている。

有人・無人宇宙船の軍事的利用の制限に関するソ連の条約案の条項に対するあなたがたの具体的な考えについて言うなら、それは公式の交渉の過程で検討することができよう。

この機会に、軍拡競争の宇宙空間への拡大防止をめざすあなたがたの気高い活動の成功をお祈りしたい。

（プラウダ、一九八四年5月20日号）

タス通信記者の質問に対する ウスチノフ・ソ連国防相の回答

（一九八四年5月20日）

問い 米国製中距離ミサイルの欧州展開が国際情勢の悪化をもたらしたことは知られているが、これはどういう点にあらわれたとお考えか？

答え ソ連指導部が一度ならず警告したことが起こった。ドイツ連邦共和国、イギリス、イタリアへの米国製中距離ミサイルの配備開始とともに、欧州と世界の情勢は深刻に複雑化した。核軍備制限・削減交渉の続行が不可能となった。レーガン政権は世界を新たな核軍拡競争に引きずり込んでいる。

自国のミサイルの欧州展開の道に立つことによって米国は軍事的均衡を破り、ソ連とその同盟諸国に対する追加の核脅威をつくり出した。われわれはこれを無視することができず、この脅威に見合う反応を示した。われわれがとっている措置によって核の均衡は回復されつつあるが、しかしそれは言うまでもなく一段と高いレベルでの均衡である。相手側の目標に照準を定めた双方の核弾頭の数が増え、核攻撃あるいはその意図がないのに発生した核状況に対応する決定採択のための時間が大幅に短縮され、国家間の信頼が破壊された。

言い換えると、第一撃を目的とする米国製核ミサイルが欧州に出現した結果、核紛争の公算が高まった。海の向こうの軍事冒険愛好者たちは、ソ連その他の社会主義諸国の領土内の目標までのパーシングⅡミサイルの飛行時間が短いので、米国に一定の優位が確保されるとあて込んでいる。しかし、これはきわめて危険な誤算である。ソ連とその同盟諸国に対する核攻撃は、必然的にミサイルの配備地域に対しても、その発射命令がそこから発せられる地域に対しても、即刻の避けがたい報復攻撃を招くだろう。この点に疑念があってはならない。

ドイツ連邦共和国、イギリス、イタリアの安全は、米国製ミサイルがこれらの国に配備された結果、はたして強化されただろうか？ その反対に、これら諸国の安全は低下した。米国自体にとっての脅威も増大した。ワシントンの指導者たちは、これらすべてをよく知っている。しかし、米国領土に対してとられたソ連の対抗措置については、彼らは沈黙を選んでいる。米国指導層はそれらについての真実を自国民に語ることを望まない。自分たちの中距離ミサイルの欧州配備とレーガン政権がとっている対ソ対決政策が米国自

身にどんな結果をもたらしたかが、あまりにも明白になるからである。

米国の政権を決定している人々が、対ソ軍事的優位を達成する試みの無益さについて熟考すべき時はきている。形成された軍事的均衡と、核軍備制限についてこれまでに成立した合意は、客観的に平和の維持に役立っているのである。

ソ連は軍事的優位の達成をめざしていないが、他のどの国に対してもそのような権利を認めない。軍事的優位をめざす方針を、ソ連は原則的に拒否する。このことについては、ソ連の指導者たちが一度ならず声明してきた。ソ連共産党中央委書記長・ソ連最高会議幹部会議長コンスタンチン・チェルネンコ同志がソ連共産党中央委2月総会で強調したように、「われわれは軍事的優位を求めていないし、自分の意思を他人に押しつけるつもりもない。しかし達成された軍事的均衡を破壊することを、われわれは許さない」。米国がこの現実を考慮することを望まず、世界支配をめざしていることは、核戦争の脅威をますます増大させるという結果をもたらすにすぎない。

問い　ドイツ連邦共和国、イギリス、イタリアへの米国製ミサイルの配備に対抗して、具体的にどんな措置がとられているのか？

答え　対抗措置は以下のようなものである。あらかじめ警告されていたように、SS20中距離ミサイルのソ連欧州部への展開に対してソ連が一九八二年3月に宣言した一方的モラトリアムは廃棄された。欧州における米国の核ミサイル戦力がさらに増強されるなら、われわれはそれに応じてソ連欧州部のSS20ミサイルの数を増やしていく。

ドイツ民主共和国およびチェコスロバキア社会主義共和国の政府との合意により、一九八三年12月から社会主義共同体諸国の防衛を保障するため、射程をのばしたソ連製の作戦・戦術ミサイルのこれら同盟諸国の領土への配備が開始された。現在これらのミサイルは実戦配備につき、なによりもまず米国製ミサイルが配備された地域に対して、その脅威に見合う対抗手段となっている。

直接に米領土に対しても対抗措置がとられた。レーガン政権は優位達成を試みる中で、パーシングⅡミサイルによって、発射後8—10分でワルシャワ条約諸国の施設や平和な諸都市に到達する可能性をあてこんでいる。しかしこれはまぼろしの優位だ。われわれは米国沿岸で自国の核ミサイル搭載潜水艦の数を増やした。その性能諸元——威力、命中精度、米領土内の目標に到達する能力、目標までの飛行時間——から見てソ連の海中発射ミサイルは米国に対し、欧州の米国製ミサイルがわが国とその同盟諸国に与える脅威に等しい脅威をつくり出す。

特に強調しておきたいが、われわれの対抗措置は、米国とNATOの行動がそれを必要としている範囲内に厳しく限定されている。われわれは今後ともそうやっていくつもりだ。ドイツ連邦共和国の領土内でいま実施されている米国のパーシングⅡミサイルの一層の増強に対抗して、われわれはドイツ民主共和国指導部との合意にもとづき、以前に展開されたものへの追加として、射程をのばしたソ連の作戦・戦術ミサイルを配備した。もし米国で世界支配を狙っている連中が今後とも欧州の中距離ミサイルや、戦略核をも含めたその他の核戦力を増強するなら、われわれとしては同じ行動で対抗するよりほかにとるべき道がなくなるだろう。

ソ連は、そうした状況を不正常で危険なものとみなしている。情勢をよりよいものに変えるべきだし、変えることができる。米国製ミサイル配備が停止され、すでに展開ずみのミサイルが欧州から撤去されるなら、われわれの対抗措置の必要性もなくなるだろう。対抗措置もやめることが可能となるだろう。そうなれば欧州と世界の緊張のレベルを引き下げ、国際安全を強化することができるだろう、とわれわれは考える。

問い　周知のとおり米国政府は、米国製ミサイルの欧州展開を続行するつもりだと声明している。それと同時にワシントンは、いっさいの予備条件なしに核軍備制限交渉を続行する用意があるとも吹聴している。この点について何が言えるか？

答え　〝真面目で集中的な対話〟や〝互いに受けいれ可能な協定を探求する道の半分まで進む用意〟への米国の呼びかけ——それは言葉だけであって、世論はそれに惑わされている。事実上米国の指導者たちは、われわれにとって明らかに受けいれがたい自分たちの交渉再開条件をソ連に押しつけようとしている。彼らはミサイルを欧州に展開し、ソ連とその同盟諸国に対する追加の脅威をつくり出した。そして今度は〝話し合いをつけようではないか〟と言っている。過去の経験が示すとおり、明らかに何らかの合意の達成をあて込んでいない例のごとき申し出をまたしても検討することがわれわれに提案されているのだ。ワシントンの戦略軍備問題の解決に対するアプローチも同様のものだ。先ごろ行われた記者会見でレーガン大統領は、米国は新型大陸間弾道ミサイルMXの生産の促進を非常に必要としている。なぜなら、米国にこのミサイルがなければ、ソ連は交渉のテーブルに戻らないからだ、と述べた。これが合意への道だろうか？こうした基盤の上での交渉は不可能だ。

われわれにとって、核軍備制限問題における米国の二重のゲームは、とっくに明らかになっている。一方ではすでに長年にわたって条約や協定に調印しておきながら、他方でその批准をぶちこわしている。結局のところ、調印したからにはそれらは存在しており、履行しなければならないのだが、米国は事実上、自分たちが引き受けた義務から自由であるかのようなつもりでいる。地下核兵器実験制限条約（一九七四年）、平和目的の核爆発に関する条約（一九七六年）、戦略軍備制限SALTⅡ条約（一九七九年）について米国はそのように振る舞っている。SALTⅡ条約の中でソ米両国は、両国間に存在するおおよその均衡を認めた。米政府はこの条約の批准をぶちこわし、〝ソ連の軍事的優位〟や〝ソ連の軍事的脅威〟に関する気違いじみた宣伝を

展開した。なんのためにそんなことをしているのか？　軍拡競争を支障なく強化し、核兵器をも含めて次々と新しい兵器を開発するためだ。先にあげた条約を批准すれば、米国政府がこれをするのが妨げられることになろう。

最近米政府の一部の指導者は、次のような声明を行っている。以前ソ連との間で結んだ核軍備制限交渉に関する条約はすべてぶちこわす必要がある、というのだ。現実の力関係を考慮したがらず、恐喝と脅迫の道に立とうとするこれらの思いあがった連中に次の点を思い出してもらう必要がある。両国民の安全の利益に立脚するなら、核軍備制限協定は、ソ連に少しも劣らず米国も必要としている。それらの拒否は、米国自身の安全に決して役立たないだろう。

ワシントンの指導者たちは、新型ミサイル、あるいは新しい、〝包括的な米国の対ミサイル防衛〟創設計画を使って、脅迫と圧力によってソ連に一方的譲歩に応じさせることができるかのように、自己暗示をかけ、国際世論を欺くべきではない。これはむなしい期待だ。われわれは脅迫と圧力のもとでは交渉は行わない。ソ連は、誠実、平等で建設的な交渉を求めている。

そしてこうした交渉の基盤ははっきりしている。米国がそうした道に立つことを望むなら、米国は何よりもまず、新型米国製ミサイルの欧州への出現の結果生じた欧州と全世界の安全にとっての脅威を取り除くべきであり、軍拡競争をあおったり、交渉の結果ソ連の一方的軍縮を獲得することをあて込んだりして、軍事的利益を得ようというむだな試みを断念するべきだ。

コンスタンチン・チェルネンコは、フォーゲル西独社会民主党連邦議会議員団長との会談で次のように述べた。

「われわれが以前の状態への復帰の必要性を強調するのは、決して体面を考えているからではない。われわれは単に、欧州と全世界で戦争の危険が増大し続けるのを望まないのである。言い換えると、われわれは平和強化の利益を出発点としているのである」。問題は米国次第なのだ。核軍備制限交渉は、米国が欧州への中距離ミサイルの配備によって自らつくり出した障害を取り除きさえすれば、いつでも再開されうる。ソ連は、唯一の可能で公正な基盤——平等と同等安全にもとづく軍備の制限と削減に関する抜本的措置について取り決める用意がある。

問い　ソ連人は、米政府の侵略的、軍国主義的政策に憤慨している。と同時に、しばしば出される質問だが、帝国主義の脅威に直面しているソ連とわれわれの同盟諸国の安全を確実に保障するために、他に何をやればよいのか？

答え　たしかに、このような問いは、しばしば出されている。ワシントンの侵略的、軍国主義的政策がソ連、われわれの友邦、すべての平和愛好諸国と諸国民にとって重大な脅威となっているというのは正しい。ソ連に自分の条件を押し付け、われわれと——そして世界のすべての平和愛好諸国と——諸国民の運命を支配し、世界を支配する権利が自分たちに与えられているかのような態度で話し合おうとする米帝国主義のリーダーたちの試みが、ソ連人の怒りを呼んでいるのは、当然のことだ。彼らは、まるで歴史の有益な教訓などなかったかのように振る舞っている。

米国の世界支配を狙う連中に対する手きびしい警告——それは第2次世界大戦の結果である。帝国主義の突撃部隊——ドイツ・ファシズムと日本軍国主義——に対するソ連国民の世界史的勝利は、社会主義との歴史的な係争を軍事力によって解決しようとするいかなる試みも完全な失敗が避けられない運命にあることとの説得力のある証拠である。

今日社会主義に対する新〝十字軍〟を組織している連中に与えることのできる忠告はただ一つ——過去にこのような試みがどのような結末で終わったかを思い出すことである。

いわんや、国際舞台における力関係が社会主義に決定的に有利に変わった条件下の現在、帝国主義は軍事的手段によって自己の階級的目的を達成するいかなるチャンスももっていない。

帝国主義にとってこの道における克服しがたい障害となっているのは、ソ連の強大な経済力と打ち破りがたい防衛力であり、ソビエト社会の一枚岩の団結であり、共産党と国民のゆるぎなき統一である。

平和と諸国民の安全で確実なとりでは、社会主義諸国の共同体であり、ワルシャワ条約加盟諸国軍の兄弟的戦闘的同盟である。帝国主義のいかなる軍事的冒険もわれわれの不意を討つことはできない。コンスタンチン・チェルネンコ同志はモスクワの〝カマとハンマー〟冶金工場の労働者との会合で、「あらゆる侵略者は直ちに報復を受けるだろう」と強調した。

共産党は、ソ連の人々に対しわが国の経済強化のため根気強く首尾一貫して働くことを呼びかけている。ソ連の人々は、米国の侵略勢力を抑止し、祖国とわれわれの友邦の安全を確実に保障するためには、われわれすべてがその職場や戦闘部署において良心的に責任をもって働き、その愛国的義務を立派に果たすことが必要であることを、よく知っている。全ソ連国民の共同の労働はソ連の経済力と防衛力の基盤であるし、今後もそれに変わりはない。

ソ連は平和な国である。その軍隊は誰をも決して脅かしたことはないし、他国や他の諸国民に対して最初に剣を振りかざしたことは一度もない。ソ連の軍隊はソ連国民の平和な労働、社会主義諸国民の利益の守りについている。ソ連の軍隊は平和と安全の確実な守り手であったし、いまもそうであり、今後もそれに変わりはない。ソ連共産党中央委員会とソ連政府は、陸海軍が最新の兵器や戦闘機材を装備し、ソ連の防衛力がしかるべきレベルで維持されるために必要なことすべてを行っている。

共産党は、われわれに陸海軍をあらゆる侵略者に対し常時断固たる反撃を加える態勢に保つという課題を提起した。ソ連の軍隊はこの課題を遂行する用意がある。

（プラウダ、一九八四年5月21日号）

成果を上げた 日ソ極東・北海道友好交流会議

本誌評論員 アンドレイ・セベロフ　カメラ Y・ドベルニク



最終コミュニケに調印する（左から）池島信吉・北海道議会副議長、岡田利春・衆議院議員、パステルナーク・ハバロフスク地方執行委員会議長、ヤナエフ対文連幹部会副議長



ハバロフスクのレーニン記念碑を後にする日本側代表団



旧交をあたためる柴野安三郎・北海道日ソ友好文化会館理事長とニコライ・コトフ漁業中央研究所長

4月13日から20日まで日ソ極東・北海道友好交流会議（会議そのものは16日―19日）がハバロフスク市で開かれた。この会議は日本側の北海道実行委員会、ソ連側のソ連対外友好・文化交流団体連合会（対文連）とソ日協会がおぜん立てしたもので、日ソ双方の各界の代表約三〇〇人が出席した。ソ連側からは国と社会団体、地方自治体の代表、経済専門家、科学者、文化人、スポーツ選手やハバロフスク、プリモーリエ〔沿海〕両地方、サハリン、カムチャツカ、イルクーツク、ノボシビルスク各州、ブリャート自治共和国のソビエト代議員、ロシア連邦共和国閣僚会議、ソ連貿易、漁業、海運各省、対文連、ツェントロソユーズ〔全ソ消費協同組合中央連合会〕、インツーリストの幹部職員、日本側からは北海道議会や地方自治体の議員、市、村当局の代表、労組、文化、スポーツ、青年団体、実業界、水産界、日ソ親善団体

・会館の代表が出席した。

池島信吉・日本側実行委員長、道議会副議長、北海道日ソ親善協会会長代行は、「われわれは北海道の各界、各層代表の代表団と真に言える代表団を結成できた」と語った。まさしく一四〇人にものぼる各界を網羅したこれほど多数の北海道代表団が国外に出たのは、これが初めてである。

またV・I・ボロトニコフ・ソ連共産党中央委政治局員、ロシア連邦共和国閣僚会議議長、Z・M・クルグロワ・対文連幹部会議長、T・B・グジェンコ・ソ連海運相、横路孝弘・北海道知事、石橋政嗣・日本社会党委員長が会議あてにメッセージを寄せた。

双方の代表団長は語る

日本側代表団長の岡田利春・衆議院議員、日本社会党日ソ問題特別委員会委員長は会議の最終コミュニケ調印後次のように語った。

「こんどの会議は非常に実り多かった。終始友好的で、とてもよい成果を上げた。いまは満足感と責務を果たしホッとした気持ちで一杯である。

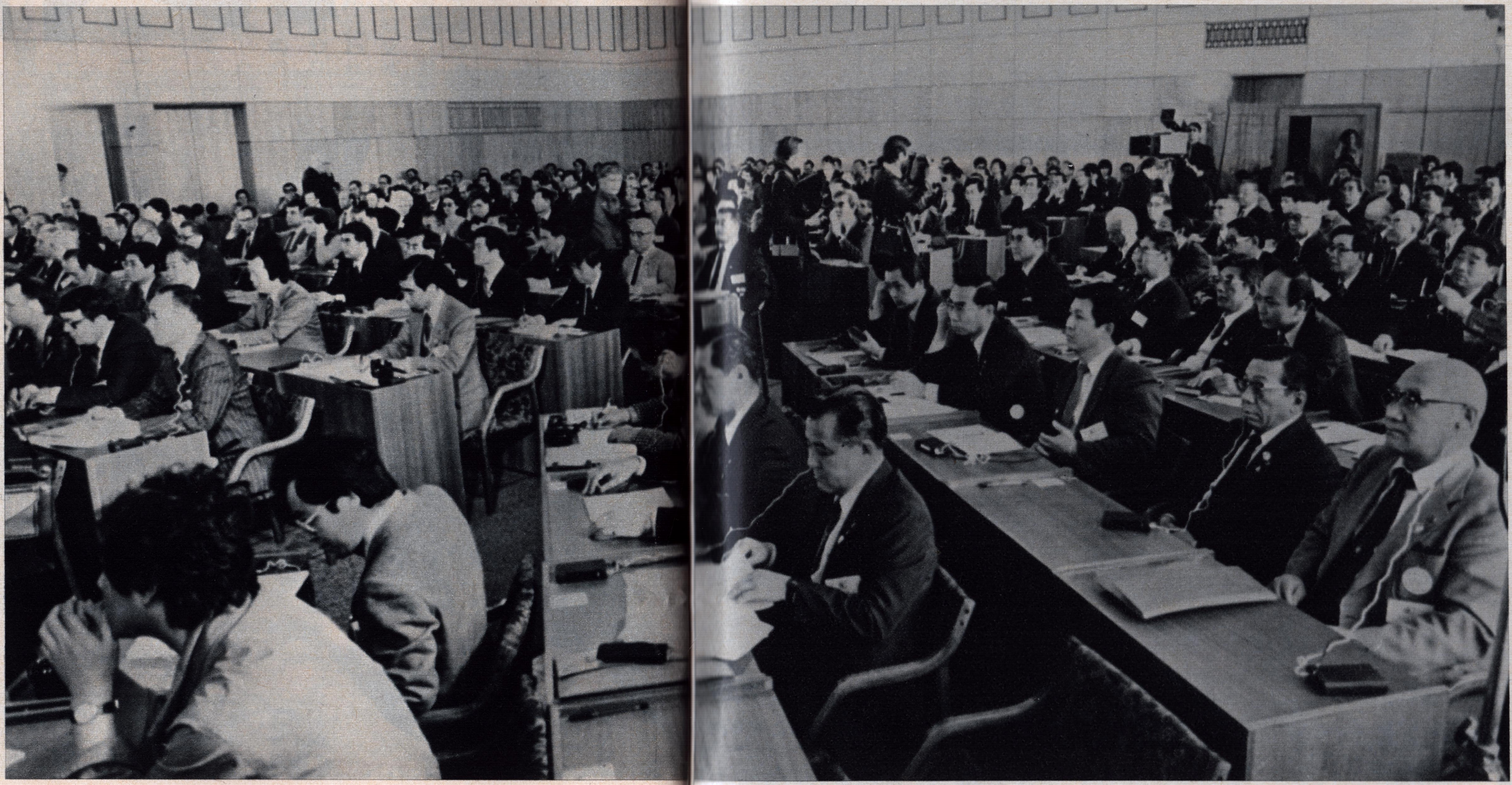
北海道とソ連極東の人々は雄々しい開拓者精神に燃え、日ソ関係の発展の前衛となっている。ハバロフスク会議の火をともし続け、日ソ両国民が争うことのないようにするために、この開拓者精神をいつまでも持ち続けよう。ぜひハバロフスクでともした灯で両国を照らそう！

ハバロフスク会議の合意事項を実行に移そうと望んでいるわれわれは、来年北海道で次の会議を開くことに決めた。われわれはここで大勢の友人を得た。これは今後の活動の成功を約束するものであり、日ソ両国と両国民の平和親善関係と協力の強化という主要目的を達成するための新しいインパルスとなるだろう。われわれは北海道での会議で皆さんに〃今日は〃とほほえみながら言うために、喜んで来年の会議


友好交流会議の会場となった市の国際会議場


漁業問題を話し合う（左から）中井照夫・釧路機船漁業協同組合専務、森川寿・信水貿易社長、A・ザイチコフ・沿海地方執行委員会副議長と小田島隆一・金井漁業常務


会議の休憩中に話し合う吉田政一・道議会自民党議員会長とアレクセイ・トカチョフ・ナホトカ市執行委員会議長


会議の全体総会

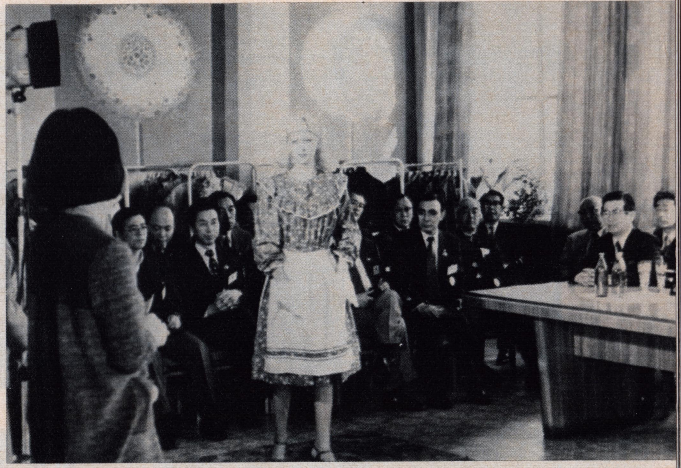

ソ連側代表団の基調報告を行うビクトル・パステルナーク


▲全体総会で共同議長となった岡田利春・日本側代表団長


基調報告を行う池島信吉氏


V・オレイニコフ・ノボシビルスク市執行委員会副議長、V・モジェイコ同市職員と語る桂信雄・札幌市助役





▲「ウォストーク」縫製工場で製品ショーを見る。
上左「ウォストーク」縫製工場で裁断工のネーリャ・ズベレワさんと語る日本側代表団の人々



「ウォストーク」縫製工場のガリーナ・チェルノワさんの家でごちそうになる日本側代表団員

を待つだろう」

ソ連側代表団長のビクトル・パステルナーク・ハバロフスク地方執行委員会議長（知事）、ソ連最高会議代議員は、「ハバロフスク会議の成果は、真の友好と互恵協力の関係の発展を願うソ連極東の幅広い社会層の確固たる意思を完全に反映している。これは、極東における平和、信頼、善隣を強化するという所期の目的へ前進するためのよい土台である。北海道会議までの時間は、ハバロフスク会議の決定を実行し、ソ日両国民間の親善関係や極東の平和を強化するための地域的協力の拡大を目的とする新しい構想を練るのに使われよう」と語った。

真剣で建設的な対話

ビクトル・パステルナーク、池島信吉両代表の総会基調報告に共通の考えは明確で、日ソ両国の隣接地域は両地域の関係の樹立と強化の道、地域的協力のあらゆる形態の発展の道を歩まなければならないというものである。こうした道だけが両地域の住民の利益に合致し、極東の平和の維持に役立つのであり、この結論は地域的な通商・経済協力、漁業協力の問題に関する報告に盛り込まれていた。

最後の全体総会で共同コミュニケが全会一致で承認された。コミュニケで



ハバロフスクの日本人墓地を訪れた一行

は、ソ日関係の徹底強化とさまざまな分野での全面協力は、両国国民の利益に合致し、極東における信頼と善意の雰囲気づくりとアジアの平和の強化に実際に役立つことができると強調されている。

ソ連極東地域と北海道の関係は、ソ日関係全体の中でかなり大きな位置を占め、いまさまざまな分野に及んでいる。貿易、漁業の分野での伝統的な協力のほか、姉妹都市（ユジノサハリンスク＝旭川、ホルムスク＝釧路、ネベリスク＝稚内、ポロナイスク＝北見、ナホトカ＝小樽、ウランウデ＝留萌）、労組、青年、スポーツ各団体、親善団体の交流や文化、スポーツ、観光交流が行われている。札幌、釧路、稚内、函館の日ソ友好会館や猿払村の記念館、羅臼町の日ソ友好センターの開設は、こうした交流の効果が大きいことを証明している。

唯一の理にかなった道

ハバロフスク会議での地域協力の切実な問題に関する率直な意見交換によって、協力をさらに改善する多様な道を見つけることができた。交流の拡大に対する建設的な態度は貿易、漁業協力を発展させる新しい見通しを開き、海運、学術交流などの分野の協力を可能にするだろう。

三〇〇年余りになる双方の交流の伝統を今後も続けるべきだという隣接地域の幅広い社会層の信念は、善隣の精神で互恵の関係をうち固め、その関係を全力をあげて拡大することこそ、現下の条件のもとでソ日関係を発展させる唯一の理にかなった道であるという命題を会議参加者が一致して支持したことに現れた。政府レベルでの前進が見られないいま、こうした立場はソ日関係で達成されたあらゆる肯定的なものを持続し、両国民間の友好関係をさらに増進するうえに、重要な意義をもつと思われる。

ソ連の生活を知る

ソ連側の会議実行委員会（委員長はタマーラ・ワセキナ・ハバロフスク地方執行委員会副議長）は、北海道から来た出席者のために、ソ連の実生活を知ってもらう大がかりなプログラムを組んだ。

ソ連東部地域のエネルギー資源の現状と発展の見通し、協同組合貿易の組織、社会保障・保険制度、水産資源の保護に関する講演、スポーツ宮殿でのフィギュアスケート選手のエキジビション、音楽コメディー劇場での観劇、美術館見学、対文連とソ日協会のハバロフスク支部の活動家との会合、児童歌舞アンサンブルのコンサート、労組文化宮殿でのソ日親善の夕べなど、催しは盛り沢山だった。

北海道からの客は、「ウォストーク」縫製工場、ハバロフスク鉄道運輸技術大学、モード会館、第30中学校、第57幼稚園を訪問し、市内を見物し、市民の住宅に立ち寄った。

滞在中の印象について川崎静一郎・北海道体育協会副議長は、学生が学習、学術・社会活動、スポーツをやり、余暇をたのしむすばらしい条件に恵まれているのを知って感心したと語り、菊池芳郎・道議会議員は「ソ連の学校の教育・訓育体制がとても気に入った。われわれは自分に役立つ新しいことを沢山吸収した」と述べた。安達敏夫・東利尻町長は「ソ連の子供がまさしく特権階級であることをはっきり知った」と語り、八田信之・札幌市議会議員は、ソ連の家賃の安さには全くびっくりしたと語った。

会議参加者たちの感想

ハバロフスク会議の成果についてどう思うかという記者の質問に対して、会議参加者たちは次のように答えた。

吉田政一氏（北海道議会自民党議員会長、稚内）――「道議会で議席の過半数を占める自民党議員会は、この会議の開催を積極的に支持してきた。会議は大成功だった。北海道とソ連極東は平和・友好・善隣でいかねばならんし、相互の交流を増進して、よいパートナーとして、日ソ両国のほかの地域のよい手本とならねばならない。ハバロフスクの人たちはとてもよくわれわれをもてなしてくれた。私は郊外の畜産場を見てきた。りっぱな経営だった。そこで働いているご婦人の家に立ち寄ったところ、とても歓待していただい

た」
ゲオルギー・エリャコフ（ソ連科学アカデミー極東学術センター幹部会副議長、ソ連科学アカデミー準会員、ウラジオストク）――「会議は地域協力のすばらしい見通しを示した。さまざまな分野での積極的な交流の増進は、偏見をうち砕き、相互理解を深め、信頼を固めるのに役立つ。われわれは北海道の学者たちとの交流を重視している。こんどの会議を機会に両国に有益な学術、教育の分野の交流が進展すればよいが、と願っている」

小納谷幸一郎氏（全北海道労働組合協議会議長、札幌）――「この会議は北海道とソ連極東の労働組合の交流を拡大するうえに、大きな意義をもつだろう。ハバロフスクでソ連の人と何度も話し合い、十分意思の疎通ができた。ハバロフスク会議を通じてわれわれは真の友人になれると信じており、われわれも手を携えて核戦争の脅威とたたかうつもりだ」

ニーナ・ドミトリエワ（ハバロフスク造船所塗装工、ロシア連邦共和国最高会議代議員）――「ハバロフスク会議は、ソ連人と日本人が平和に仲よく暮らし、互いにもっとよく知り、もっと信頼を深めたいと願っていることを、あらためて示した。こうした会議の開催が伝統となるのはとてもすばらしい。私たちは北海道の人々との交流をもっと強めたいと望んでいる。私たちの子供が仲よくなりますように！」



ソ連側実行委員長タマーラ・ワセキナ・ハバロフスク地方執行委員会副議長と永沢悟・北海道副知事は会議の開催に貢献した。

照井秀夫氏（北海道指導漁業協同組合連合会専務理事、札幌）――「私がまず言いたいのは、この会議の準備、運営のすばらしさと市民の友好的な態度である。会議は、日ソ漁民間の互恵の関係を増進する唯一の道とは、協力とパートナーシップの強化、合理的な合意に基づく漁業であることをはっきりと証明した。この点に会議の特別な意義がある」

ワレンチン・コルイチェフ（極東輸出入公団「ダリイントルグ」総裁、ナホトカ）――「この会議中に、ハバロフスクに代表を派遣したすべての商社と新しい契約を結んだ。しかしこの会議の主要な意義は、われわれが日本のパートナーと一緒に多くの原則的な問題を討議、解決し、具体的な態度を明確にし、お互いの可能性と要求をよりよくつかみとることができた点にあったと思う。このことは両国の沿岸貿易の発展に役立つに違いない」

桝川順司氏（全日本アイスホッケーチーム監督、苫小牧）――「地域的スポーツ交流の拡大がハバロフスク会議の成果の一つとなろう。北海道とハバロフスクのアイスホッケー選手の友好試合が復活すれば、両国チームにとって有益だし、興味深い。一九八六年は、ソ連の名選手が10年近くコーチをしてきた王子製紙チームの60周年を迎えるが、この記念祝賀にはスタルシノフ、リャプキンらの元コーチ全員を招くつもりだ」

エブゲニー・シェポバロフ（ユジノサハリンスク市執行委員会副議長〈副市長〉）――「旭川とユジノサハリンスクとの姉妹関係が結ばれて、もう15年になる。ハバロフスク会議はわれわれ両市だけでなく、ソ連極東と北海道のすべての姉妹都市間の接触、交流をさらに拡大するだろう。これはこれらの都市の協力形態を多様化し、ソ日親善運動にますます多くの人々を引き入れることができよう」

菅原茂氏（日本戦争体験者平和委員会代表、札幌）――「ハバロフスク会議がソ連の平和政策に対する不信を吹き払う一助になることを心から願いたい。いわゆるソ連の〝軍事的脅威〟なるものは、ひどい嘘である。ソ連は日本国民や他の諸国民と平和に仲よく暮らし、これらの国民と全面的に協力してゆきたいと心から願っている」

☆ ☆ ☆

ソ連の視点

アジア諸国民の根本的利益を基盤に

ノーボスチ通信政治評論員 イーゴリ・シニツィン

最近になって米国の政治・軍事活動の中心はますます太平洋地域とアジア大陸沿岸に移動している。ワシントンはこの地域の軍拡競争に拍車をかけ、海軍艦艇や軍用機に核兵器を搭載し、緊張を強めている。現代の帝国主義は、アジア地域で〝分割して統治する〟という植民地主義者の伝統的な方法をさかんに使っている。ソ連はこれに対してそれとは全く違う政策をとっている。モスクワは、アジア諸国民の歴史や社会制度はそれぞれ違うが、その根本的利益は相互に対立しないと考えている。

クレムリンでの金日成朝鮮労働党中央委総書記・朝鮮民主主義人民共和国主席歓迎夕食会（5月23日）でK・U・チェルネンコが言明した通り、その共通点は、平和と善隣関係の願望、武力行使の拒否、平和的手段による係争問題の解決と紛争の調整、同権と独立、主権と国境不可侵の尊重、内政不干渉、互恵を基盤とした経済などの面の協力の発展、社会的発展の道の自主的で自由な選択である。チェルネンコ・ソ連共産党中央委書記長・ソ連最高会議幹部会議長はこのような基盤に立ってアジア諸国民は相互理解に達することができる、との確信を表明した。

K・U・チェルネンコが挙げた諸原則が、一九五四年4月の中国・インド間の協定の前文で定式化され、一九五五年のバンドン会議その他の一連の非同盟諸国会議の決定に反映された平和共存5原則（パンチャ・シラ）と全く相通じる点に注目しないわけにはいかない。このような事実は、ソ連とアジアのすべての平和愛好諸国の利益が近似していることを如実に示している。

ソ連の指導者が金日成主席歓迎の演説の中で述べた考えと命題はソ朝関係だけに意味をもつものではない。それは、ソ連の対アジア・太平洋地域政策全体を浮き彫りにするものだ。

「ソ連は、貴重な時間をむだにせず、アジア大陸における情勢健全化の道の積極的で良心的な探求にとりかかることを首尾一貫主張している」と、K・U・チェルネンコは強調した。

彼が指摘したように、ソ連共産党第26回大会が極東の信頼醸成措置に関してすべての関心を持つ国々と交渉を行うことを提案し、国際世論は、アジア・太平洋諸国間の関係における相互不可侵・武力不行使条約を締結するというモンゴル人民共和国の提案を前向きに受けとめた。K・U・チェルネンコはまた、ベトナム、ラオス、カンプチアの建設的な立場と平和愛好のイニシアチブや、非同盟運動が打ち出した有益な構想を完全に是認している、と述べた。

ソ連国民は自分たちの指導者の発言を通して、朝鮮人民がその解決をめざしてねばり強く闘っている根本的な民族問題に理解を示した。それは、米帝国主義によって分裂させられたこの国の再統一の問題である。ソ連は、朝鮮が民主的基盤に立って平和的に再統一されることを、一貫して主張している。モスクワは、現行の休戦協定のかわりに平和条約に調印し、南北間の不可侵宣言を採択し、相互に兵力を削減し、朝鮮半島を非核地帯にすることを提案している朝鮮民主主義人民共和国の重要なイニシアチブを支持している。

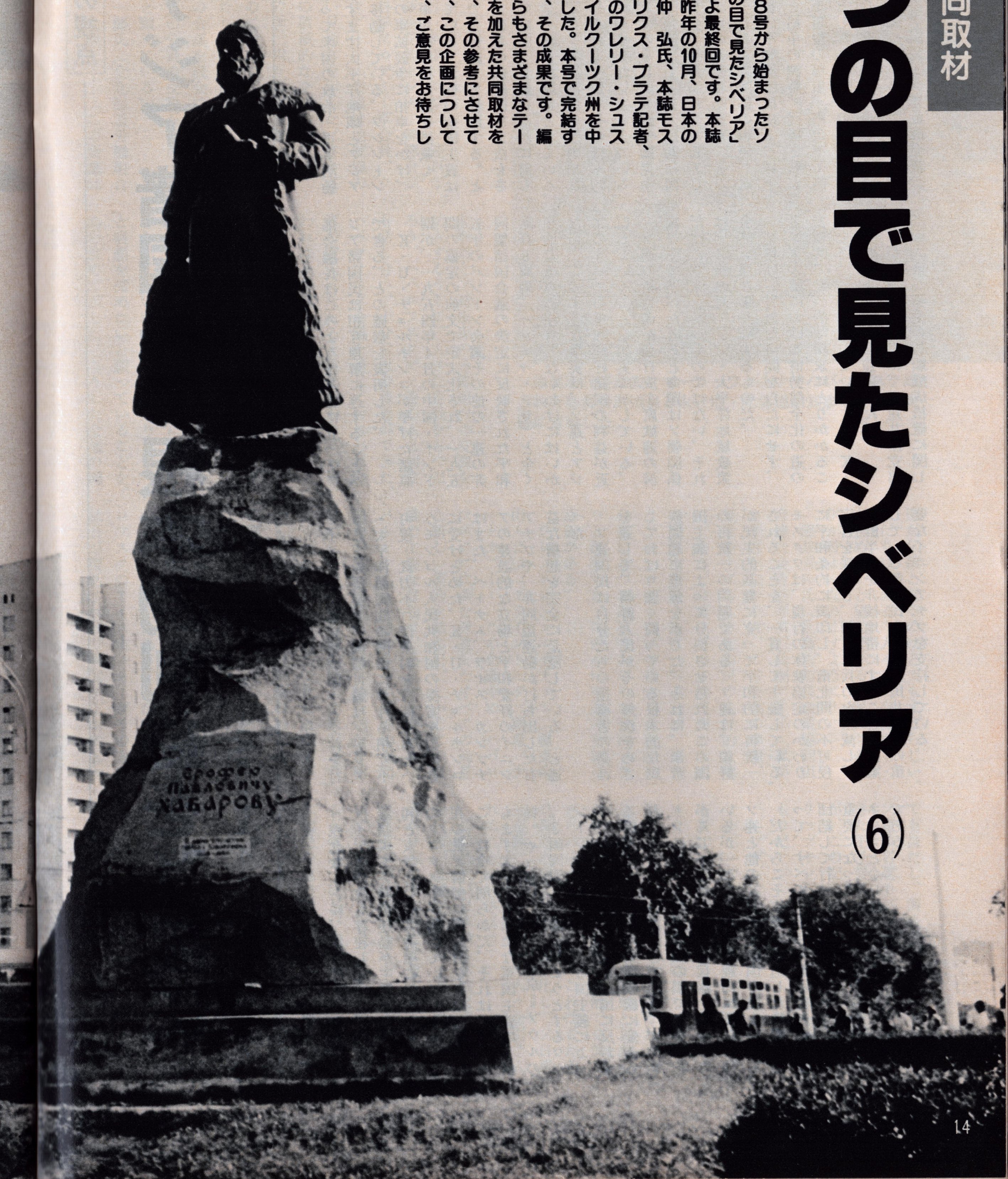
残念なことに、世界政治の数式にはマイナスの数も存在している。社会主義諸国や非同盟運動が主張している平和と友好という共通項に対しマイナスのファクターが働いていて、それが現在の世界情勢に悪影響を及ぼしていることは全く明らかだ。それは、何よりもまず太平洋に新たな軍国主義の〝枢軸〟や〝ワシントン＝東京＝ソウルの3国同盟〟を結成しようとするワシントンの試みであり、帝国主義によってアジア地域が社会主義諸国に反対する闘争のもう一つの東部戦線に変えられようとしていることである。ワシントンは軍事基地と拠点の鎖でアジアをがんじからめにし、核兵器を配備しているが、この兵器の射程内にあるのは、ソ連と他の社会主義諸国の領土である。

だからこそ複雑で緊迫した時期にあって、すべての平和・進歩勢力が一致団結して行動することが、かつてなく重要になっている、とK・U・チェルネンコと金日成主席は指摘しているのである。

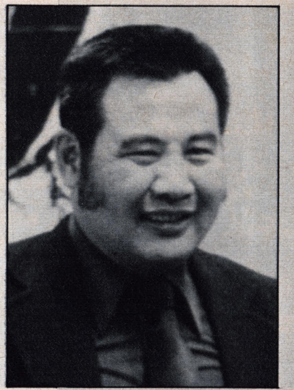
ソ日共同取材

五つの目で見たシベリア (6)

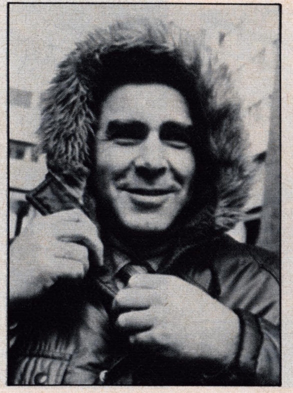
編集部から――8号から始まったソ日共同取材「五つの目で見たシベリア」の6回目、いよいよ最終回です。本誌初の試みとして、昨年の10月、日本のソ連経済専門家・仲　弘氏、本誌モスクワ編集部のフェリクス・プラテ記者、それにカメラマンのワレリー・シュストフがシベリアのイルクーツク州を中心に共同取材しました。本号で完結するこのシリーズは、その成果です。編集部では、これからもさまざまなテーマで日本の専門家を加えた共同取材を計画していますが、その参考にさせていただきますので、この企画について の皆さんのご感想、ご意見をお待ちしています。



ハバロフスク市にある17世紀ロシアの有名な探検家エロフェイ・ハバロフの像。ハバロフスクの地名は彼の名にちなむ。



仲　弘氏

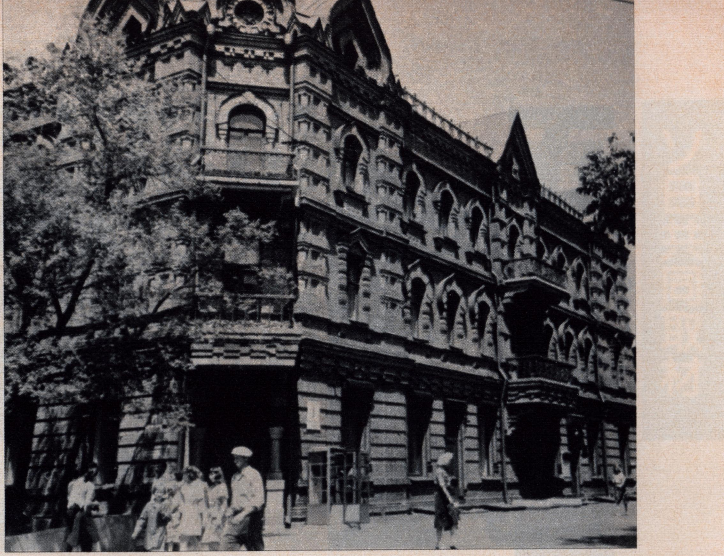


フェリクス・プラテ記者



カメラマンのワレリー・シュストフ





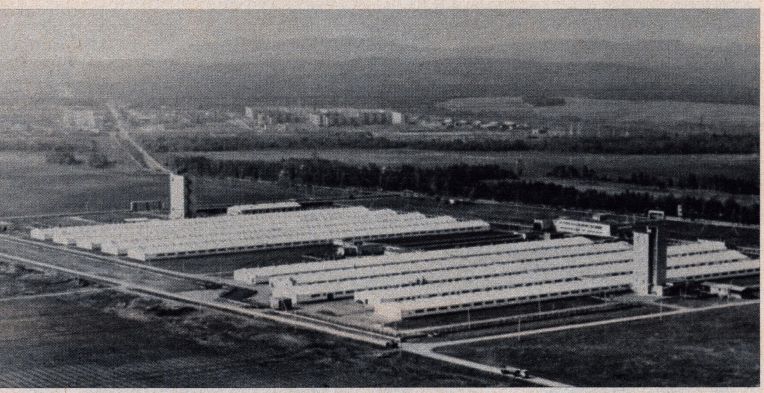
ハバロフスク市の学術図書館



ハバロフスク地方コムソモリスク・ナ・アムーレ市の製鉄工場「アムールスターリ」



ハバロフスク地方ニコラエフスク港で船に積み込まれる木材



ハバロフスク地方ネクラーソフカ養豚コンプレクス

遠くて近い極東地方

本誌モスクワ編集部
フェリクス・プラテ

われわれのイルクーツク州訪問は終わった。われわれは客もてなしのいいジェレズノゴルスク・イリムスキーと善良な協力者たち——イルクーツク州の取材旅行を準備してくれたノーボスチ通信の地元支局の同僚記者たちに別れを告げた。TU154型機は、われわれが共同取材旅行の最後の2日間を過ごす予定のハバロフスクに向けて進路をとった。

というわけで、シベリアよ、さようなら！　こんにちは、ソ連極東！

最大の経済地区

名前そのものが示すように、この地域は実際、ソ連中央部から何千kmも離れている。ここはわが国最大の経済地区で、ソ連全体の約28%の面積を占める。この地域の特徴は、一つは遠いということ。もう一つは南北に極めて長い東側の境界線が太平洋に面しているということ。したがって、この経済地区は太平洋諸国、とりわけ日本に近い。この意味では〝遠くて近い極東〟と呼ぶことができるだろう。

ソ連極東の独自な地理的条件が、この経済発展に大きな影響を与えている。この地域の経済的特徴を挙げてみよう。まず第一に、極東の海ではソ連全体の水揚げ量の約40%にあたる魚、海獣、海産物が上がることに注意を向けなければならないだろう。よく知られているように、極東のサケ・マス類とカニは特に需要が高い。

極東にはソ連の森林資源の約30%が集中している。主要な樹種はカラマツだが、特にプリモーリエ〔沿海〕地方、ハバロフスク地方、サハリンには広葉樹もかなり見られ、トネリコ、クルミ、カシワ、キハダが成育している。針葉樹で特に価値の高いのはエゾマツ、トドマツ、ベニマツである。

ソ連極東の人口分布は極端にアンバランスで、74%が南部（ハバロフスク地方、プリモーリエ地方、アムール州、サハリン州）の面積一八〇万平方kmの中に住んでいる。北部（ヤクート自治共和国、マガダン州、カムチャツカ州）は四八〇万平方kmもあるのに、この地域の人口の26%しか住んでいない。概してソ連極東では、人口密度が高いのは道路沿いや川沿いの地域、海岸のいくつかの地点、土地の肥えた場所である。

極東の将来性

ソ連極東の工業開発が本格的に始まったのはおよそ50－70年前だが、それにもかかわらず今日では、この地域は発達した工業地域と呼ぶことができる。この地域は非鉄金属資源、鉱物資源、漁業資源、木材資源の利用と、貿易を保証する発達した交通を基盤にして全ソ的な規模で専門化されている。毛皮産業と毛皮獣飼育もまた重要な部門である。すでに述べた魚と木材のほかに、極東地域は天然のダイヤモンド、金、スズ、タングステン、雲母、毛皮、皮革、大豆、米を産出する。

経済学者たちは、極東地域の経済は多角的にはなったが、まだ単一の完成した総合体（コンプレクス）にはなっていないと考えている。いまのところ、原料加工の最終段階と結びついた多くの環が欠如している。将来ここでは経済システムの改善、域内と域外の相互関係の合理化のために大きな仕事をしなければならない。

ここではバイカル・アムール（バム）鉄道の完成に大きな期待が寄せられている。これについては仲さんが書いている。バム鉄道の東部区間ではティンダからコムソモリスク・ナ・アムーレまでの直通列車の運転が一九八四年の4月末から始まった。すでに読者もご存じのように、レールの敷設はバム鉄道の全線にわたって予定の工期より1年早く、今年の11月に終わる。

バム鉄道沿線の経済開発はすでに始まっており、いくつかの地域生産コンプレクスが形成されつつある。その最初のものが、極めて豊富な粘結炭の鉱床を基盤にして作られている南ヤクート地域生産コンプレクスである。

すでに触れたように、ソ連極東地域は二つの部分——南部と北部に分けられる。南部の経済は漁業資源、鉱物資源、木材資源、農業資源の利用と発達した機械工業の上に成り立っている。将来これに製鉄、化学工業、新たな分野の機械工業が加わるだろう。

北部の経済は有用地下資源の開発とトナカイ飼養、毛皮産業、漁業の発達を基礎にしている。この地域はいまのところ個々の産業分野を除いて、あまり開発されていないが、さまざまな天然資源があるので（地図を参照されたい）、将来は極めて有望である。

ハバロフスク地方が抱える問題

私がハバロフスク市（人口五六万人）へ来たのはこれが初めてではない。極東で最も美しい（私の好みで）都市であることは言うまでもないが、ここには独自の魅力がある。われわれがやって来たのは、よく晴れた、ひどく寒い、だが雪のない日だった。ところが一夜のうちに雪が積もり、アムール川へと下るアムール遊歩道もウスリー遊歩道もすべての街路樹と植え込みがきらきら輝き出した。街はたちまち明るく、美しくなり、通りはおとぎ話の中の通りのように見え、夢の世界のような感じさえ起こさせた。

ソ連へやって来る大勢の日本人観光客あるいはソ連を経由してヨーロッパへ行く大勢の日本人観光客はハバロフスクに立ち寄る。そして、そのうちの多くはこの都市で最大の新しいホテル〝インツーリスト〟に泊まる。われわれもそこに泊まった。

ハバロフスク地方を旅行する時間はなかった。それに、計画にも入っていなかった。ハバロフスクにもイルクーツクと同様にノーボスチ通信の支局がある。われわれはノーボスチ通信極東支局の責任者エブゲニー・ブガエンコ（読者はすでに本誌でおなじみのことと思う）に、ハバロフスク地方の経済発展についてのインタビューを世話してくれるようたのんだ。

われわれは運がよかった。というのは、ハバロフスク地方ソビエト執行委員会計画委員会のパーベル・モロゾフ議長がインタビューに応じてくれたからだ。彼は根っからこの地方の人間で、ハバロフスクの鉄道運輸技師大学を卒業したあと、10年ほどコムソモリスク・ナ・アムーレの大製鉄所〝アムールスターリ〟その他この地方の企業で働き、長年にわたってハバロフスク市ソビエト執行委員会議長（市長）を務めた。だからこの地方の生活について話をしてもらうには、これ以上うってつけの人はいないというわけだ。

われわれはざっくばらんに話し合った。われわれは極東の住民の生活について、その将来について、あまりたくさんの数字や統計データを挙げずに話してほしい、とたのんだ。以下はモロゾフ議長の話である。

「この土地の生活条件を決める主要な特徴は気候だ。だが問題は、ここでは冬が長くて、寒さがしばしばマイナス50度Cに達するということにあるだけではない。もっと問題なのは、非常にしばしば、しかも急激に気温が変わることだ。これはたちどころに順調な、普通の生活を狂わせてしまう。

道路を例にとろう。冬の積雪、春と夏のぬかるみ、凍ったり解けたりのくり返しが、路面をひどく傷める。だから道路の補修とそのための特別な機械装備の維持に少なからぬ資金を使わなければならない。

ついでながら、われわれは日本製のクレーン、トラック、ブルドーザー、パワーショベルその他の機械を大いに評価しており、それらをいまよりもっとたくさん購入したい。

ハバロフスク地方では近年、ひどい人手不足が慢性化している。労働者も技術者も足りない。集中的な資本投下は十分で、これには文句はないが、労働力が足りない。労働力を集める合理的な政策が必要で、その作成のためにさまざまな専門家が精力的に働いている。

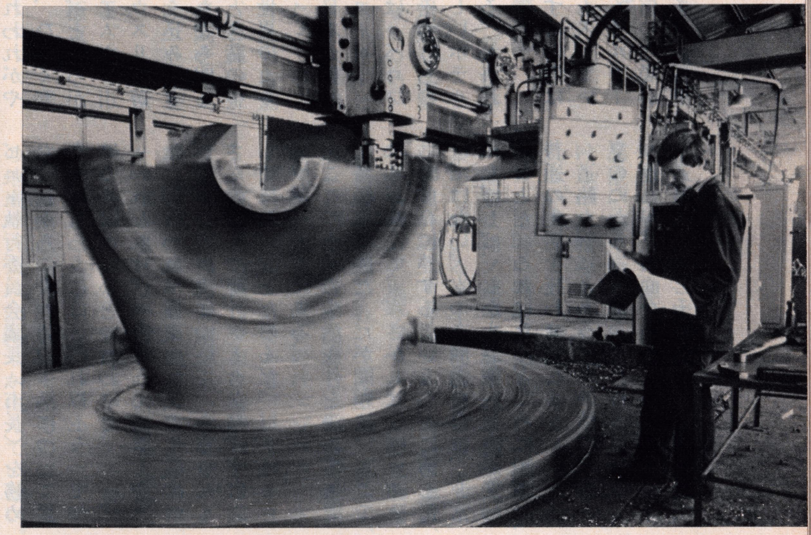
この点で特に注意を払わなければならないのは住宅建設だ。なぜなら、この分野がいちばん非難を浴びるからだ。というのも、ハバロフスク地方で住宅を建設するためには、日本よりもかなり高くつく。何しろ、ここでは壁の厚さは60cm以上なければならないし、壁の内側にはさらに断熱材を詰めなければならない。住宅建設が高くつくもう一つの理由は、ハバロフスク地方では住宅はすべて集中暖房式で、どの家庭にも熱湯が供給されるからだ」

労働力不足対策

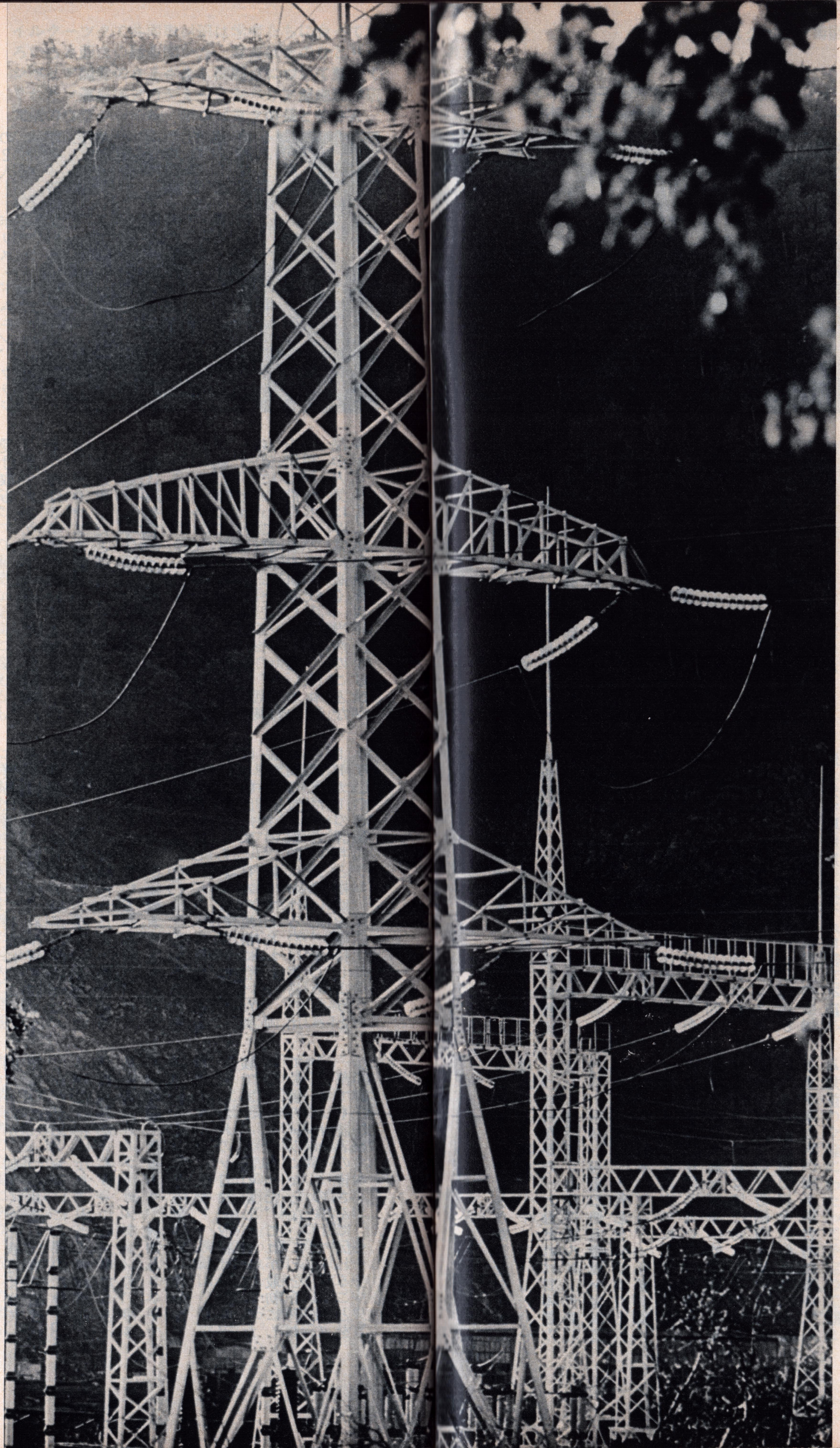
計画委員会議長が住宅建設の問題を力説したので、われわれはこれが地方当局の主要な関心事であることを理解した。この地方にはじつにさまざまな建設資材があるが、それでも、たとえばレンガなど、ある種のものは不足している。一九八二年にレンガ工場が操

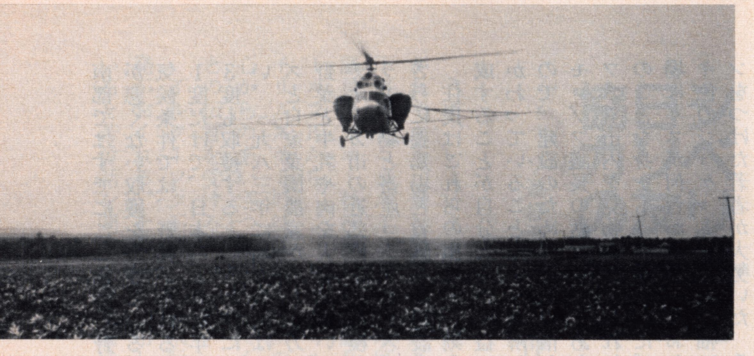


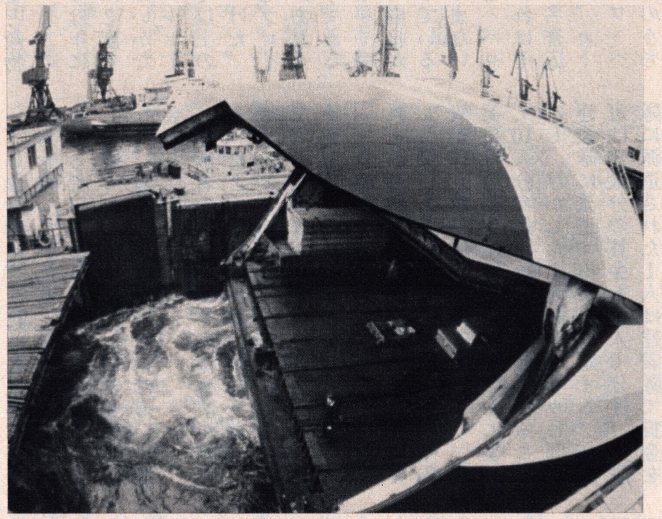


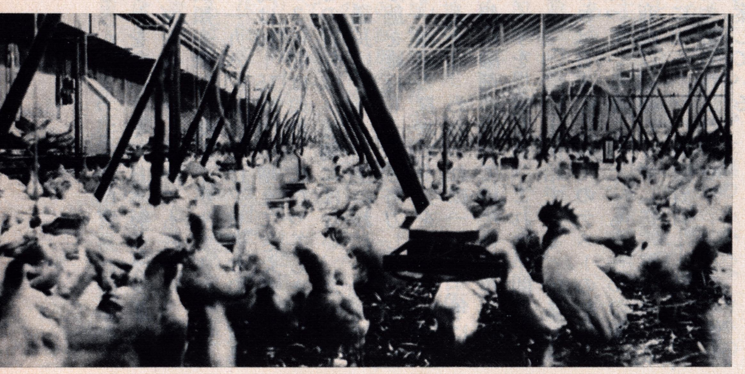


右上　コムソモリスク・ナ・アムーレ市のインタナショナル大通り
右中　コムソモリスク・ナ・アムーレ市のレーニン・コムソモール記念工場の文化宮殿で
右下　ハバロフスク市にあるエネルゴマシ工場のタービン部門
中央　アムール州を貫く送電線
左上　ハバロフスク地方"ドルージバ"ソフホーズの農薬散布
左中　ハバロフスク地方ワニノ港からサハリンへ向けて出港するフェリー"サハリン6号"
左下　ハバロフスク地方の養鶏場"ダリネウォストーチナヤ"









業を開始したが、もうすでに設備拡張の必要に迫られている。外装材がひどく不足しているため、建物の外見が画一的にならざるを得ない事態まで生じている。

モロゾフ議長の接客用のテーブルの上にはミネラルウォーターとビールの入ったびんが並んでいた。話がビールのことに及んだ。かつて"タヨージノエ"という名のハバロフスク製のビールが全国的にもてはやされていたのを思い出す。だが、ビール工場は古くなって改修中であり、一方、ビールの需要も増えている。コムソモリスク・ナ・アムーレに生産性の高い新しいビール工場を建設することが予定されており、予算も下りているのだが、例の労働力不足で暗礁に乗り上げている。

われわれはこの地方で食料供給問題がどのように解決されているかに興味を持った。モロゾフ議長の話によれば、

南部ではすでにここ数年、野菜と穀物が悪くない収穫を上げている。ここの気候条件では、野菜がとれるのは年に1度だけで、日本のように年に2度も3度も収穫するというわけにはいかない。一九八三年に地方当局はコルホーズと自家菜園農家から一二万t以上の野菜と牛乳や肉を大量に買いつけた。ナホトカ市の近郊には大規模なブロイラー工場と畜産コンプレクスがあり、さらに養鶏場と養豚場が建設中である。

住民はこれらの施設が一刻も早く完成することが自分たちの利益に直接かかわっていることをよく理解しているので、建設のための援助を惜しまない。モロゾフ議長の話を聞いたあとハバロフスク市内を見物して、われわれはそのことを身をもって確信した。名誉広場にバスが何台か止まっており、カーキ色のジャケットを着て、袖にワッペンをつけた若者が大勢いた。そのうちの2人――ボリス・ドムニン、ウラジーミル・ローテンベルグと知り合いになり、彼らから聞いたところによれば、ちょうどいまハバロフスクでハバロフスク地方コムソモールの建設隊の集会が開かれているとのことだった。建設隊というのは、建設に必要なあれこれの専門職を身につけた若者たちの自発的な集まりで、彼らは本職の建設者と協力して、さまざまな施設、主として直接住民に関係する施設が早く完成するよう手伝う。今度の集会は建設隊創設10周年を記念するもので、ここで成果を総括し、経験を交流するのだという。建設隊のメンバーは作業班を組んで、2―4カ月（ときにはもっと短い）単位で働く。これは各人が本来の仕事を持っていたり、学生だったりするからで、学生の場合は夏休みを利用して働く。これは結構いい学資稼ぎになり、有益な技能を身につけるいい機会にもなる。

労働者の場合はいくらか事情が異なる。たとえば、われわれが知り合ったボリスとウラジーミルはともに運転手で、ボリスはニコラエフスクから、ウラジーミルはコムソモリスク・ナ・アムーレからやって来た。建設隊ではそれぞれの労働集団（作業班）の代表として働いている。仮に、運転手の作業班が10人から成っているとしよう。作業班は労働生産性を高めることによって10人分の仕事を9人で遂行することにし、浮かした1人を3―4カ月間、建設隊に派遣するよう決定する。作業班は10人分の賃金を9人で分け、建設隊に派遣された1人は建設隊で賃金を受け取る。

ボリスとウラジーミルは、建設隊に来たのは5年間でこれが4度目で、いまハバロフスク近郊に畜産コンプレクスを建設中だと話してくれた。

沿岸貿易の展望

パーベル・モロゾフ計画委員会議長の執行室でのインタビューに話をもどそう。われわれはソ日間の沿岸貿易の展望について質問した。ハバロフスク市民は沿岸貿易を肌身に感じているのか？　モロゾフ議長の話では、日本商品の人気は非常に高く、当然のことながら、市民は日本の商品が店にあるかどうかによって、沿岸貿易が盛んかどうかを判断する。日本製のラジオやテープレコーダーはいつも好評で、逆に衣類や傘は人気がないという。

一九八〇年まではソ日間の沿岸貿易高は10―15％ずつ増えてきたが、最近の3年間は頭打ちになってしまった。その責任はソ連側にはない、とモロゾフ議長は言う。「逆にわれわれはこの形態を維持しようと努力しており、新しい商品の探求に全力を注いでいる。たとえば、われわれは一九八三年に日本側に融剤の入っていないアルミニウムくずを提案した。これは年間二〇〇〇―三〇〇〇t供給できる。いまわれわれは日本の工場でのテストの結果を待っているところだ。もう一つの新しい商品は銅線のくず（送電線製造のさいに出る）だ。建設資材――砂、砂利、置き物や外装のための半貴石その他も提案している」

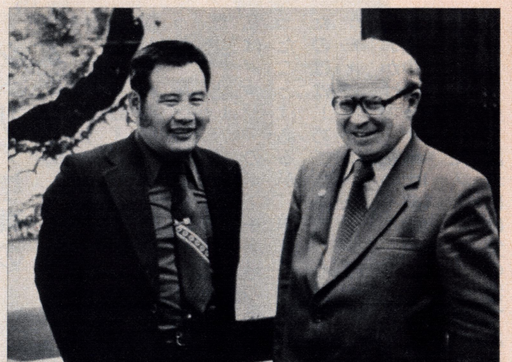
貿易は双方にとって利益になる。たとえばワニノ港では、沿岸貿易のもうけでチップの加工工場が建設された。とこれは大きな利益を上げている。というのは、ここで作られたチップもまた日本へ輸出されているからだ。ハバロフスクから一二〇㎞離れたところに年産能力一万五〇〇〇―二万立方ｍの製材工場が建てられた。日本の商社の協力によって建てられたこの工場は、もっぱら輸出用に、日本の規格に合った製品を生産する。総じてわれわれは、両国間の貿易総額における沿岸貿易の比重はまだ小さいとはいえ、まじめなパートナーの評判と権威を維持しようと努力している」

……地方ソビエト執行委員会でのインタビューのあと、われわれはソ日協会ハバロフスク支部に招かれ、ハバロフスク市と新潟の姉妹都市関係の発展や日本人のためのソ連極東観光旅行の展望について話を聞いた。仲さんの要望に応えてミハイル・ツベートチェフ歴史学教授が、最近発見された国内戦時代と二〇年代の極東での外国軍の干渉に関する文書について話してくれた。われわれはハバロフスク地方について の記録映画を見せてもらった……

一緒に過ごす最後の夜がきた。あすになれば、仲さんは新潟へ、私とシュストフ・カメラマンはモスクワへ飛び立つ。ホテルのレストランに席を取って、本誌にだれが何について書くか、内容がダブらないよう、最後の確認をする。だが、何か非常に大事なことがお互いに口に出てこない。それは多分、12日間というあまり長くはない期間だったが、朝早くから夜遅くまで一緒にいて、一つの共通の仕事で結ばれていたため、お互いに人間的に身近な、必要な存在になり、本当に別れがたかったことだ。もう一つの大事なことは、私もシュストフ・カメラマンも、仲さんの博識、仕事ぶり、機知とユーモアの感覚、まれに見る善意に、すっかり敬服していたことだ。

われわれのソ日共同取材は一種の実験であり、本誌の新しいジャンルのためのテストであった。これが最初にして最後の試みにならないことを希望する。われわれがこの旅行で得た印象の一部でも読者の皆さんに伝わることを念じてやまない。

イルクーツクで共同取材班は学者たちに会っていろいろと面白い話を聞いた。写真はそのひとり、シベリア開発のさまざまな問題点について話してくれたソ連科学アカデミー・シベリア部地理学研究所のウラジーミル・ボロビヨフ所長と仲さん。



シベリアを日ソ友好と協力の地に

ソ連経済研究家　仲　弘

さて、いよいよイルムの地ともおわかれである。飛行場まで見送りにきて下さったニジネイリムスク地区人民代議員ソビエト執行委員会副議長のダニーロフ氏から、ジェレズノゴルスク・イリムスキーの姉妹都市酒田の皆様へ心からのあいさつをつたえてくださいとの伝言を受ける。

イルクーツクが霧のため飛行機の出発がおくれる。その間を利用していろいろと苦労話を聞く。数年前に近くのタイガで大きな山林火災が発生した時、ダニーロフ氏は一週間不眠不休で消火の指揮をとったという。彼は、ジェレズノゴルスク市内をはじめ、地区の各地の企業活動を一部中止させて、労働者たちで消火隊を編成し、延焼を食いとめたとのことである。企業長たちにはうらまれたが……と彼は苦笑する。

企業城下町の民主主義

このことを彼は淡々と、地区の日常のできごととして話してくれた。しかし、私には、これは私が今までいだいていたふたつの重要な疑問に答えるものであった。

そのひとつは、ソ連の人民代議員ソビエトとその執行委員会、つまり地域の行政機関と企業との関係である。ジェレズノゴルスクは、日本流にいうなれば、ソ連鉄鋼業省に所属するコルシュニーハ鉄鉱山の「企業城下町」である。ほとんどすべての企業が、この鉱山の事業をささえている。日本では、大企業のなかで火災がおきても、鉱山で事故があっても、市役所や県庁への報告はあとまわしになることが多い。山火事があったからといって、製鉄所や関係企業の仕事をストップさせて、従業員を消火作業に動員することなど思いもよらない。ソ連では、「企業城下町」における人民権力と大企業との「力関係」はどうなっているのかというのが私の素朴な疑問であった。

ソ連の新憲法では、第九十二条で明確に企業に対する人民代議員ソビエトの監督の権利を保障している。しかし実際はどうだろうか？

ダニーロフ氏の話を日本人にわかるように要約すれば、山林火災の消火作業を副知事が指揮し、地区内の企業に命令を出してその一部の作業をストップさせて労働者を動員したということになる。住民によって選出された地区の人民代議員ソビエトと、その執行委員会が、実際に、モスクワに直属する大企業を指揮監督している実例をその当事者自身から聞いて、私は、発達した資本主義国の民主主義の最大の問題点、すなわち、企業のちから、カネのちからに住民のちからが勝てるかどうかという問題が、社会主義のもとでの民主主義制度では、実際に解決されつつあることを知った。

第二の疑問点は、おなじくソ連憲法の第九十二条と第九十三条に関係してくることであるが、国家的大事業である地域生産コンプレクス（総合体）と地域住民の代表によるその建設と運営への参加の問題である。この問題はソ連の経済学者の間でもさかんに議論されている。

ソ連は日本とちがって社会主義の経済体制であるから、政府は行政機関であるばかりでなく、経済企業を経営する責任ももっている。たとえば、自動車はすべて自動車工業省に所属する自動車工場で生産されている。ブラーツク地域生産総合体には、多くの中央官庁、経済機関の企業が集中しており、多くの建設事業は、その直接の所管省庁から他の省庁の企業に依頼する形で、つまり委託契約の形で行われている。たとえば、ソ連邦鉄鋼業省の重要な企業であるコルシュニーハ鉄鉱山の建設は、ソ連電力省の所属企業であるブラーツクゲスストロイに委託されている。訳語として適当ではないが、日本の請負制に相当する。一九七九年のデータによれば、ブラーツク・ウスチイリムスク地域生産コンプレクスは、十八の省が発注者の立場にあり、十一の省が請負者の立場にあり、五つの省がその双方をかねている。

中央の利害のからんだ、このような複雑な地域生産総合体の建設を調整する公式的な機関は、西シベリアの石油ガス採掘・加工地域をのぞいては、今のところ存在していない。ブラーツクでは、ブラーツクゲスストロイが強力なイニシアチブを発揮しているのが特徴である。ブラーツクには市内の企業代表の会議は存在するが、決議も決定も行わない。市外の企業はこれに参加すらしない。

地域生産コンプレクス（総合体）とは、地域経済の計画、形成の段階にのみ適用される概念であるという見解も、ソ連の学者の間では有力である。

いずれにせよ、ひとたび工業地帯が出現し、住民が定着しはじめれば、実際にそこではたらき、生産し、国民経

済の富をつくり出してゆくのはその人達である。地域経済の管理運営に、住民の代表、地方政府がどのような形で参加するのか？

この問題は、基本方向は前述のとおり憲法で示されているとはいえ、完全に答えが出たわけではない。

しかし、地域生産コンプレクスの運営に、地域の人民代議員ソビエトがその「権力」を行使している例を具体的に聞けたことは、ソ連経済研究者としての私にとっては、非常に重要な示唆をあたえてくれた。ソ連では、工業の中央集権的管理と、地域人民代議員ソビエトによる地方自治との組み合わせによる、あたらしい民主的な経済運営の形態が、近い将来うまれるであろうことを私は確信している。

シベリア極東の友好運動

正午ちかくになってイルクーツクの霧が晴れ、飛行機が出発することになった。飛行場長が、『ソ連民間航空の歴史』という本を記念に贈ってくれた。私はグルジアのポーチ海港の港長と会ったことはあるが、空港長と知り合ったのははじめてである。今後もこういうチャンスはなかろう。飛行機の遅延のおかげで、私のイルクーツク・テレビのインタビューも流れた。せっかく準備してくれたノーボスチ通信のオストロウーモフ記者には気の毒であるが、私にとっては「ばんざい」である。

そのかわり、シベリアと極東における対日友好感情、そのあらわれである友好運動について、ここで書かないわけにはいかない。

このことについては多くの人が書いている。しかし、私は、すこしちがった視点から書きたい。

ハバロフスクの地方博物館には、日本軍がイルクーツクの市街を砲撃している写真がある。日本軍の将校が、ソビエトの人達を刀で切り殺したり、銃殺したりしたあと、その死体の前でとった「記念写真」がある。ウラジオストクの港に碇泊する日本の軍艦、市内を行進する日本軍の写真もある。

これは、ソビエト革命のとき、うまれたばかりの労働者と農民の国家を叩きつぶすために一九一八年から一九二五年までつづけられた「シベリア出兵」の時の写真である。

シベリア出兵は、アメリカの提案で行われた。私は、イルクーツクで、米軍の司令部となっていた青塗りの家と、その対岸にある日本軍司令部であった家の両方をみてきた。もと米大統領アイゼンハワーは、この時若い士官として、イルクーツク占領に参加した。

まぼろしに終わったアイゼンハワーの訪ソがとりきめられたとき、彼はイルクーツクの訪問を希望した。イルクーツク市民は、彼のかつての行為に目をつぶって、歓迎を準備した。

日本軍は、アメリカ軍よりはるかに





建設中のゼヤ水力発電所(アムール州)

下　ソ連極東の海の門――ナホトカ港(プリモーリエ地方)

大量の軍隊をおくり、最後までのこった。日本軍のシベリア出兵は、アメリカのベトナム侵攻にも比すべき侵略であり、ソビエトの民衆に大きな災難をもたらした。

日ソ間にはその後いろいろな事件があり、個人的にはソ連に対して報復的感情をもつような立場におかれた人々もあり、それが、現在の「ソ連脅威論」の宣伝とかさなって、日本人の「反ソ感情」の一部をなしていることは否定できない。

しかし、この論理でゆけば、ソ連の人達の「反日感情」は、日本人の「反ソ感情」よりも百倍も強烈であって当然である。

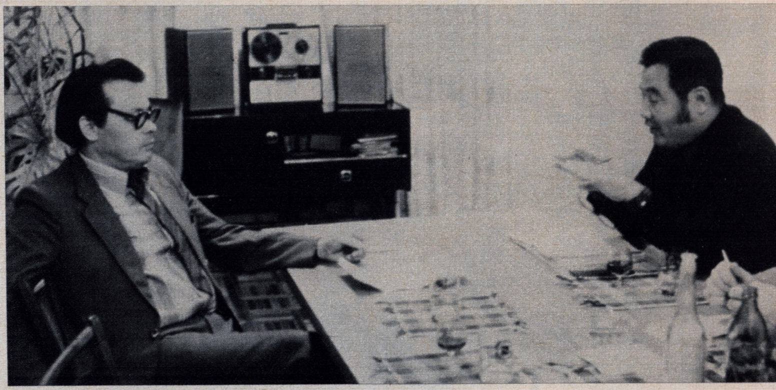
それにもかかわらず、ソ連の人々は、日本との平和と友好を求めている。私には二十五年にわたるソ連市民との交際の中で、強烈な反日感情をもっていた一人のグルジア人を知っているにすぎない。彼はノモンハンの戦闘に参加し、ジューコフ元帥のコックをつとめていた。しかし、彼の息子が日本人と知りあい、自分の家につれてきて以来、日本人観をあらためるため、隠居の身でありながら、日本人を招待した時にかぎってグルジア料理の腕をふるうようになった。

一部に、ソ連の友好運動は、上からの音頭とりによる「官製運動」だという意見がある。

たしかに、各地のソ日協会は、名士をあつめ、労働組合や各種組織の「団体会員」が多い。しかし、友好団体の役員になっている「各界名士」の身になってみたらどうだろう。たとえば、ハバロフスクで、ソ日協会の会長は、同市の工業大学の学長であるダニロフスキー教授である。私はハバロフスクに一晩滞在しただけであったが、その一晩をともにして下さったのは、このダニロフスキー学長と、ハバロフスクの教育大学の歴史学部のツベートチェフ教授であった。イルクーツクでは、経済研究所のフィリシン教授におなじように一晩御世話になった。私は、研究者の一人として、この人達の「一晩」の価値をいやというほど知っている。この人達の頭脳は夜もおそくまで休まない。その積みかさねがソ連の科学をささえている。大学の学長と教授が一人の名も知られていない日本人のために一晩おそくまで話しこんでゆく――これは単なる個人的な感情からでもないし、「官製運動」の義理からだけでもない。

おなじような自覚と自発性が、市民

イルクーツクの経済学者ゲンナジー・フィリシンは仲さんが特に関心を持っている問題の専門家。ソ連科学アカデミー・シベリア部経済研究所の東シベリア地域経済・生産力配置部長のポストにあり、日本との経済関係にも関心が深い。



のレベルで発揮されているのは、イルクーツクのソ日協会の会員たちでつくられた「兼六園クラブ」である。このクラブには、「団体会員」はいない。個人加入であり、しかも、日本語を勉強し、日本文学を読み、かならずサークル活動で積極的に活動しなければ会員になれない。「ソ連共産党に入党するよりむつかしい」と会員の一人が冗談を言ったほどである。

ソ連の人達が日本との友好をのぞむのは、第一に、平和が、自分達の生活の向上にとってどんなに大切なものであるかをよく知っているからである。第二に、日本との経済交流の発展が、双方の経済の発展を促進し、両国の人々のくらしを豊かにするものであるからである。これらのことについては、すでに多く書かれているから、これ以上書くのはひかえよう。さいごに、私は、ソ連国民の友情のなかに、はたらく人々同士の相互の尊敬があることを指摘したい。このことを何よりもよく示しているのは、日本の干渉軍がシベリアから撤退せざるをえなくなった大きな原因のひとつとして、「コメ騒動」の名で知られている日本の勤労大衆の生活防衛の歴史的な大運動を、ツベートチェフ教授が高く評価していることであろう。また、シベリア干渉のとき、赤軍の側に立って、日本軍の兵士たちに、戦争をやめるよう勇敢な宣伝活動を行ったサトウ・ミチオの名は、極東のソビエトの人々は誰でも知っている。しかし、シベリア干渉に反対してたたかった日本人は彼一人ではない。ツベートチェフ教授は、日ソの歴史家による共同研究の必要性を強調された。

ユダヤ自治州のこと

ふたたび経済の話にもどろう。ハバロフスクでノーボスチ通信社のブガエンコ記者が準備してくれていた極東経済研究所のチチカーノフ所長との会見が、これまた飛行機の都合で実現できなかったが、ハバロフスク地方計画委員会議長モロゾフ氏が会って下さった。十年間以上もハバロフスク市長をつとめておられた方である。国際関係及び沿岸貿易担当のブレンコフ、クズリャーキン両氏も同席された。

ハバロフスク地方について、本格的に書くとすれば、ふたたび本誌に五回か六回連載しなければならない。これは、将来のテーマとしてとっておこう。モロゾフ氏の話の中で何よりも印象にのこったことは、同氏がハバロフスク地方のゆたかな将来性とともに、現在直面している困難をあけっぴろげに話してくれたことである。何よりも大きな困難は、労働力の不足である。モロゾフ氏は、日本のこともよく知っていて、すべて日本との対比で話をする。労働力の確保のためにはまず生活環境をよくしなければならない。そのためのカギは、住居と農業、そして文化である。そして、人口は増えつつある。畜産に力を入れている。タマゴは自給できるようになった。バム鉄道もハバロフスク州内では開通し、沿岸貿易のために木材輸出をふやせるようになった。要するに、発展は急速だが困難は大きい。

私の方で用意していたのは、ユダヤ自治州に関する質問であった。これは第二次大戦終了までは自分の国を持たなかったユダヤ人に、自分達の故郷を与えようとする、世界最初の試みであった。今年で州創立以来五十年になる。イスラエルと中東の問題が世界の「火薬庫」となりかねない現在、ソ連ではじめてつくられた「ユダヤ人の土地」は、当然私の興味をひいた。

しかし、ユダヤ人もロシア人も他の民族とおなじようになってしまった現在のソ連の国内の状況にあっては、私の質問は、経済建設に熱中しているモロゾフ氏にとっていささか予期していなかったもののようである。どう答えて良いかすこし考えたあと、土地は極東南部、アムール川沿いの気候の良いところであり、シベリア鉄道の沿線であり、ユダヤ人たちの代表者がみずからやってきて納得してえらんだ土地であって、州都ビロビジャンを中心に農業も工業も発展していると話してくれた。イディッシュ語が公用語として使われ、フィルハーモニーもあり、民族文化も尊重され発展しているとのことである。実は、これらの点までは私自身もしらべて知っていたことだが、さいごにモロゾフ氏は、こうつけくわえた。

「さいきんソ連からイスラエルへ移住するユダヤ人のことが話題になっているようですが、このユダヤ自治州から移住していこうという希望者は一人もでていません」

私にはこれだけで十分だった。私はソ連国内にもユダヤ人の友人が何人もいる。その一人は「世界中の港に親類がいるよ」と冗談まじりに言ってさえいる。けれども、私の知るかぎり、彼等はソ連の生活に満足している。そして、私は、その前日、ハバロフスクの市内でイディッシュ語の国語教科書をみて、その印刷の立派なことにおどろいたばかりなのだ。私は満足して質問を打ちきった。

世界とつながるシベリア

さて、いよいよ締めくくりをしなければならない。イルクーツクのシベリア・極東地理学研究所長のアカデミー準会員のボロビヨフ教授、科学アカデミー・シベリア部経済研究所東シベリア地域経済・生産力配置部長のフィリシン教授、極東に関してはモロゾフ氏との話、そして私が見たこと、聞いたことを総合して考えれば、どういうことになるだろうか。

日本の伝統芸能の「三題ばなし」になぞらえていえば、シベリアと極東の問題は、「資源・交通運輸・国際関係」の三つのことばをカギとして考えることができるだろう。この三つは切りはなすことができない。

資源と交通の問題は、すでに述べてきたことで十分であるとしよう。問題は、シベリア・極東と外部世界の関係である。

たとえばシベリアとアフリカのあいだにはどんな関係があるだろうか。私は今回の旅行中に、シベリアで、二度、アフリカと「ぶつかった」。

その第一回はバイカル湖のほとり、湖沼学研究所においてである。バイカル湖は、地質学的にみると、アフリカのタンガニーカ湖と双生児であるという。大陸がふたつに割れて、海ができはじめつつある地溝にできた湖――そういう意味で、バイカル湖とタンガニーカ湖は世界でただふたつのユニークな存在である。

第二回めに思いがけずアフリカが顔を出したのは、私がながい間いだいていた疑問をフィリシン教授にただした時である。

アンガラ川、エニセイ川の電力のコストの安いこと、そして、この電力によって、低コストのアルミニウムが大量に生産されていることは周知の事実である。しかし、シベリアで採掘されているネフェリンからアルミニウムの原料であるアルミナを工業的に生産する技術が、ソ連で開発され実用化されているとはいえ、アルミナはボーキサイトから生産する方がはるかに経済的であることは、ボロビヨフ教授も話されたところである。ボーキサイトの埋蔵量はソ連全体でもあまり多くはない。しかもソ連はフランスのペシネ社から百万トン・クラスのアルミナ製造プラントを輸入し、黒海沿岸に建設した。シベリアのアルミニウムの原料はすべてシベリアのネフェリンによって保障されているのであろうか。

フィリシン教授は、話題が核心に入った時の学者に特有の表情でうなずき、ギニアからボーキサイトを輸入し、黒海沿岸でアルミナをつくり、シベリアで精錬するのが、今のところ経済的に一番合理的であり、ソ連はまさにそうしているのである、と答えた。

ギニアは日本から遠い。日本人はギニアのことはほとんど知らない。ギニアは、世界中のアルミニウムの生産を二百年以上にわたって一手に引き受けられるだけのボーキサイト資源を有している。しかも、この国は、フランスの植民地支配から脱し、独立した経済発展の道を歩んでいる。ボーキサイトの取引は、ソ連にとっても、ギニアにとっても、おたがいに有利な通商関係の一例といえよう。

もっとも、シベリアでは、バム鉄道から七十キロメートルのところで、地質学者たちが世界でも類のない鉱石を発見した。アルミナとカリ塩を一緒に含んでいるもので、発見地にちなんで、「スイヌイリート」と名付けられたこの鉱石は、全ソ連のアルミの需要を数百年にわたってみたす可能性をもっている。しかし、これは、将来のはなしである。

日本は、世界で三番目のアルミニウムの生産国であり、また消費国である。ボーキサイトはオーストラリアから輸入することができるが、アルミニウムのコストの八十パーセントは電力である。シベリアのアルミ開発に協力し、同時にギニアのボーキサイト鉱山に投資しているフランスは、日本よりもかしこいとはいえないだろうか。

今年の一月、西シベリアの天然ガスが欧州横断パイプラインを通って、遂にフランスに送られはじめた。いっぽう、ヤクーチアのガス開発をめぐる日ソ間の経済協力は「凍結」したままである。これは、ヤクーチアが寒いからではない。

ハバロフスクでは、極東の国際関係の複雑さは身にしみて感じられるが、それでも、要人たちが経済協力の相手として考えているのは、まず第一に日本であることは疑いがないように私には感じられた。しかし、一月末の新聞を読んで私は驚きを禁じ得なかった。西ドイツの経済代表団が、経済協力について相談するために、ハバロフスクを訪れたというのである。

シベリアとソ連領極東を舞台にして、何が起こっても不思議ではない。世界最大の油田も、銅鉱山も、石炭資源もここにある。世界最長の鉄道があり、今年中にはその二本めが開通する。おなじように、ある日突然、我々が驚くような国際間の取引が発表されても不思議ではない。じっさい、西シベリアと欧州を結ぶ五千キロのパイプライン計画は、我々の知らないあいだに西独と協議がすすめられ、数年前に突然発表され、そしてもう完成している。

シベリアとは、そういう土地である。そして、そこに至る道は、地理的には遠くないのである。



アムール河畔に立つハバロフスクのインツーリスト・ホテル

ソ連極東で見られる山ユリ



▶ハバロフスク地方のハス



ハバロフスク地方チルナフ村の養魚場でとれたイクラ



▶ソ連極東に自生する薬草エレウテロコック





猟師たちから毛皮を集めるヘリコプター（ヤクート自治共和国で）

旅行中のプラテ氏との会話から(6)

仲 弘

日ソ経済協力発展の条件について（続き）

プラテ「ソ連では、日本が平和憲法をもち、軍事費に多額の資金をつぎこまず、経済力の強化にふりむけたことが日本の経済発展に大きな役割を果たしたとみる学者がたくさんいます。アメリカも馬鹿ではありません。今日日本に軍事力の強化をおしつけ、防衛負担を増大させようとしています。『ソ連脅威論』はそのための道具です。

他方、私は日本の経済指導者たちを、自分のジャーナリストとしての活動の中でよく知っています。私のみたかぎり、永野さんも安西さんも、遠くまで読みのきく立派な人々です。とくに、私は、安西さんの機動力と決断力に感嘆したことがあります。このような人々がいながら、どうして日本が対ソ関係を冷却させようとしているのか、私には不可解です」

仲「日本が軍備をもたず、経済力を強化できたのは、日本国民の平和への意欲とともに、日本をアジアにおける社会主義国との戦争のための工業基地とするアメリカの政策の結果でもありました。50年代の朝鮮戦争で、このことは立証されました。もちろん、日本の国民の大多数は、軍国主義化を望んでいません。ソ連に友好感情をもっている人が今のところ多くないにしても、ソ連と戦争すべきだと考えている人はいないといえます。財界人は、それなりにリアルにものを見ているから、なおさらです。

しかし、日本の外交の対米従属性の根源は、さっき言ったように、日本の経済体制の対米依存性にあるのです。日米間の経済矛盾が激化していることは事実です。しかし、これを、日本は、いまのところ、アメリカと協力して、環太平洋諸国に対する支配をつよめることによってきりぬけようとしています。そこで軍事力強化のために『ソ連脅威論』は日本の一部の勢力にとっても有用なのです」

プラテ「シベリア開発に関する私たちの意見交換とおなじように、ここでは、私は日本の客観的な利害を『外から』ながめ、論評する立場です。私は、日本の針路は日本人自身がきめるべきだという立場ですから、これ以上のことは申しません。しかし、現在の日ソ関係の冷却化、とりわけ日ソ経済関係の発展のストップは、ソ連と日本の両国にとってマイナスの効果しかもたらさないことは明らかだと思います」

仲「その点はまったく同感です。しかし、もう一度『内側から』の立場を言わせていただければ、本当の日ソ経済関係の安定的発展には、国民のレベル、庶民のレベルの平和運動の力が、政府の政策に影響をあたえるようになることが必要条件でしょう」

プラテ「私達は、日本の政府も、日本の大実業家も、そして一般国民も、みんなが、日ソ間の友好が双方の利益になるということを理解してほしいと思います。そして、ソ連では、政府も、一般国民も、みなおなじように日本との友好関係をねがっているということを知ってほしいのです」

わかれにあたって

私達は、いつもこのようにかたい話ばかりをしていたわけではない。おたがいに冗談を言いあい、日本語やロシア語の勉強のむつかしさ、学生時代のエピソード、教授たちのことを話しあった。これは、おたがいのプロフェッショナルな問題で、日本人とソ連人の考え方のぶつかりあいというわけではない。途中であった人々の批評をし、酒を飲み、女性に関する話をし（男性同士として当然のことであろう）、おたがいの長所と弱点をさらけ出しあいながら旅を続けた。

ハバロフスク空港で、プラテさんは、冗談に泣き声を出して、「仲さん、わかれのときがきました。なんとつらいことでしょう」と言い、ブガエンコ氏（ノーボスチ通信ハバロフスク支局）をまじえて、「別れのさかずき」をあげて乾盃した。

たくさんの人の協力を得たこの記事、「今日のソ連邦」誌でもはじめての企画が、どのような評価を受けるか、今の私たちには見当もつかない。いまは、これが、読者の気に入り、興味をよび、参考になり利益になること——これが二人の共通した希望である。（完）



ハバロフスクでアムール川を見物する仲さん（左はノーボスチ通信社ハバロフスク支局のブガエンコ記者）。

アルメニア教会の"ミロの浄め"



75歳のバズゲン一世全アルメニア総主教

昨年の秋、アルメニア共和国の首都エレバンに近い小都市エチミアジンで7年に1度の恒例の祭り"ミロの浄め"が行われた。エチミアジンはキリスト教の一派——アルメニア・グレゴリオ教会の中心地であり、その教長（全アルメニア総主教）バズゲン一世もここに住んでいる。

"ミロ"とは、さまざまな宗教儀式にさいして使われる香油と水と芳香植物の汁液の混合物である。ミロを塗ることは、昔から"浄め"の意味を持っていた。いまでもアルメニア・グレゴリオ教会ではミロを儀式の場所や道具（祭壇、洗礼盤、十字架、聖像画その他）や聖水を浄めるために、また洗礼や聖職叙任のさいに使う。

ミロを作る（煮る）儀式もまた、教会の教典によれば、浄められなければならない。幾世紀来伝えられてきたミロ作りは、大切な祭日として教会によって盛大に祝われる。

今回、この祭日は教長バズゲン一世の75歳の長寿と聖職歴40周年と合わせて祝われた。バズゲン一世はこの40年のうち、じつに28年間総主教の地位にある。この祭日のために大勢のアルメニア人信者、指導者に率られた各国の巡礼、ソ連の他の教会派の指導者たちがエチミアジンへやってきた。もちろんソ連の他の共和国や都市からも信者が集まった。

言い伝えによれば、ミロの浄めとミロの使用にかかわる儀式は、アルメニア・グレゴリオ教会の開祖グレゴリウス啓蒙主（3世紀末—4世紀初頭）にまでさかのぼる。ミロは新しく煮るさいに、古いミロを加える。そのことによって、新しいミロがグレゴリウスが作ったミロとまじり合って継承されることが強調されるのだ。

ミロを浄める権利は、これまた伝統に従って、全アルメニア総主教に属する。開祖グレゴリウス以来すべての総主教は、第一三〇代教長バズゲン一世も含めて、7年に1度のミロの浄めの祭りが平和な時代に行われ、盛大な国民的祝日となるよう、全力を傾けてきた。

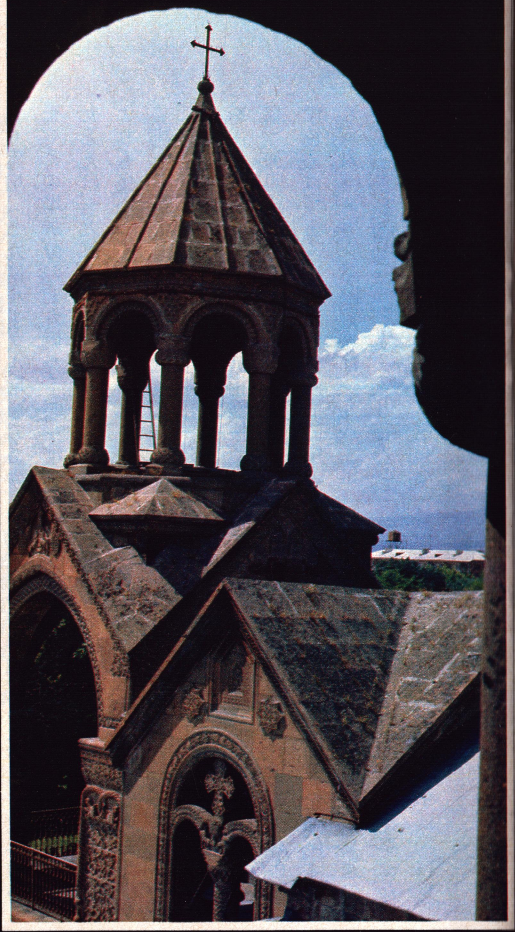
この印象深い祭日には一度ならず、信者の平和の祈りが響きわたり、地上の平和の維持と強化を心がけることはすべての宗教活動家、すべての信者の必須の義務であるという確信が表明された。



ミロの浄めの祈禱（中央がバズゲン一世）



祭典に集まった宗教指導者たち



アルメニア教会の総本山エチミアジン大寺院の南塔



7年に1度行われるミロの浄めは盛大な祭典になる



ミロの浄めの儀式で新しいミロに古いミロを加えるバズゲン一世

世界市場におけるソ連

――昨年度のソ連の貿易実績



ジュラブリョフ・ソ連貿易第一次官

さきごろソ連貿易省は一九八三年の貿易実績に関する記者会見をモスクワで開き、席上ゲンナジー・ジュラブリョフ貿易第一次官は次のように述べた。

ソ連は現在一四四カ国と商取引をしているが、これらの国の大半との通商・経済関係は長期の政府間協定に立脚している。一九八三年のソ連の貿易総額は一二七五億ルーブルで、前年比6・6%増（七九億ルーブル増）であった。この増加分の七九億ルーブルは、たとえば一九五八年のソ連の貿易総額よりも多い。

社会主義諸国は依然ソ連の主要な貿易相手国であり、ソ連の貿易額の56%を占めた。コメコン（経済相互援助会議）加盟諸国との通商・経済協力と科学協力は、とくに緊密かつ多面的であり、対コメコン諸国貿易は一九八二年比11・2%増で、六五三億ルーブル（ソ連の貿易額の51・2%）に達した。

現在コメコン加盟諸国は一九八六―九〇年度経済計画の策定に取りかかっている。策定に当たっては各国の実際の能力と要求が綿密につっ込んで検討されており、生産の設備更新、資源の合理的利用、新しい技術と材料の研究開発、製品の質の世界水準への引き上げなど、すべてのコメコン加盟諸国に共通の課題の解決を計画の目標に据えている。

ソ連の対中国貿易は、ここ数年前から急速に伸びており、一九八二年の貿易額は一九八一年比26%増、一九八三年のそれは前年比2倍以上に増えた。一九八四年度の協定による貿易額は、一〇億ルーブルになる見込みである。

ソ連は一〇二の発展途上諸国と取引をしている。ソ連はこれらの国の生産力、科学技術力と経済独立を強化する方針を一貫して支持している。ソ連の貿易総額中の発展途上諸国の比率はたえず伸びており、一九八三年は約14%増（一七七億ルーブル）であった。

発展途上諸国のうちのソ連最大の取引国はインドである。両国の貿易額は二三億ルーブルにのぼっている。ソ連はインドからの工業製品の買い付け量を年々増やしている。これはインドの民族産業と輸出基地の強化や雇用の促進に大きく役立っている。一九八四年度協定によると、往復貿易額はさらに25%増える。インドに次いで対ソ貿易に力を入れている発展途上諸国は、アルゼンチン、リビア、イラン、イラク、ブラジル、アフガニスタンである。

ソ連と先進工業資本主義諸国との通商・経済交流は、帝国主義層の軍国熱と侵略性の高進に伴う国際情勢の悪化の条件の下で行われてきたが、平和共存の原則的政策を堅持するソ連は、対ソ貿易に関心をもつ西側諸国との安定した経済関係の発展をあくまでもめざしている。

貿易をやりたいという双方の希望のおかげで、ソ連は大多数の西側諸国と活発な取引を維持することができたし、数カ国とは貿易を拡大することさえできた。一九八三年のソ連の対先進資本主義諸国貿易額は、三八四億ルーブルであった。

対西欧貿易は最も着実に伸びており、一九八三年の対西欧貿易額は前年に比べて6・4%増え、三一六億ルーブルに達した。いまソ連の対先進工業資本主義諸国貿易の82%（一九八二年は79%）を占めているのは、西欧諸国である。西欧諸国との貿易では伝統的な形態のほかに、工業面の協業、コンペンセーション（相殺）方式によるソ連での工業施設の建設、ライセンス取引、第三国市場への共同参加などの経済協力形態が採用されている。

ソ連の対西欧貿易の主要相手国はドイツ連邦共和国である。一九八三年の対西独貿易額は七〇億ルーブル以上で、前年比6%増であった。昨年はソ連・西独間の経済協力に関する幾つかの協定の期間が延長され、多くの大型契約が結ばれ、新しい商談が行われた。

ソ連・フィンランド貿易は安定成長をとげている。両国間の相互信頼の雰囲気は、両国の貿易にたえずよい影響を及ぼしている。一九八三年の両国の貿易額は前年度と同じく約五二億ルーブルであった。

フランスとの通商・経済関係は順調に伸び続けている。一九八三年のソ仏貿易は一九八二年比16・6%増の四二億ルーブルであった。ソ仏貿易をより均衡よく発展させるために、一九八四年にはフランスからの機械設備、鉄鋼、化学製品、農産物、食料品の輸入を増やす予定である。

最近対英貿易は若干活発になっている。一九八三年の貿易額（往復）は前年比16%増の一八億ルーブルであった。イタリア、オーストリア、ギリシャ、スペイン、スウェーデンとの通商・経済協力はさらに発展した。

一九八三年に対西欧貿易は大きく伸びたが、対米、対日貿易の場合はその逆であった。それが災いして、一九八三年のソ連の対先進工業資本主義諸国貿易は、全体としてたったの1・7%しか伸びなかった。

ここ数年来のソ米関係の悪化は貿易にも影を落とした。昨年の貿易額は一九八二年比15%減り、二二億ルーブルから一九億ルーブルに低落した。ソ米貿易はいま事実上停滞状態にある。対日貿易は一九八二年に比べて18%減り、いまたとえばソ連・西独あるいはソ連・フィンランド間の貿易額は、ソ米、ソ日貿易額の両方を合わせたものよりも多い。

もちろん、対米、対日貿易が減退したのは、われわれのせいではない。米日両国は他の国々が追随することを期待して、対ソ貿易縮小のイニシアチブをとったのだが、ソ連・西欧貿易は全体として拡大し続けている。そしてわれわれは、米日両国がソ連へ輸出したがらない商品は、自国でつくるか、あるいはほかの国々から買い入れた。昨年1年間にさまざまな資本主義諸国からの機械設備、運輸手段の輸入額は、15%余り増えた。

つい最近西側諸国の新聞に、ソ連・西欧貿易でのソ連の入超に対する不安が表明され、ソ連の〝債務〟は慢性的なものになっていると伝えた。だが一九八三年の実態はその反対で、ソ連の先進資本主義諸国向け輸出額は、輸入額を一〇億ルーブル上回った。

ソ連は経済協力を利用して自分の意志を押しつけたり、あれこれの国の経済的困難につけ込んで自国のメリットをさがしたりするようなまねはしない。ソ連は平等・互恵の協力をする用意のあるすべての国にとって誠実で信頼のおける取引相手であったし、今もそうである。

催し物のお知らせ

☆ボリショイ動物サーカス――キオの大魔法団特別参加

京都・京都府立体育館（7月13―16日）、東京・東京体育館（7月20―29日）、横浜・横浜文化体育館（7月31―8月2日）、名古屋・愛知県体育館（8月4―9日）、大阪・府立ナンバ体育館（8月11―16日）、福岡・福岡スポーツセンター（8月18―29日）、山形・山形県体育館（9月1―4日）、宇都宮・とちぎ博会場（9月6―12日）、新潟・新潟市体育館（9月14―17日）、岐阜・岐阜産業会館（9月21―24日）

▽お問い合わせは、ボリショイ動物サーカス公演本部（電話 03・234・7207）へ。

☆「ソビエト映画の全貌 PART 2」追加上映

「話の話」「ジャズメン」（6月26日）、「惑星ソラリス」「ローラーとバイオリン」（27日）、「戦いの終りの静かな一日」「ストーカー」（28日）、「新しい家族」「愛の奴隷」（29日）、「スタフ王の野蛮な狩り」「ピロスマニ」（30日）

▽東京・三百人劇場（電話 03・944・5451）

☆ユーリー・ノルシュテインのアニメ特集

7月7日（土）午後7時、東京・日仏会館

▽上映作品――「ケルジェネツの戦い」「あおさぎと鶴」「霧につつまれたハリネズミ」「話の話」「コンタクト」

▽お問い合わせは、アニドウ（電話 03・393・0344）へ。

☆日ソ親善合同公演――小沢輝佐子舞踊団・モスクワ国立室内バレエ団

札幌市教育文化会館（6月26、27日）、苫小牧市民会館（6月28日）

▽お問い合わせは、日ソ文化親善公演実行委員会（電話 011・861・5945）へ。

☆ゴーゴリ生誕175周年記念映画と講演の夕べ

7月4日（水）午後6時半

大阪・中小企業文化会館2Fホール

▽主催・お問い合わせ先は、日ソ協会・大阪府連合会（電話 06・763・0877）。

輸送問題と経済

——L・カントロビチ・アカデミー会員にきく

カメラ V・リトシャ



ソ連極東ウラジオストクの鉄道駅。貨車の編成作業が行われている。



レオニード・カントロビチ・アカデミー会員

ソ連の運輸、とくに鉄道輸送は、国民経済の増大する需要にいかに応えているか？　このテーマについてレオニード・カントロビチ・アカデミー会員に話してもらった。聞き手はパーベル・ラノフ本誌記者。

レオニード・カントロビチは一九一二年生まれ。レーニン賞、ノーベル賞（一九七五年）受賞。ソ連科学アカデミー・ソ連単一輸送体系総合問題学術会議議長。

——輸送機関、特に鉄道輸送は国民経済の〝血管系〟とよく言われるが、これほど責任の重い役割を鉄道はどのようにこなしているのか？

この問題をはっきりさせるために一つ紙上実験をしてみよう。2本の鉄道幹線、つまり地図から今、スベルドロフスク（ウラル）＝ウラジオストク線とモスクワ＝レニングラード＝ムルマンスク（ソ連欧州部の北）線を取り去るとしよう。するとソ連の東も北も、その経済活動を極端に削減するか、または完全な方向転換を計らねばならなくなることがすぐにわかる。このように、鉄道はあらゆる経済地区の生き生きした結びつきを保証しているのだ。

この血管系の脈拍はとてもエネルギッシュで、重要幹線における貨物輸送量は、米国のそれの5倍にも達している。

ソ連の鉄道の貨物取扱量は全体としては、世界の鉄道の総貨物取扱量の50％以上にもなる。

——世界の鉄道の全長と比較すると、ソ連の鉄道はどの位の割合になるか？

約11％で、一四万三〇〇〇㎞である。しかし問題は鉄道幹線の長さではない。例えば、一九五〇年代初めの輸送量と現在のそれを比べると、現在は6倍に増えている。科学技術の進歩が鉄道の発展に果たした役割は大きく、一九五六—七五年に蒸気機関車はディーゼルや電気機関車に切り替えられた。

ソ連の電化区間の総延長は現在世界最長で、これほど急ピッチで鉄道の電化が進められた国はほかにない。一九七六年から八〇年までの5年間にソ連では毎年八七〇㎞の路線が電化された。

鉄道網の密度は米国の方がソ連よりも大きいが、米国の場合、合理的な限度を超えている。それは今世紀初め、多くの私鉄会社が互いに競争しあって平行路線を敷設したからだ。現在米国では、数千㎞の鉄道が草に覆われ、人間の浪費のひどさを示す最も長い記念碑となっている。

——鉄道がソ連の輸送体系の主要な環になった特殊な事情は何か？

主な原因は、広大な国土を持つソ連の地理的事情と社会主義工業の急速な発展にある。エネルギー資源、原料、加工産業の配置がばらばらなので、どうしてもこれらを調整して経済的に結合しなければならない。海運のような低廉な輸送機関の利用の可能性について言えば、これは内陸輸送の場合極度に限定されている。

何といっても鉄道はほかの輸送手段に比べて運賃が安いので、鉄道輸送の占める割合の大きいことは、結局とても大きな長所ということになる。鉄道貨物輸送のエネルギーの平均消費量は、トラック輸送の$\frac{1}{10}$—$\frac{1}{15}$であり、旅客輸送の場合、鉄道は飛行機の一〇〇—一二〇分の一のエネルギーしか消費しない。エネルギーの節約は国の最重要課題である。

現在、東から西、西から東へ、毎年何億tもの貨物が運ばれているが、鉄道以外の輸送機関では、これだけのものは到底運べない。

一時は鉄道はもう時代後れの交通機関で、自動車輸送や航空運輸こそが新しい輸送手段だと言われ、後者の急速な発展が計画された。しかし実際のところ鉄道輸送は輸送全体の中で相変わらず大変大きな地位を占めている。ただ一つ鉄道よりも発展テンポがはやいのは、パイプライン輸送である。しかし液体やガスなど特殊な貨物である。

——場合によっては他の輸送手段が鉄道輸送の負担を肩替わりできるのではないだろうか？　例えば、広大なボルガ川を通って船が商品を運んでいるのに、その沿岸地方では貨物列車が往来しているが……

この問題は大げさに取り上げるに当たらない。全輸送量のうちで、河川輸送の占める割合は4％以下なのだ。

——だがそれは良くないのでは……

いや、悪いことではない。これが現実の数字なのだ。

ご承知のようにすべては経済が決定する。以前、河川輸送が鉄道よりもずっと安かったころ、例えば一九二〇年代の初めには、河川による貨物取扱量は全体の約20％を占めていた。

川の流れは、お分かりのように、変えられない。そこで、河川輸送の場合は1回あるいは2回の積み替えが必要になる。しかしどんなに低廉な交通機関でも積み替えが2回もあってはうまみがなくなる。安いが貨物の積み替えがある輸送手段よりも、高くても積み替えのない輸送方法の方にどうしてもメリットがある。

しかも河川路は一年中開かれている



電気機関車の運転台に座るゲオルギー・ポリフコ機関士（バルト海沿岸ラトビア共和国の首都リガ市で）

わけではないので、貨物は水路を輸送したり、レール上を輸送したりしなくてはならない。このような変則的な輸送は貨物輸送にとってマイナスである。その反面、鉄道網のないシベリアの一部の地域の場合、河川輸送の役割は極めて重要である。しかしそれでもやはり、貨物輸送全体の中での河川輸送の意義を誇張すべきではない。

——短距離輸送にはトラックが、長距離輸送には鉄道が有利だという説があるが、正しいか？

計算によると、二〇〇㎞までの短距離には自動車輸送の方が合理的だが、もし鉄道が貨物を戸口から戸口まで運べるなら、短距離の場合でも鉄道の方が有利だ。たとえば、鉄道の引込線を持っている工業企業への規格コンテナ輸送の場合である。長距離トラック輸送が経済的なのは、生鮮食料品や特殊貨物の場合だけだ。

一つだけ例をあげよう。モスクワ州からモルドワ自治共和国へ貨物の半両分のパイプを輸送する場合（距離は八〇〇㎞以下）、鉄道だと経費は72ルーブルだが、同数のパイプをトラックで運ぶと、鉄道の34倍の二四七五ルーブルかかる。

——ソ連では貨車は1昼夜平均二二四㎞走る。1時間に10㎞以下だ。これでは少な過ぎはしないだろうか？輸送機関の"物質的価値"は速度—貨物の時間的空間的移動によって作られるのだから……

1昼夜の平均走行距離二二四㎞というのはそう悪くはない。米国の一九八一年のこの数学は97㎞だったが、これはわが国の半分以下だ。欧州諸国では40—60㎞が普通である。

交通機関、とくに鉄道輸送は経済的にメリットのある、経済の不可欠な環である。なぜなら、経済的結びつきによってはじめて、距離的には遠いが、安い原料が利用できるからだ。専門化と協業の可能性があり、余分な投資の必要はない。

例えば鉄筋コンクリート構造材工場一つは2、3の州の需要をまかなえるが、もし製品の輸送ということがなければ、各州にこのような工場を一つあるいは二つずつ建てなければならない。もちろん工場をあちこちに建てるよりも輸送する方が合理的で、効果的だ。

その上、ソ連東部地域の経済の急テンポの発展という客観的必要もある。なぜなら東部地域に主要な地下資源があるからで、東部地域からの輸送量は最近20年間に6倍に増えた。

——前世紀には交通機関は"必然悪"と言われていたが……

もし何かが必然的なら、それを善とか悪とか言えるだろうか？あなたは距離を消滅するどころか、短縮することもできない。しかしこの場合次のことを念頭におかねばならない。前世紀の蒸気機関車は、石炭を積んだ貨車を三〇〇〇㎞輸送するのに、自分の貨物の半分を自分自身で"食べて"しまった。このことから推して、石炭の輸送が意味を持つ距離が、どれほど短かかったか分かるだろう。

今日ソ連では、商品1t当たり平均九〇〇㎞の旅をしている。これは合理的である。なぜなら現在交通機関が自分が走るために消費しているエネルギーはエネルギー資源の約8%にすぎない。輸送、特に鉄道輸送は、ソ連では驚くほど安く、しかも採算が取れている。よく分かるように米国の場合と比べて見よう。ソ連では10tの貨物の輸送費は1㎞当たり4・1コペイカ（およそ12円）だが、米国は公式レート換算12・9コペイカ（およそ39円）である。

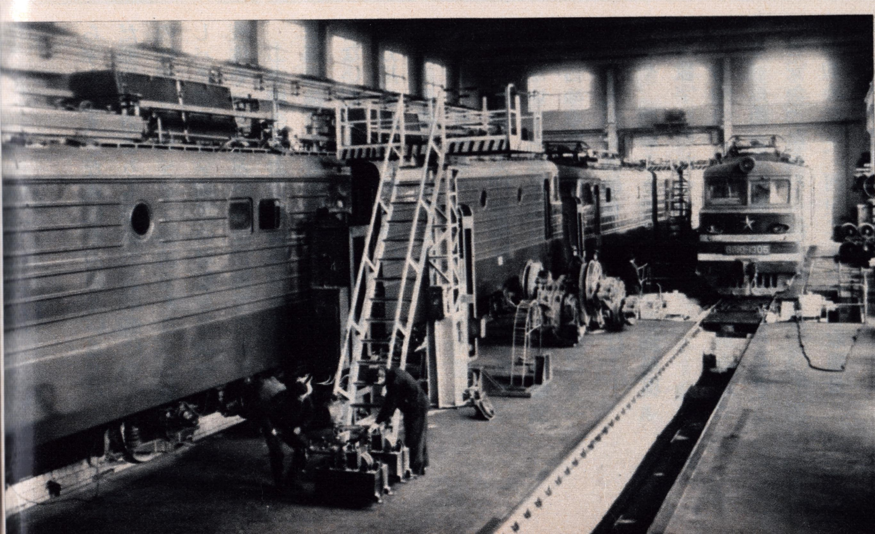
貨物輸送は今後も増えつづけるだろう。この現象は必然的なものだが、悪とは言えない。

——第11次5ヵ年計画（一九八一—一九八五年）の国民経済投資は15%増えたが、鉄道運輸振興のための投資は1/3以上も増えた。これはどういう効果をあげているか？

この数字はいろいろな見方ができる。初期の5ヵ年計画（一九二八年—一九三〇年代中ごろ）と比べて見よう。当時の鉄道振興投資の割合は2倍増だったし、一九七〇年代はじめは現在の半分だった。今や"経済の動脈"への投資は著しく増えた。

個人的には私は、この数字はもっと極端な増え方をすべきだと思っている。それには国民経済の他の部門の節約をやるべきだろう。しかしこういう見解はまだ認知されていない。

運輸が国民経済で果たす役割は重要だ。以前、誰にも顧みられなかった地方が、その経済活動に鉄道が加わると面目を一新する。鉄道幹線の効率を評価するに当たっては、国民経済の全体的利益を念頭に置かねばならない。新地域の発展の効果や新たな原料、エネルギー資源の取得の効果を必ず考慮に入れなければならないし、鉄道を敷設しなければ何を失うかを計算しなければならない。そうしてこそわれわれは全体的な総合的効果をあげ、その効果から鉄道による利益を評価することができる。



▶ジェルジンスキー記念〝リボフ＝ザーパド″車庫の電気機関車ＶＬ—10の修理工場（ウクライナ共和国リボフ市）



南ヤクート燃料生産コンプレクス区域を走る石炭貨車

核時代のための平和法典

本誌評論員　ウラドレン・クズネツォフ

ミサイル・核時代の現実は、戦争と平和に関する従来の考え方を根本的に変えており、政治的、軍事的安定性の問題や国際安全と世界平和の問題を新しい視点から取り上げ、核保有諸国が一定の規則や基準を厳守して行動し、交際するよう、要求している。さきごろソ連が、他の核保有諸国に核時代のための平和法典の作成を提案したのは、こうした事情を踏まえてのことである。

ではこの法典はどのようなものでなければならないか？　それに関するソ連の考えは、本年3月2日K・U・チェルネンコが演説の中で述べており、次の原則と基準の討議を提案している。

——核戦争の防止を自国の対外政策の主目的とし、核紛争の危険をはらむ情勢の発生を許さないこと。そのような危険が生じた場合には、核の戦火を発生させないために緊急協議を行うこと。

——グローバルな戦争であれ、限定戦争であれ、あらゆる核戦争の宣伝をやめること。

——核兵器先制不使用の義務を負うこと。

——いかなる場合にも、領土内に核兵器を置いていない非核保有国に対して核兵器を使用しないこと。すでに設置されている非核地帯の地位を尊重し、世界のさまざまな地域での新しい非核地帯の創設を奨励すること。

——いかなる形においても核兵器の拡散を許さないこと。つまり、いずれの国に対しても、核兵器あるいはその管理権を与えないこと。核兵器のない国の領土にこの兵器を配備しないこと。宇宙を含む新たな領域に核軍拡競争を広めないこと。

——同等安全の原則にもとづいて一歩一歩核兵器を削減するよう努力し、あらゆる種類の核兵器の全廃にいたること。

あれこれの国が核戦争にどのような態度をとっているか——核戦争を無条件の悪、人類に対する最大の犯罪と見ているか、それとも勝利を期待して核戦争を引き起こそうと考えているか？　これこそ、今日、自国民や他の諸国民の平和な現在と将来、国際安全の運命やさらには現代文明の運命に対する国家の責任の度合いをはかる決定的な基準である。

一九四五年8月広島と長崎が初めて新大量殺りく兵器の破滅的な力を体験して以来人類は、核兵器を禁止すべきか、それとも自ら滅び去るかのジレンマに立ってきた。核時代の黎明期に早くもソ連政府は、「ソ連の立場は全く明白である。その立場は、人知の偉大な発見を文明の破壊に向けることなく、文明の全面的な進歩に向けることにあり、人々の大量殺りくに向けるのではなく、平和的必要や住民の福祉向上の全面的保障に向けることにある……」と声明した。

ますます破壊的な種類の兵器へとエスカレートが進み、米国の軍事・政治体制の〝ブレーントラスト〟で次々と気違いじみた戦略ドクトリンや構想が生まれている今日でもなお、ソ連の態度に変わりはない。この複雑な条件の下で、ソ連は核戦争の脅威を遠ざけるために全力をあげることが、緊要だと考えている。

ソ連は段階的な核軍縮計画を提示し、まず簡単で、しかも効果的な措置——保有核兵器の凍結から始めることを提案した。これによって、今後保有核兵器を制限、削減し、最終的には廃絶することが可能になろう。同時にソ連は、核戦争が不法なものとされ、人類に対する犯罪としてすべての人々によって無条件に非難されるよう努力している。核兵器を最初に使用しないという義務を一方的に引き受けたソ連が、他の核保有諸国もソ連のこの例にならうことを期待するのは当然であろう。これこそ人類のために核脅威をなくす最良の方法ではないだろうか？

ソ連の提案は、西側の現実主義的な考えとも以前から相通じている。アイゼンハワー将軍は米大統領在任の末期に、自分の後継者たちへの政治的遺言めいた手紙を書いた。その手紙は、皆が一緒に座って、戦争よりもましな

紛争解決方法を考え出そう、という呼びかけで結ばれていた。

しかし問題は、米国政府部内で、ソ連の考えとは全く違う核時代の国家関係づくりの〝最良の方法〟に関する考えが支配していることにある。かつて、ジョン・ダレス元米国務長官は、外交の最良の方法は、「戦争瀬戸際政策をとることである」と語った。ジュネーブの欧州核軍備制限交渉で米国代表団長を務めたポール・ニッツは「戦争を回避し、われわれの目的と利益を守る最良の方法は、圧倒的な優位に立つこと」だと述べた。

ソ連はすでに、他の核保有諸国に提案した相互関係の諸原則と基準を日常の政策の土台に据えた。ソ連は核戦争の防止を対外政策の主目的と宣言し、核兵器を最初に使わない一方的義務を引き受けた。ソ連は、極東における信頼醸成措置についてすべての関係諸国と具体的な交渉に入ることを提案し、アジア・太平洋諸国間の相互不侵略・武力不行使条約の作成と調印に関するモンゴル人民共和国の提案を支持した。ソ連政府は、北欧に非核地帯を設置しようというフィンランドの提案、中欧に非核武装地帯を設置しようというスウェーデンの提案を支持している。ソ連は、その領土内に核兵器を持たない非核保有国に対し核兵器を使用しない義務を引き受ける用意がある。ソ連は宇宙空間における武力行使と宇宙からの地球に対する武力行使の禁止に関する条約案を国連で審議するよう提案した。これに加えて、ソ連は、善意の証明としていかなる種類の衛星攻撃兵器も最初に宇宙空間に打ち上げないという義務を引き受けた。米国を含む他の諸国があらゆる種類の衛星迎撃兵器を宇宙に打ち上げるのを差し控えている間はずっと、ソ連はこのような打ち上げの一方的モラトリアムを実施する。

従っていま、人類史上最も恐ろしい兵器の保有諸国や国際共同体のすべての参加国に、核時代の平和法典が提案されているのである。では世界各国はソ連の提案にどんな反応を示しているのか？

世界の各界各層はソ連のイニシアチブを肯定的に評価した。インディラ・ガンジー・インド首相の意見によれば、他の国々が核兵器を使用しないと声明することは、良いきっかけになるだろう。西独の社会民主党幹部ハンス・ヨハン・フォーゲルやその他多くの著名人たちも同じような意見を述べた。

ところで米国政府はソ連の提案をどう受け取っただろうか？　はたして米国はこの案を、緊迫した国際情勢や米ソ間の緊張状態を緩和し、核戦争の脅威を弱めるためのよいきっかけと見ただろうか？　事実、レーガン米大統領は——K・U・チェルネンコの演説のちょうど直前に——「われわれは核兵器が地表から姿を消す日が来るまで努力を続けなければならない」と、声明したではないか。

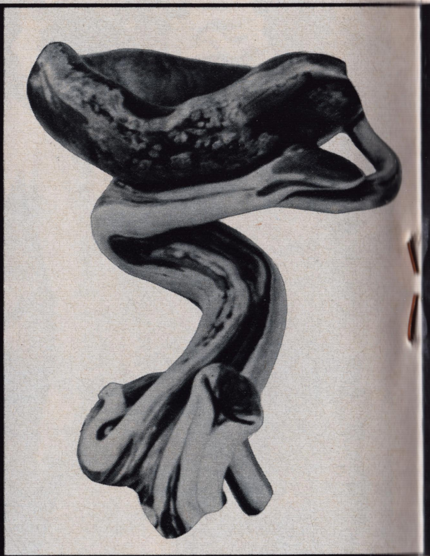
しかし、もちろん、核兵器はひとりでに姿を消しはしない。まだ手後れになっていないいまこそ、人類は核破局の恐怖から解放される日の準備をしなければならず、核兵器を凍結し、制限し、削減し始めなければならない。しかし問題は、ホワイトハウスが、何の義務も負わない平和的文句だけを唱え、核兵器がひとりでに〝姿を消すこと〟を期待しながらその蓄積、改良、使用を計画していることにある。NATOの欧州連合軍最高司令官バーナード・W・ロジャーズ大将（米国）は、モスクワから新提案が公表された後、ワシントンの下院軍事委員会で証言し、いま西欧の多くの国で攻撃されているペンタゴン・NATOの〝脅し〟または〝柔軟反応〟ドクトリンを弁護する雄弁を振るった。ロジャーズは「NATOが紛争を核兵器の先制使用にまでエスカレートさせる用意があること」に疑念をもたらさなかった。一体これで、平和な核法典など考えられようか……

核戦争の防止はソ連の目的だったし、いまもそうだ。今日の厳しい現実や危機的な国際情勢は、核戦争の防止が国際共同体の全参加国（一国の例外もなく）の目的となるよう要求している。

文化トピックス

自然保護から生まれた芸術





モスクワ自然保護協会の「自然と創造」クラブが、モスクワにある同協会の展示ホールで恒例の「自然と芸術」展を開いた。

「自然と創造」クラブは一九六〇年の創立で会員は四〇〇名。木彫、装飾パネル、寄せ木細工、造花などのセクションがあり、さまざまな作品を作っている。毎年15回ほど開かれる展示会は好評で、なかなかの盛況ぶり。今度の展示会でも（40ページ上の写真）一二〇名の会員が四〇〇点の作品を出品した。入場料（大人20コペイカ、子供10コペイカ）の収益はモスクワ自然保護協会のものとなる。

会員は学生から年金生活者まで、職業も年齢もさまざま。郊外へ出かけては、次の作品の材料となる木の葉、花、木の根、曲りくねった木株、木の枝などを採集する。ただし、採集には厳しい条件があり、取ってよいのは枯れた木だけで、生きている木は折っても切ってもいけない。

こうして出来た作品の一例が、右の写真。木の根が見事な芸術作品となった。会員は週一度協会に集まり、作品を批評し合ったり、経験を交流する。

父と子の共演



先ごろコミ自治共和国（ソ連欧州部北東）の首都シクティフカルで家族アンサンブルのコンクールが開かれ、共和国の都市や農村から40組が参加した。家族アンサンブルには年齢制限はなく、老いも若きも歌い、踊る。コンクールではロシアとコミの民謡が歌われ、民族楽器が演奏され、さまざまな民族舞踊が披露された。

写真はコンクールで入賞したワレリー・ポノマリョフと6歳の息子ルスランの父子。お父さんはボルクタ市の〝セントラル〟鉱山の鉱夫で、出し物のルーマニアのコミカルな踊りが会場を湧かせた。

ワラで出来るものは？

ブレスト（ベロルシア共和国）に住むベーラ・ガブリリュクさん（80歳）はライ麦のワラでミニチュア作品を作るのが得意。扱いづらいワラを巧みに編んで、ご覧の通りの華麗なオンドリやヒツジ、クジャクなどを作る。

実はこのガブリリュクさん、大多数の同年代の女性が年金生活をおくっている62歳のとき、笑われないようにとこっそり通信制のクルスブカヤ記念モスクワ芸術大学に入学、67歳で卒業した。この間デッサンや芸術的な構図を学んだ。今も彼女が職長として働くブレスト民芸品工場の製品は米国、カナダ、西独、イタリアに輸出されている。



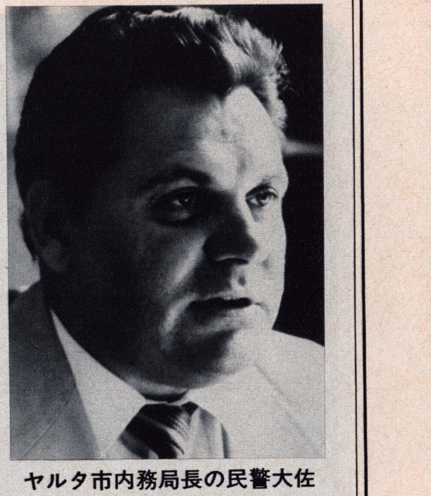
金のサキソホン賞



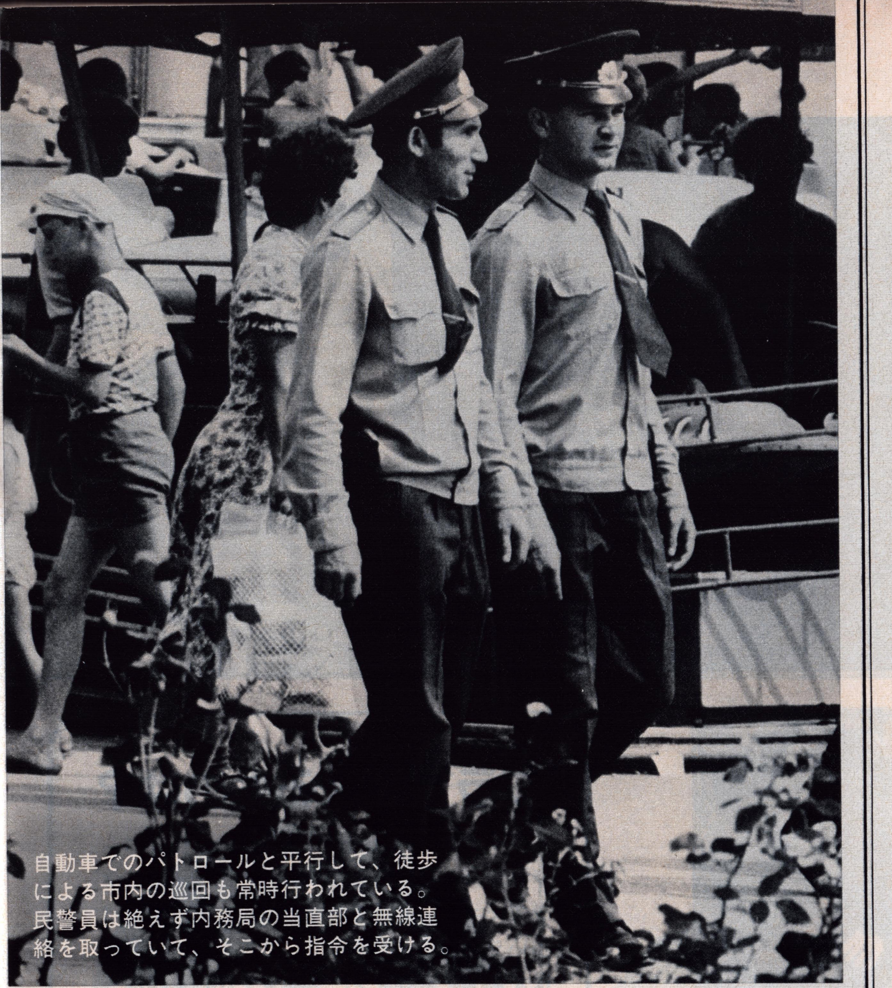
フランスの有名な楽器メーカー「セルメル」は自社製の金のサキソホンをコンクールの優れた演奏家に贈ることを伝統にしているが、各国から500人が参加してニュルンベルク（ドイツ連邦共和国）で行われた国際サキソホン・コンクールではソ連のマルガリータ・シャポシニコワ（中央）がその栄光に浴した。彼女はグネシン記念モスクワ音楽教育大学サキソホン科の教師。夫（右）も音楽学校の教師、息子（左）も音楽を専攻している。

観光都市ヤルタの"〇二番"

本誌記者 パーベル・アントノフ　カメラ M・ユルチェンコ



ヤルタ市内務局長の民警大佐
ウラジーミル・シタロ



自動車でのパトロールと平行して、徒歩による市内の巡回も常時行われている。民警員は絶えず内務局の当直部と無線連絡を取っていて、そこから指令を受ける。

「いわゆる紺碧海岸(コートダジュール)の静かな生活なるものの魅力にひかれてきた皆さまにご注意申しあげたい。ニースとその界隈は近寄らないでください。南仏でももっとも凶悪な犯罪シンジケートが大手を振っている土地ですからね」——イギリスの作家グレアム・グリーンの小説『わたしは告発する』の冒頭はこうなっている。

見ただけでひと泳ぎしたくなるような海岸——はるばると遠いところから観光客が押し寄せてくるのはコートダジュールの観光都市だけとは限らない。ソ連で有名な黒海沿岸の保養地であるヤルタ(クリミア)やソーチ(北カフカズ)もやはり楽しむことと休むことがまず第一になっている。ホテル、レストラン、バー、娯楽施設がソ連中央部の町より何倍も多い。夏のシーズンになると、北の町から、北でなくともいろいろな町から何百万もの人々が海をめがけてやってくる。シーズンの最盛期になると地元の住民と避暑客の比率は1対5になる。休養にきた連中は何カ月も稼いで貯めた金がたっぷりある。ヤルタで楽しめるのは金の要らない海と陽光だけじゃないということを承知しているから、あらかじめヤルタへ行ったときの用意に金を貯めておく。

だがしかし、もしもグレアム・グリーンがヤルタを題材にして小説を書いたら、やはり犯罪者の巣窟だといってヤルタとその界隈に近づくなというだろうか？

安心して歩ける通りを

ヤルタ市で秩序維持を担当し、犯罪を取り締まっている機関はヤルタ市内務局(民警の本部)。ウラジーミル・シタロ民警大佐が局長をしている。大佐の話。

「あたりまえの話ですが、この地方にも犯罪者がいます。おいしそうだが、実は大したことのない"甘い生活"をしたいばっかりに、休暇の解放感でひとを信じやすくなった保養客を利用してもうけようとする悪者がいるにはいますよ。ですが、犯罪シンジケートとか、ギャングの組織のようなものはわが国にはいませんな。この町の通りなら安心して出かけて大丈夫です。ピストルを手にした強盗に襲われるなどという心配はありません。



内務局当直部には電話がかかってくるだけではない。迷い子もここへ連れてこられる。婦人民警員のマリーナ・レウセンコは電話の応答だけでなく、保母の役を務めなければならないこともある。

ですが、たとえば、海水浴場に何か物を長いあいだ置きっ放しにしておいても、何もなくならないという保証まではわれわれもできかねますねえ。われわれとしてはこの町でどんな犯罪も起こらぬように努力はしているのですが、それは理想論で、現実は理想どおりにいくものじゃありませんよ。悪いことをする人はまだまだいます」

記者がシタロ大佐とインタビューしていたのは昨年の8月3日の夕方だった。ところが、ヤルタの町の通りはまったく安全だという大佐の言葉を裏切るような事件がわずかその2、3時間後に発生したのである。しかし、あとから分かったように、それはあくまで例外の事件であって、この都市の日頃の平穏さを浮き彫りにしただけだった……

13分で犯人逮捕

8月4日午前零時32分。市立病院の受付から02番の電話がかかってきた(02番は民警の呼び出し番号で、全国だれでもよく知っている)。その病院へ、胸に刃物による傷を負って意識不明の男が一人かつぎこまれたという通報だった。その男は目下のところ質問に答えられない、ということだった。

02番というのは実に覚えやすい番号である。呼び出しがあると、二人の人間が同時に電話口に出ることになっている。一人は全市当直補佐で、もう一人は02番電話係の夫人民警員である。さらにこれとは別に、かかってくる電話の内容は自動的にテープに録音されることになっている。

その夜の当直補佐はアレクサンドル・ボリャエフ民警曹長。パトロールカーと徒歩パトロール班からの彼への呼び出し番号は"8"だ。ボリャエフは無線を使って通常のパトロールコースの変更を命じたり、事件の現場へパトロール班を急行させたりできる。

病院からの電話でほかのあまり大したことのない用件は一時あとまわしになった。ただちに全パトロールカーと徒歩パトロール班に通報が飛んだ。市内に一人もしくは複数の極めて危険な犯罪者が出現した、と。負傷した人が発見されたのはキエフ通りのそばの横町だが、8番、つまりボリャエフは一台のパトロールカーに警察犬をつけて現場へ向かわせた。しかし、犬は犯人の足跡をかぎだせなかった。なにしろ夏の夜のヤルタはどこの通りも多すぎるほどの人間がぶらついているからだ。現場を通りかかった者、近所の家の住人たちの聞き込みをしたが、何の手がかりも得られなかった。叫び声もけんか騒ぎも聞いたものは一人もいなかった。タクシーや長距離バスの運転手や自動車交通監督局のパトロールカーにもいちおう知らせておいた。

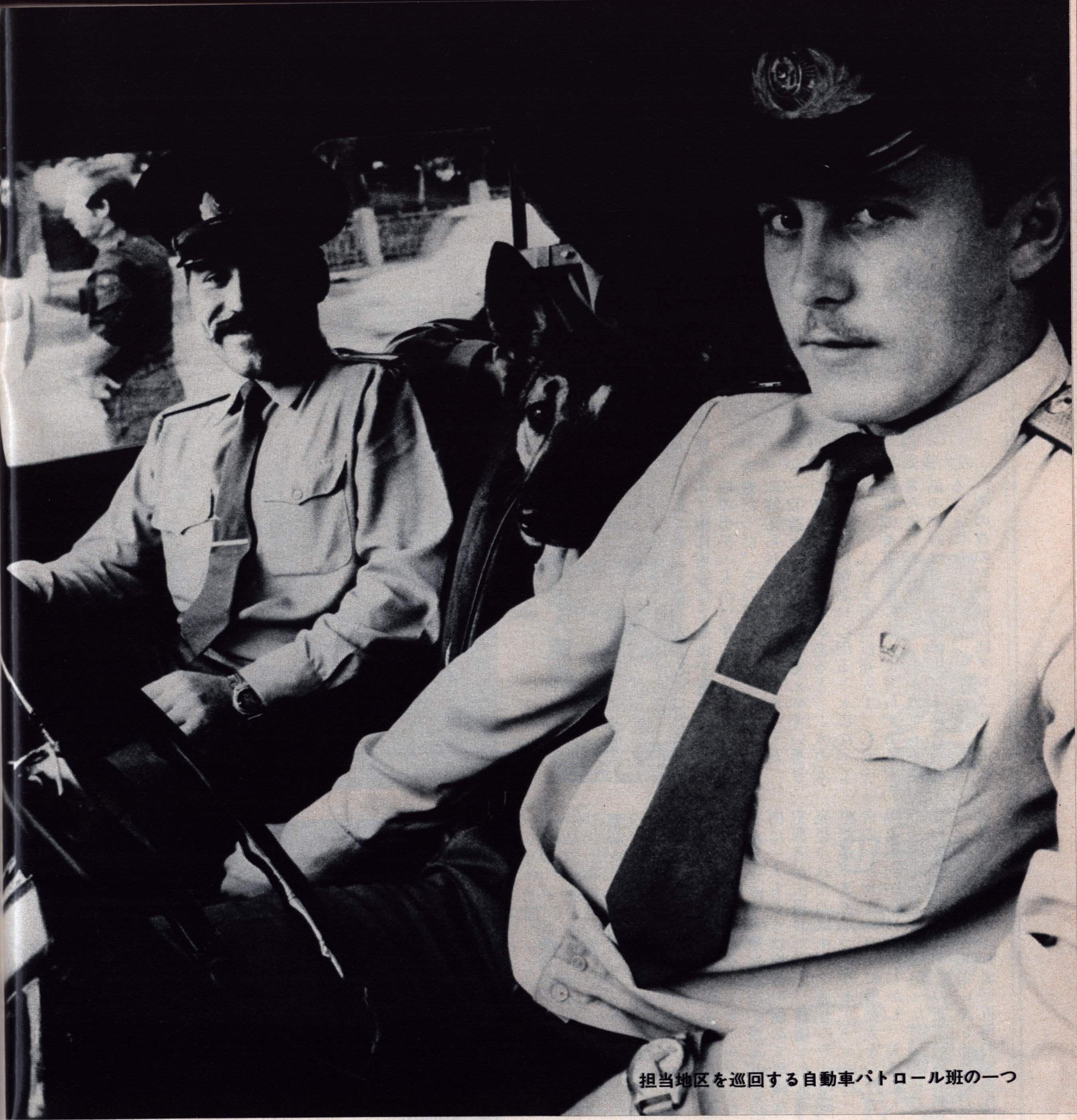
負傷者が意識を取り戻したのは午前1時35分。守衛のセルゲイ・コニコフだった。帰宅の途中二人の若い男が近づいてきた。一人は年の頃20歳くらいで、金をよこせと言った。コニコフが金はないと答えると、年上の方がナイフで刺した。コニコフは二人の人相特徴を説明してから「二人ともへべれけでした」とつけ加えた。

ボリャエフ当直補佐の話。

「金は奪えなかったから。守衛は本当に持っていなかったから。しかし連中は酔っぱらっていたというから、追いはぎをやろうという考えは簡単には捨てな



内務局当直部には全市担当当直責任者、同補佐、02番電話係(必ず若い婦人民警員)の3人が24時間詰めていて、すべての通報に必要な措置を取る。平均して1昼夜に40—50回の02番電話が入る。



担当地区を巡回する自動車パトロール班の一つ

いでしょうね。きっとまた、何かをやらかしますよ」

午前2時57分、02番がけたたましく鳴りひびいた。

「二人組にナイフで脅かされて一二〇ルーブルと腕時計を奪われました」

「場所は？」

「アルヒーフ通りです」

「何時頃です」

「たった今だよ。あいつら、『命のあるうちに消えて失せろ』なんて脅かしやがって。わたしゃ逃げだしたけど、角のところを回ったら電話ボックスがあったんで」

「できたら、その電話ボックスで待っていてください」

何台かのパトロールカーに犯行現場に隣り合ったいくつかの通りを封鎖させることにするまで数秒しかかからなかった。当直補佐は司令を出すと、待たせておいた受話器を再び取り上げた。今頃はパトロールカーがアルヒーフ通りへ急行している最中だ。今夜二人目の被害者ユーリー・カニゴーラはまだ電話ボックスの中にいた。「どんな人相でした？」人相は第一の事件の犯人たちにぴったりだった。カニゴーラは犯人たちの様子をしっかり見届けていた。二人組がカニゴーラに近づいたのは照明の明かるいショーウインドーのそばだったからである。

「いいですか。できればそのボックスにいてください。あと数分でパトロールカーが着きますから」

13分後、人相書きぴったりの二人組がカニゴーラが襲われた犯行現場からたった五〇〇m離れたところで見つかった。体を調べると、現金が一二〇ルーブル、ポケットから時計とナイフが出てきた。年上の男のシャツには血痕が付いていた。

銀行強盗はまず起こらない

記者たちは二人組の犯人に会いたいと思ったが、まだ取り調べ中で、被疑者の段階だからまずいと言われた。

「だって、もう自供しているんじゃないですか」

「自供だけじゃだめなんだ」

ヤルタ市内務局のゲンナジー・コニューホフ捜査課長がいう。

「のっぴきならない物証が必要なのでね。そのために証拠の検証が行われます。今の段階で言えることは、二人ともドネツク州のシャフチョールスク市からきた流れ者で、こんどの強盗をやる3日前に飛行機でヤルタにきたということだけ。無職でね。一杯やる金が欲しかったんだね」

「若い連中ですか？」

「そう、一人は23歳で、もう一人の方は18歳にもなっていない」

〝流れ者〟とはよく聞く言葉だ。シタロ民警大佐が言ったように、〝甘い生活の匂い〟に引かれて飛んでくる連中のことである。

「今のところ犯罪の摘発率は10件のうち9件という割合です。むろんほかからおいでになった〝流れ者〟を別にすれば、もっと高い摘発率になりますが。〝流れ者〟には手を焼きますよ。」

「どんな犯罪が一番多いですか？」

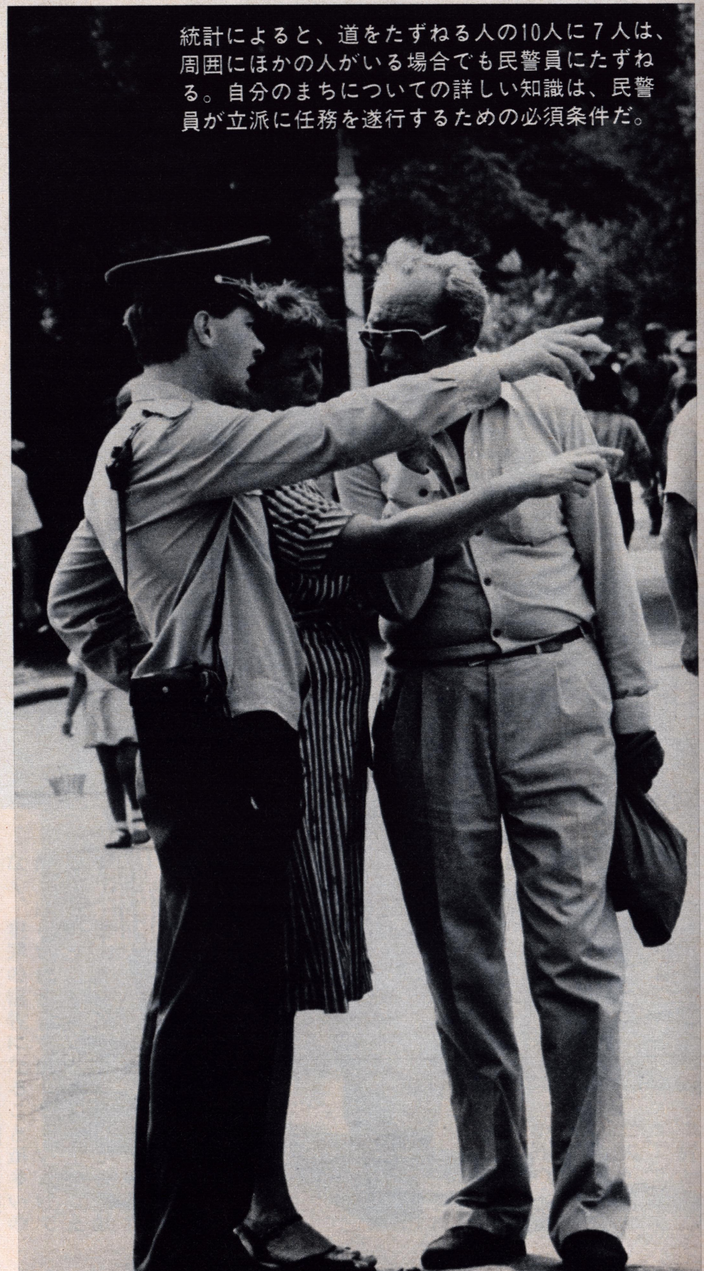
「空き巣ねらいですね。だいたい単独犯です」

「銀行や貯金局の強盗とか商店の強盗は？」

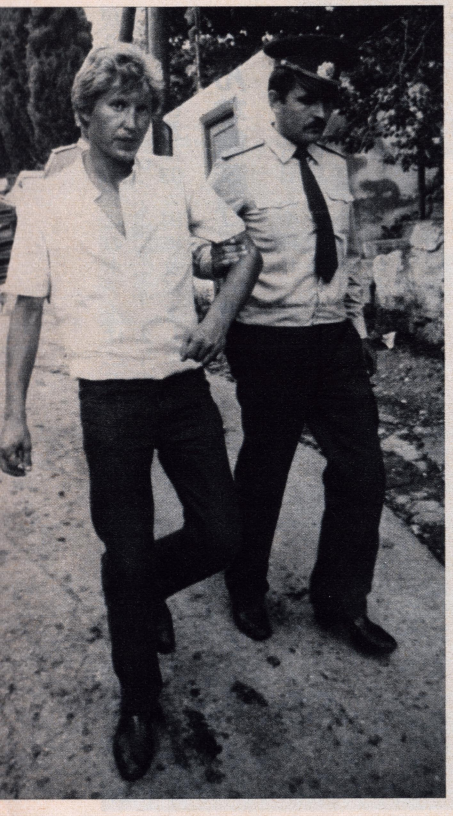
「銀行強盗はなかったし、貯金局の強盗事件は一件だけうんと以前にありましたね。こういった犯罪は本格的な準備が必要で、単独犯では無理です。商店の強盗の方はねえ……この頃は暮らし向きがずっと楽になり、どんな家からも金製品や高価な装飾品が〝取れる〟わけですから。値段にしてダイヤの指輪ぐらいの服地を商店から〝頂戴〟するとしたら、どのくらいの服地を運ばなければならないか、想像してみて下さいよ」

「夏になると、全国指名手配になっている連中が多分このヤルタに結構顔を見せるのでは？」

「ええ、去年われわれが逮捕した全国指名手配の犯人の数が数十人だったことからいえば、多いといえますね。こ



統計によると、道をたずねる人の10人に7人は、周囲にほかの人がいる場合でも民警員にたずねる。自分のまちについての詳しい知識は、民警員が立派に任務を遂行するための必須条件だ。



ある商店のそばで酔っぱらいが通行人に迷惑をかけているという通報を無線で受けたパトロール隊の隊長は、さっそく現場へ急行して、乱暴者を民警支部に連行した。

れはほんの一例ですが、3カ月前の5月の初め、二人の男が通りを歩いているのを刑事が見て、挙動が怪しいと感じたのです。何か落ちつかぬところがはっきり見てとれました。そこで、刑事は制服の民警員に訳を話し、二人のそばに行って、よそから来たようだが、何か困っていることはないのかと訊ねさせたのです。二人の男はこのなんでもない質問を受けておびえた風で、その一人は食ってかかりそうになった。そこで二人を拘束して調べてみると、数万ルーブルも持っているのが分かった。二人はシベリアのある町の貯金局へ強盗に入り、1カ月間ひと気の少ない土地に潜伏したあとヤルタにきて、盗んだ金で遊び暮らそうとしたのです。

こういう事例もあります。6月21日の夜8時、コトリャルチュクという危険な犯罪者の人相特徴についての口頭による連絡が回ってきた。ヤルタに姿を見せる可能性があるというのです。この晩インツーリスト直営のホテル〝ヤルタ〟でウラジーミル・ベスとオレグ・ラリンという二人の民警軍曹が張り込みに当たっていた。二人は連絡の人相にそっくりの男を見つけた。付けられていると知ると、男は民警員をまこうとしはじめた。まず円柱の陰に身を隠したが、突然エレベーターに飛び乗り、乗っている人たちの中に隠れようとしました。捕まえてみると、まさしく例のお尋ね者でした」

「ところで、ホテル〝ヤルタ〟で外国人の観光客が強盗によく遭いますか?」

「昨年1年で宿泊客の外国人から強盗または盗難に遭ったという届け出が合計9件ありました。被害に遭った現金、貴金属は全部発見されて持ち主の手に戻りました。なお、このホテルは二五〇〇人収容で、いつも満室です。去年の宿泊客の国籍は93カ国に及びました」


またまた迷い子の通報。今度は姉妹二人が迷い子になったとのこと。無線で連絡を受けた徒歩パトロールの民警員が当直本部に連れて行く。

どんな電話が多いか?

記者は8月5日（金曜日）にかかってきた02番の電話を一つ残らず当たって調べてみた。週末の金曜日の夜と土曜日は当直には一番忙しい日だ。最初の02番が鳴ったのは午前11時50分、一番最後の電話は午前零時近かった。かかってきた回数は47回、それぞれの訴えの内容は全部当直日誌に記録される。

02番電話の大半は酔っぱらいがいるという通報だった。もう一つのグループは、子供がいなくなったと民警の助けを求めるものだった。子供たちはもちろん、いつでも見つかる。探すのに一番時間がかかったのは約4時間。そのあいだ当のぼうやは海水浴場のテントの陰でぐっすり寝込んでいた。そのほか、家庭内のいざこざでかけてくるものがある。8月3日、2日、1日も同じ調子である。どれもかならず取った措置とその結果を記録しておく。だが、8月4日夜の電話ほど不安な02番がかかったことは一度もない。

シタロ民警大佐が語る。

「悲惨な事件もありますよ。一九八一年12月に起こった事件なども、ヤルタ市民はいつまでも忘れないでしょうな」

どちらも21歳で、どちらも自分のことを登山家と考えていたカップルが、ヤルタに新婚旅行にきて、クリミアの海岸の崖の上にテントを張ってハネムーン、もっと正確にいうとハネウイークを送ることになった。7日目に気温が急に下がり、氷が張りはじめた。もう暗くなった夜の8時、二人は崖を下りることにした。滑りやすい岸壁を、初歩的な確保もしないで。夫が転落して、そのあとから妻が落ちた。10mばかり下に幅の広い岩棚が出っ張っていて、二人はそこにひっかかった。

人々が二人の助けを求める声を聞きつけたのが10時半。すぐに02番に知らせが入った。民警が山岳救助隊の出動


遊覧船に乗り込む人たちを見守るパトロール隊。これまでには、滅多にないことだが、タラップを踏みはずして転落した人を救うために民警員が海に飛び込んだこともあった。

を要請し、ロッククライマー班と強力なサーチライトがヘリコプターで現場に届いた。あいにく山も、二人が横たわっている岩棚も霧が立ち込めていて、夫婦が見つかったのは朝の5時になってからだった。1分1秒を争うので、2名のロッククライマーがそれこそ絶えず墜落の危険を冒しながら、確保なしで二人のいる場所へたどり着いた。

夫の方はもう死後数時間たっていたが、妻はちょうど夫の体の上に落ちたので命は助かった……

防犯対策の成果

「犯罪を引き起こすいちばんの原因は何ですか?」

シタロ民警大佐の答え。

「泥酔ですな。すべての犯罪について見ると、その40%は泥酔状態での犯行です。暴力沙汰の場合は80%が泥酔状態でということになります。そのうえ酔っぱらいは法律を破りやすいだけでなく、犯罪の犠牲になることが多いのですよ。酔っぱらいをなくすことができたら、犯罪曲線は枝が折れたように激減するんですがねえ」

「ヤルタでは犯罪が増えていますか?」

「増えていませんよ。4年ほど前からすべての犯罪、とくに窃盗は急激に減りました。1/3以下になりましたね。いろいろな防犯対策が行きとどいた結果です。それ以来、犯罪件数は一定水準にあって、増えも減りもしません。手にあまる未成年者のグループも二、三あります。これには未成年者問題監督官が当たっているので大丈夫です。泥棒一味とか強盗団とかはもうお話ししたとおり、当市にはいません」



夏は旅行の季節

本誌記者　オリガ・ベドニャコワ

北極圏ウラルの奇岩。このエキゾチックな光景は大勢の人々を引きつけている。

また夏が来た……

もちろん、すべての人が夏のシーズンに休暇を取ることができるわけではない。それでも、多くの人は〝夏〟といえば〝休暇〟を連想する。休暇を楽しむ何百万人という人々に、夏休みを迎える大学生や学童のにぎやかな大部隊が加わる。

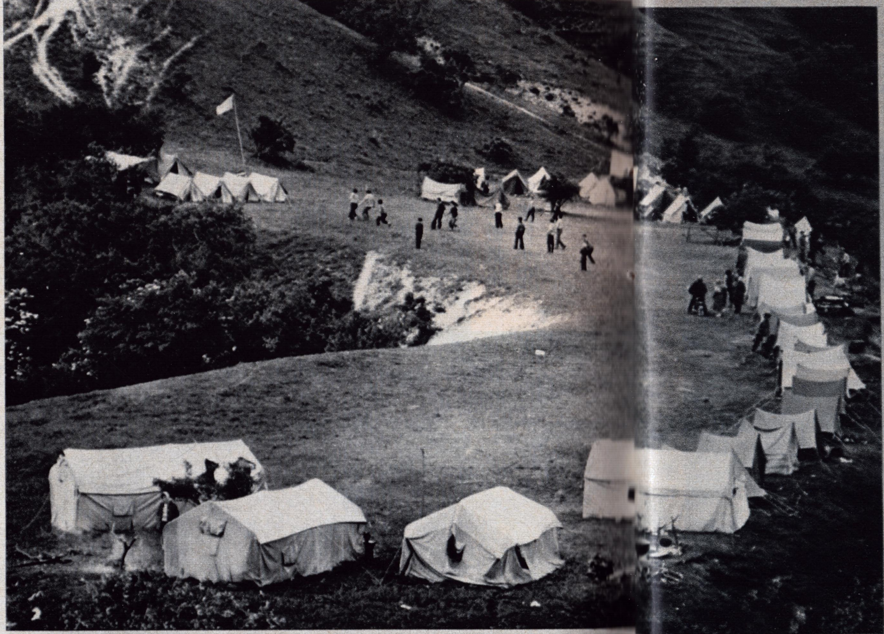
この楽しい夏をどう過ごすのがいちばんいいか？　いろいろな過ごし方があるだろう。海へ行くのもよし。ゆっくり休んで、寝だめをするのもいいだろう。この機会にふだんあまり読めない本を読んだり、たっぷり映画を見ておこうという人もいるだろう。

だが休暇が迫ると、次第に、まだ見たことのない土地へ行ってみたいという気持ちがふくらんで来るのを抑えることができない。大げさに言えば、旅心が頭をもたげてくるのだ。

わが国ではますます多くの人が、旅行を休息の最良の形態だと考えるようになっている。これは次のような現象によって説明できるだろう。すなわち、勤労者の暮らし向きにいっそう余裕が出てきたこと、国家が一貫して観光産業の振興に力を入れていること、そして、人々自身が、文明時代の危険な病気――運動不足に立ち向かわなければならないときが来たと理解し始めたことである。



民家風のホテル〝ベルクート〟とレストラン（西ウクライナのヤレムチャ市で）



北カフカズ、チベルダのキャンプ場で

どこへ行くか？

「全ソ労働組合中央評議会観光旅行中央評議会は、旅行愛好者の皆さんに〝日の沈まぬ土地〟へのツアーを呼びかけます。行く先はコラ半島のムルマンスク（ホテル〝北緯69度〟）、モンチェゴルスク（ホテル〝ラップランド〟）、キーロフスク（ホテル〝ヒビヌイ山脈〟）の3都市。ソ連欧州北端のすばらしい場所、自然の驚くべき現象――白夜があなたをお待ちしています。18日で費用は一一八ルーブル。申し込みはペトロベリグスキー横町4号館……」

ラジオ番組〝ご案内の時間〟ではこんな公告も聞かれる。〝北緯69度〟とか〝ラップランド〟などというエキゾチックな言葉は、何となく心をくすぐる。手ごろなツアーだから、気に入ったら申し込めばいい。出発場所までの交通費はツアーのセット代金とは別に各自が払う。そして、出発というわけだ！

翌日、同じ〝ご案内の時間〟は、ロシアの詩人レールモントフ（一八一四―一八四一）ゆかりの地ペンザ州へのツアーを呼びかけている。これは家族向きの旅行だ。これもなかなか魅力がある。だが、さらに次の日には、〝中世のクリミアを訪ねて〟というツアーがあることを職場で知る。バスに乗ったり、リュックサックを背負って歩いたりの18日間の旅で、費用は85ルーブル。そのうちの30％を払うだけで、残りは労働組合が負担してくれる。こういろいろあると、どれにしようかと迷うばかりだ。

というわけで、人々は気に入ったコースを選んで、多くは家族連れ、若者同士で、ツアーを組んで出かける。もちろん、一人で行ってもかまわない。必ず新しい友だちができるし、場合によっては生涯の伴侶と出くわすことだってあるのだ。

豊富なルート

すでに述べたように、国家は観光産業の振興に大きな注意を払っている。一九八〇年10月、ソ連共産党中央委員会、ソ連閣僚会議、全ソ労働組合中央評議会は「国内観光旅行事業のいっそうの発展と改善について」の決定を採択した。この急速に発展しつつある部門には少なからぬ資金が投入され、新しい観光基地、ホテル、総合施設の建設が進められている。中央評議会の管轄下だけでも（ほかに各地方評議会がある）このような施設は約八〇〇あり、ここで同時に二五万人が休息することができる。さらにつけ加えれば、



歩くことがすべての基本（アルタイ山地で）

昨年は三五〇〇万人が休暇をツアーで楽しみ、何らかの旅行をした人は一億九四〇〇万人にのぼる。

海や川——黒海、北極海、ボルガ川、アムール川、エニセイ川、ドニエプル川を遊覧する旅もある。わが国では鉄道が発達している上、国土が広大だから、鉄道の旅にはこと欠かない。もちろん、飛行機の旅、バスの旅も魅力的なたくさんのコースが用意されている。

旅行セット券の値段はさまざまで、ホテルのクラス、距離、交通手段、旅行期間によって異なる。〝ご案内の時間〟のところでもいくつか例を示したが、さらにいくつか紹介しておけば——〝アルメニアめぐり〟（バス、20日間）一〇〇ルーブル、〝サヤンからバイカルまで〟（バス、船、21日間）二〇〇ルーブル、〝ボルガ河口の旅〟（ボート、20日間）一〇〇ルーブル、〝ブリャート自治共和国めぐり〟（徒歩、20日間）95ルーブル。

旅行セット券には旅行者用の施設での宿泊、1日3回の食事、見学のための料金が含まれている。徒歩旅行の場合はテント、毛布または寝袋その他の装備と、いわゆる携行食が提供される。家族連れが利用する観光基地には遊戯施設があり、スタッフには小児科医や教師もいる。



出発は早朝にかぎる。暑くないし、空気もすがすがしい。



▼シベリアでは川下りが盛んだ（イルクーツク州で）

大自然の中ではささやかな食事も最高にうまい



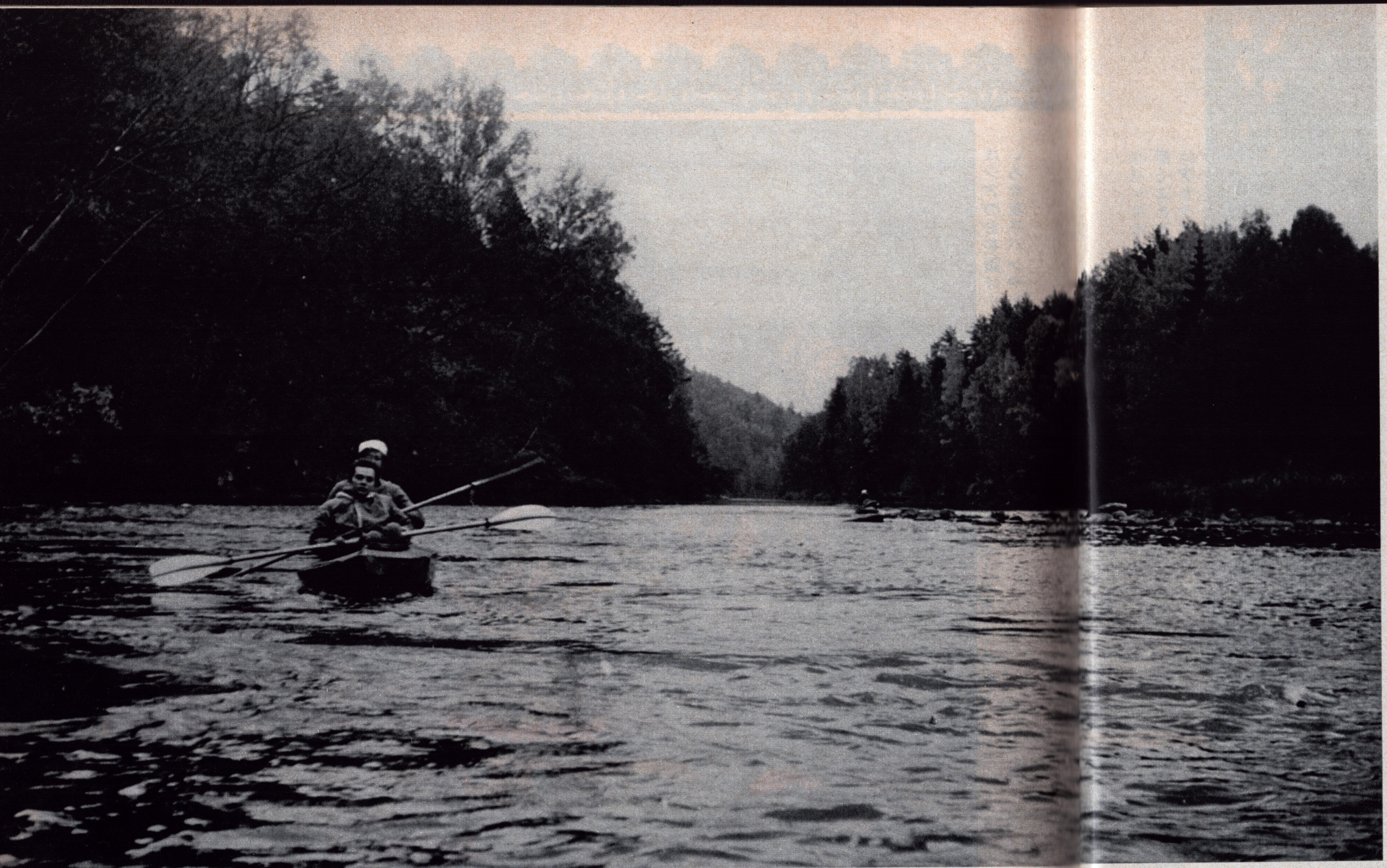


アルタイ山地で人気が高い乗馬ツアー

私の経験から

これまで述べてきた旅行はいわば〝計画的な〟〝組織された〟旅行である。だが、単独で行う旅行もあり、その愛好者も少なくない。ましてソ連には土地の私的所有はないから、旅行者はどこへ行っても私有地に入り込むようなことはない。

……夜明けまえの4時ごろ。私はテントから這い出した。蚊に起こされてしまったのだが、あるいは何か驚くべきことを直感的に予感したためかもしれない。16歳という年ごろにはよくあることだ。川は見えなかったが、枝を垂れたヤナギと川面に濃く立ち上る湯気が川の輪郭を浮かび上がらせていた。湯気は森の中の空き地に広がり、トウヒの枝の葉の中に消えて行った。ほとんど分からないほどの細い道が、小鳥のさえずりと森の香りの中を貫いていた。道が終わると、奇跡のような光景が開けた。淡い紫色の鈴のような花が一面に海のように広がっていたのだ。一歩踏み出して、私は足がすくんだ。足に触れた花が、やさしいざわめきを立てて、「私たちを踏まないで」とささやいているような気がしたからだ。私はテントのまちが広がっている森の中の空き地に戻った。モスクワ学童ジャンボリーにやって来た私の仲間たちは、まだぐっすり眠っていた。眠っている数百人の学童たちと手つかずの自然とのこの一体化の中には、無垢と調和が感じられた。あのときから20年以上たったが、すべてはきのうのことのように生き生きと記憶に残っている。この記憶一つだけのためにも、私は若き日の旅行のことを感謝している。



カヌーで自然を満喫（ラトビア共和国のガウヤ川で）

私が自分の過去の経験を持ち出したのは、いまの16歳のモスクワの学童たちと話し合ってみて、かつての私たちとまったく同じだということが分かったからだ。彼らは同じようにロマンチックで、故郷モスクワの近郊、その派手ではない美しさをこよなく愛している。

学童ジャンボリー（ジャンボリーは学童以外の人々を対象にしても開かれるが、いまは学童ジャンボリーについてだけ書こう）のスポーツ的な側面も、昔とあまり変わっていない。

通常、ジャンボリーの会場へは、さまざまな学校の生徒たちが、7—10日間かけて四方八方から集まってくる。15—17歳の上級生グループは指導員（大抵は体育の先生）を先頭に、平均15—20人から成り、伝統、技術、経験を伝えるために経験者と新顔を組み合わせてある。

会場めざして歩いて来るあいだ、子どもたちは1日あたり15—20㎞ずつ進むだけでなく、自分たちで食事を作ったり、テントを設営したりする。そのさい、彼らは周囲の美しさを受動的に観賞するだけでなく、積極的にそれを保護する。本当の旅行者は、森の中のアリ塚一つこわさず（アリは害虫を食べる森の益虫）、焚き火の始末をいいかげんにしたり、ゴミを残して行くようなことは決してない。それればかりか、林務官が倒木や枯れ枝を片づけるのを喜んで手助けする。このような旅の中で子どもたちはリュックサックの正しい詰め方、テントの張り方、上手な火の起こし方、磁石と地図を使って自分の位置を知る方法、川や沼などの障害物の越え方を学ぶ。そしてジャンボリーの会場で、道中身につけたことを試すのである。

……私たちはしばしば、遠いところに美しいもの、珍しいものを求める。だがしばしば、それはごく身近にある。しかも、友人を誘って、リュックサックを背負って、郊外電車かバスに乗るだけでいいのだ……

旅行やハイキングで大事なのは、自宅からの距離ではないだろう。生活とは運動であり、旅行は運動の最良の手助けなのだ。



喫茶店"ルースキー・チャイ"（ロシア・ティーの意味）

中央アジアのトルクメン風のお茶



カザン市（タタール自治共和国）のレストラン――サモワールと紅茶と茶菓子。



ロシアのお茶請け――いろいろな菓子パンやピローグ



ソ連の"茶の湯"

――伝統と習慣――

カメラ A・ウサノフ
Y・アブラモチキン
S・コルイトニコフ

ソ連の〝茶の湯〟

ロシアに初めて紅茶がもたらされたのは一六三八年のことで、これは日本に茶が伝わってから実に八〇〇年もあとのことである。この年、モンゴルの汗がロシア皇帝に茶の葉約70kgをプレゼントとして送り届けたのがロシアの茶の始まりだが、それから40年ほどたった一六七九年には中国との間で茶を輸入する協定が結ばれている。18世紀になるとロシアの大部分の地方で飲みものとして茶がよく知られるようになった。ついでながらロシアのサモワール（湯沸かし器）が出現したのもこの頃である。

ロシア最初の茶の木はクリミアのニキツキー植物園に植えられたが、この地方の気候条件は茶の生育に適さなかった。その後19世紀末から20世紀初めにかけて茶はグルジアやアゼルバイジャン（ザカフカズ地方）、クラスノダル地方（ソ連欧州部の南）で盛んに栽培されるようになった。今日、これらの地域で栽培される各種の茶はソ連国内の需要を満たし、輸出もされている。

ソ連では、他の多くの国々と同じように、茶はただ単なる飲み物ではなく、歓待のシンボルになっていて、客は必ず茶のもてなしを受ける。どんな食事の席でも最後はお茶で締めくくるのが普通である。

もちろんお茶が一番おいしいのは、松ぼっくりや細かく切った枝を焚く本物のサモワールのお湯で入れた時である。だが現代生活では、都会人はフラット住まいが普通だから、こんな楽しみにひたれるのも農村の人に限られる。都会のフラットだとお湯はやかんでガスか電気コンロにかけて沸かすか、あるいは電気サモワールで沸かすのが普通だ。

お湯が煮たち始めたら、熱湯を注いでポットを温める。ポットは小さめの陶磁器が一番いい。ポットが温まったら湯を捨て、適量の茶（2カップあたり2－3g）を入れてから熱湯を7分目まで注ぐ（口いっぱいは入れないこと）。ふたや注ぎ口をふさぐようにポットをふきんで覆う（いい香りが蒸気と一緒に逃げてしまわないように）。そのまま5分ほど置いておき、それから改めて熱湯をポットの口いっぱいに注ぐ。

ポットからカップに7分目ほどお茶を注ぎ、やかんかサモワールのお湯をつぎ足す。ミルクティーを好む家庭も多く、そういう家庭ではカップにあらかじめミルクを入れておき、そのあとお茶を注ぐ。

お茶請けにはケーキや菓子パン、クッキー、チョコレート、ジャムその他の甘菓子がある。好みに合わせてレモンや蜂蜜、ラム酒、コニャック、果物やキイチゴ類、ジュースと一緒に飲んだり、ヘントウ、ジンジャー、カルダモン、シナモンを入れたりする。

中央アジアに住むソ連人は中央アジア産の緑茶を飲む。入れ方は紅茶とほぼ同じだが、大きな陶磁器のポットを使い、お湯を入れ、少なくとも10分はそのまま待ってからティーカップや湯のみ茶椀（中央アジアでよく使う）に注いでそのまま飲む。後からお湯をつぎ足すことはない。

中央アジア、カルムイク自治共和国（ソ連欧州部の南）、ブリャート自治共和国（東シベリア）の農村地方では茶をスープのように、牛乳やヘット、馬乳、麦粉、米と一緒に煮て、塩や時にはこしょうをふりかけて飲む（正確には食べる）。

ソ連国中どこへ行っても、どの食堂、喫茶店、レストランでも必ず紅茶がある。専門の茶店もある。夏の気温が40度C以上にもなる中央アジアには、戸外の涼しい木陰にチャイハナと呼ばれる独特の茶店がいっぱい店開きしている。チャイハナではじゅうたんの上に座り、お茶を飲んでのどの渇きをいやし、元気を回復するだけでなく、ゆったりとした東洋風の会話に時を過ごすことも出来る。

次に一風変わったお茶の飲み方を二、三紹介しよう。

カルムイク風緑茶

沸騰した湯に緑茶を入れ、とろ火で5分間煮る。次によく沸かした牛乳を注ぎ入れ、塩、シナモン、クローブを加え、8－10分煮る。煮汁をこしてからバターを入れ、再び沸騰させる。

材料――水1ℓに緑茶20g、牛乳1ℓ、塩茶さじ1杯、シナモン2g、クローブ5－6個、バター100g。

アイスレモンティー

濃い紅茶を作り、砂糖を加えてかきまわし、8－10度まで冷やす。オレンジやレモンの薄切り、みかんの果肉などを数ふさ入れる。

材料――水1ℓに紅茶10g、砂糖100g、レモン1個かオレンジ$\frac{1}{2}$個。

冷たいフルーツティー

紅茶を入れ、砂糖で甘味をつけてさまし、フルーツジュース類を加えてゴブレットにつぎ分ける。

材料――水1ℓに紅茶10g、砂糖10g、ジュース250g。

猫田選手の遺影の前でフルセットの熱戦となった広島での第3戦（写真提供＝東京中日スポーツ）



猫田氏の遺影を前に熱戦

――20年目を迎えた日ソ対抗バレーボール

中日・東京新聞編集委員　古本　昭三

二十周年を迎えた伝統の国際定期戦「'84日ソ対抗バレーボール試合」（男子）は、愛知県体育館での第一戦を皮切りに横浜大会の最終戦まで、各地で白熱の名勝負を繰り広げてファンを魅了した。先の女子対抗と合わせて観客は約七万人。軽くこれまでの記録を塗りかえた。ソ連のロサンゼルス五輪不参加が発表された直後の試合だけに、日ソ両チームの戦いぶりが注目されたが、選手たちはロス五輪問題を超越してぶつかり合い、スポーツマンシップのさわやかさを印象づけた。

ソ連はモスクワ五輪、ワールドカップ、世界選手権を制した〝三冠王〟。名セッター、ザイツェフを軸に、二ｍのセンター、サビンが健在の上、イワノフ、ビルデラの若手が顔をそろえたパワフル・チーム。日本は五輪代表チーム結成後初の国際試合で、エースの田中、岩田はじめセッター古川、元気な蘇武、岩島らが技術とスピードで対抗した。通算成績はソ連の4勝2敗。日ソ対抗で日本が2勝したのは一九七二年以来十二年ぶりのこと。ソ連の〝胸を借りた〟全日本がこれを今後にどう生かすか、見ごたえのある試合の連続だった。

圧巻はなんといっても「故猫田勝敏選手の追悼試合」となった広島での第三戦。岩田の左端からのスパイクが決まった途端、日本選手全員がやった！とばかり、ガッツポーズで歓声を上げた。フルセットにもつれこんだ末、強豪ソ連からもぎとった念願の一勝だからだ。汗にまみれた日ソの選手たちは、ネットをはさんでお互いの健闘を賛え合った。超満員の会場から湧き起こる盛んな拍手――そんなほほえましい光景をステージ正面に掲げられた猫田選手の遺影が黙って見下ろしていた。

※　※　※

「追悼試合」を提案したのはソ連のプラトノフ監督だという。猫田選手は東京、メキシコ、ミュンヘン、モントリオールと四度のオリンピックで世界一の名をほしいままにしたセッターだが、昨年九月、胃の悪性しゅようのため三十九歳の若さで亡くなった。

昨年春、レニングラードで「サビン杯」の開催中に猫田選手の病状を聞いたプラトノフ監督は「万一の時には、彼の故郷広島で追悼試合をやろう……」と心ひそかに決めていたそうだ。「偉大なプレーヤーの足跡をしのぶことは日本人だけでなく、われわれにとっても大切だ。ネコダの素晴らしさを若い選手に伝えなければならない」――これが長年のライバル、ザイツェフやセリバノフらチームメートの結論になった。

試合に先立ち、ロマノフ団長や両チームの監督、主将らが猫田選手の遺影に花束を捧げ、約五千人の観衆もかつてソ連チームをほんろうした猫田選手の頭脳的プレーをしのびながら黙とうした。傍らの礼子夫人（三七）は長女桂子さん（中3）、次女優子さん（小6）、長男忠明君（小1）の肩を抱き、「ネコダはわれわれの中に永遠に生きている」と夫人を慰めたプラトノフ監督の言葉を繰り返し噛みしめていたという。

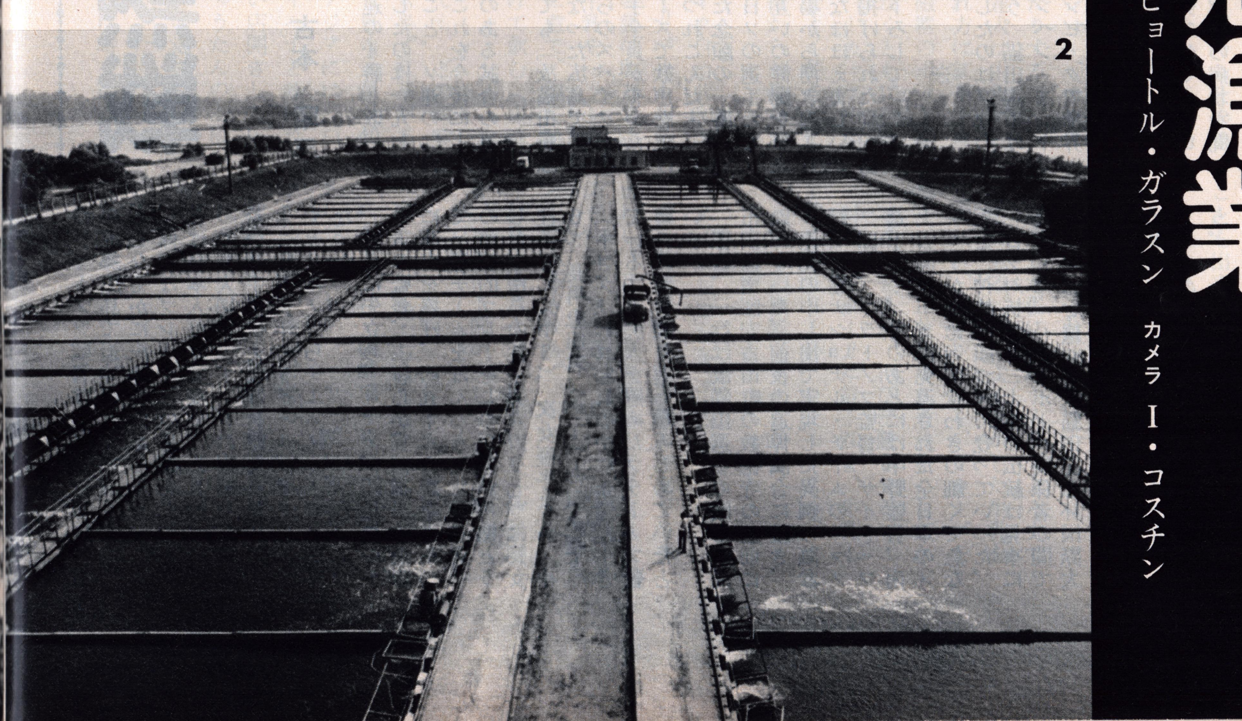
翌日、一行は故猫田選手の眠る広島市安佐南区安古市町の教徳寺の墓前にぬかずいた。前夜の追悼試合に続き、ソ連側の申し出で実現した異例の墓参だ。ソ連ナショナル・チームのロマノフ団長、プラトノフ監督、ザイツェフ選手……。そのあとには中野監督、南、大古両コーチに先導された全日本のメンバーが教徳寺本堂わきの細くて急な坂を、神妙な顔つきで登っていった。

日ソ対抗試合二十年の伝統は見事に結実した。バレーボール関係者の間では一周忌を待って「猫田記念杯国際大会」の実現に向け本格的に取り組もうという動きも出てきた。「猫田杯」はソ連の「サビン杯」とともに世界バレーボール界の二大イベントになるだろう。

発電所の温廃水を利用した養殖漁業

ウクライナ漁業研究所所長　ピョートル・ガラスン　カメラ　I・コスチン





熱併給発電所では、発電機のタービンを回したあとの熱い蒸気を使って、熱交換器で水を暖め、こうしてできたお湯を暖房用に各家庭や公共施設に送っている。蒸気は次第に冷えて、やがて水になる。以前にはこの水はそのまま自然の水系に排出され、熱バランスを崩して、しばしば生物に悪影響を及ぼしていた。こうして〝熱汚染〟という用語さえ生まれた。現在、発電所の温水は秋と冬に養魚場の池を暖めるために使われ、高級魚の養殖に効果を上げている。

ソ連漁業省は一九九〇年までを見込んだ、温廃水の養魚場での周年利用基本構想を作成した。いま、ウクライナ共和国をはじめ全国の大規模な熱併給発電所や火力発電所、

1　チョウザメのベルーガとステルリャジの交配種ベステル。温廃水を利用した養殖漁業に有望な高級魚だ。

2　ウクライナの大都市には発電所の温廃水を利用した魚の養殖場が10以上はある。

3　ソ連では水力発電所の貯水池を利用した漁業も盛ん（ドニエプル川のキエフ水力発電所の貯水池の引き網漁）





原子力発電所の周辺に養魚場が組織されている。これらの養魚場では年間七万tの淡水魚の水揚げが予定されており、これによってソ連の淡水魚生産量はかなり増大する。

ウクライナ共和国を例にとると、キエフの近くの熱併給発電所は年間約六〇億kWhの電力と三五億カロリーの熱を生産する。この発電所の温廃水で年間1・5tのコイが養殖されており、ニジマスの養殖も始まった。ニジマスは冬季間、温水を使うと、夏の自然の条件下よりも成育がいい。

発電所の温廃水を利用しているウクライナの養殖漁業者は新しい種類の高級魚の順化に成功し、その養殖と漁獲の工業的方法を開発した。温廃水を利用した養殖池はベステル（チョウザメのベルーガ種とステルリャジ種をかけ合わせて数年まえに作り出された新種）の成長に最適で、自然の条件下の5倍も速く成長し、わずか2年で出荷体重に達する。

ウクライナの温水養魚池では米国のアーカンソー州から移入したアメリカナマズが見事に順化した。発電所の温廃水を使う養魚池では水温は30—32度Cにもなる。アメリカナマズはこのような条件のもとで活発に採餌し、急速に体重を増やす。わが研究所では現在、このナマズを商業的な規模で養殖するための研究に取り組んでいる。







4　養殖用のニジマスの稚魚

5　ウクライナ漁業研究所の実験養殖魚場の人工ふ化場

6　将来が期待されるアメリカナマズ

7　養魚場の給餌風景

地球外文明からの信号か？

フェセンコ博士の新説をめぐって

地球外文明を探している各国の学者たちは、高度の理性を持つ異星人が自分たちの存在を知らせるために強力な電波を連続的に発信するようなことはないだろう、という考えをすでに一度ならず表明している。そのためには不可能なほど大量のエネルギーが必要だからだ。異星人はむしろ、もっと経済的な別の方法を見つけ出すだろう。そしてわれわれ地球人は、異星人の信号を作為による"奇跡"としてキャッチするだろう。

ソ連の天文学者で物理・数学博士のボリス・フェセンコは、まさにそのような現象を発見したと考えている。フェセンコ博士の考えを紹介しよう。

フェセンコ博士の説

地球から最初の信号が遠い宇宙へ送られたのは約10年まえのことだ。これによってわれわれの文明が、宇宙文明に生まれ変わったと考えることができるだろう。宇宙文明としては、われわれはまだ非常に日が浅い。だからわれわれが受け取る最初の信号は、われわれより発達していて、われわれを先に見つけた者からのものだろうと考える方が無難だ。そして恐らくわれわれは、この信号を地球人への知的贈り物として受け取るだろう。

生命がさまざまな場所で、さまざまな時期に発生するものなら、生まれつつある仲間を自己破滅から守るような、先輩文明としての組織された勢力が存在するかもしれない。しかも、それぞれの花はそれぞれの香りを持つべきだという掟は破らないような。

この高度な理性は、いまのところ恐らくわれわれから何の信号もキャッチしていないので、最初の信号は情報の受信や処理を当てにしない宇宙灯台の形をとるだろう。宇宙灯台がたくさんの天体の中にまぎれ込まないよう、宇宙の奇跡の形、すなわち、それが偶然に起こる確率が極めてわずかな現象の形をとらせるだろう。たとえば、比較的まれにしか出会わない天体を地球の公転軌道（黄道）の極のすぐ近くにくるようにするだけで十分だ。地球と関係のある宇宙空間の点でこれほど確かな点はほかにない。そのような信号は、まさに地球に向けられているとしか考えようがない。それに、地球以外の文明は、その作為性に絶対気がつかないだろう。

中心に燃える星を持つ緑色がかった雲がほぼ正確に黄道の北極に位置していることを確認して、われわれは驚いた。これはずっと以前から知られている惑星状星雲NGS6543で、その明るさはいままで知られているすべての惑星状星雲に比べて約$\frac{1}{10}$である。このような天体が黄道の極の一つと一致する確率は、せいぜい0・0005以下である。

惑星状星雲の寿命は、宇宙的な規模からすれば短く、数万年である。他の諸状況を考慮すれば、もしわれわれが実際に信号に出会ったのなら、それは単に地球に向けられただけでなく、地球の技術時代の開始に合わせて送られた信号であると結論づけることができるだろう。

惑星状星雲NGS6543までの距離は一六〇〇—三〇〇〇光年。つまり、信号は三〇〇〇年以上前に考え出されたのだ。それを考え出した異星人は、地球を研究し、地球人の発展を予測していた。距離の膨大さは、高度文明が地球に直接干渉する意図のないことを暗示してはいないだろうか？

星雲NGS6543は肉眼では見えない。無限に遠い、りゅう座の中にある無害の緑色がかった星雲は、われわれの子孫に輝かしい将来を予告しているように思われる。

宇宙のごみ捨て場では？

地球外文明の信号を発見したようだというボリス・フェセンコ博士の発表について、ソ連の有名な天文学者ウラジーミル・ラジエフスキー教授が解説する。

ゴーリキー市のボリス・フェセンコ博士は、太陽系に最も近い星雲の一つで、構造がいくらか珍しい惑星状星雲NGS6543が、地球の公転軌道の極とほとんど一致していることを発見した。そして、このような一致の確率はゼロに近いことを示した。

フェセンコ博士自身は惑星状星雲がここに現われたことを、高度文明の後進兄弟への独特の贈り物だと解釈している。その目的は、一つには、われわれが孤独な存在ではないのを理解させることであり、もう一つは多分、核原料ストックの悪用をわれわれに警告することだろう、という。

このような解釈には原則として同意できる。実際、われわれが地球外理性の探求に成功していないのは、地球人の勝手な思い込みの結果だという可能性は否定できない。われわれは、異星人が知的な存在なら、何らかの波長の長い電波か何らかのコード・システムを使うはずだ、と思い込んでいる。あるいは、別の種類のエネルギーを持っているか、エネルギー・プロセスの転換法を知っている異星人にとっては、自分たちの存在を知らせる電波信号を絶えず送ることよりも、巨大な灯台を地球の公転軌道の極に据えることの方がはるかに簡単かもしれない。ずっと昔にこの灯台を据えつけるにあたって、異星人がわれわれの文明の発展についての根拠ある予測にもとづいており、星雲が黄道の極の上を通過する時間を正確に計算していたことはもちろんだ。

しかし、フェセンコ博士が言うような高価な贈り物（惑星状星雲は他の銀河系でも見られる）が、高度文明の独自の利益にかなう一定の実用的な目的を求めることなく作られたと考えるのはむずかしい。星雲6543を作った仮定の文明について具体的に述べてみよう。

一定の発展段階で、地球外文明には膨大な核燃料ストックが出現したかもしれない。やがてそれを処分しなければならなくなった。致死的な作用のない"きれいな"エネルギーが発見されたためかもしれないし、惑星内あるいは惑星間の争いで理性と平和の勢力が勝利したためかもしれない。その他いろいろな理由があり得る。

こうして、核燃料あるいは化学的、細菌学的その他の危険な廃棄物のための宇宙の"ごみ捨て場"をどこにするかという問題が生まれた。最も近くに生まれつつある文明、すなわち地球文明に害を与えず、同時に、いつか地球人が放射性原料のストックを廃棄するとき、自分たち、すなわち異星人に害が及ばぬよう、地球人がどの方向にそれを捨てるべきかを分からせるために、前述の廃棄物を処分するための場所として地球の公転軌道の極方向が選ばれた。

このような仮説の枠内では、星雲NGS6543の中心星の発生にはまだ答えられない。だが全体として、フェセンコ説はかなり真実性があり、人類の発展の現段階では極めて教訓的である。いずれにせよ、見事な説だ。

アプローチはすばらしいが・・・。

ソ連科学アカデミー電波天文学学術評議会"地球外文明からの信号を探る"セクション学術書記レフ・ギンジリスの意見。

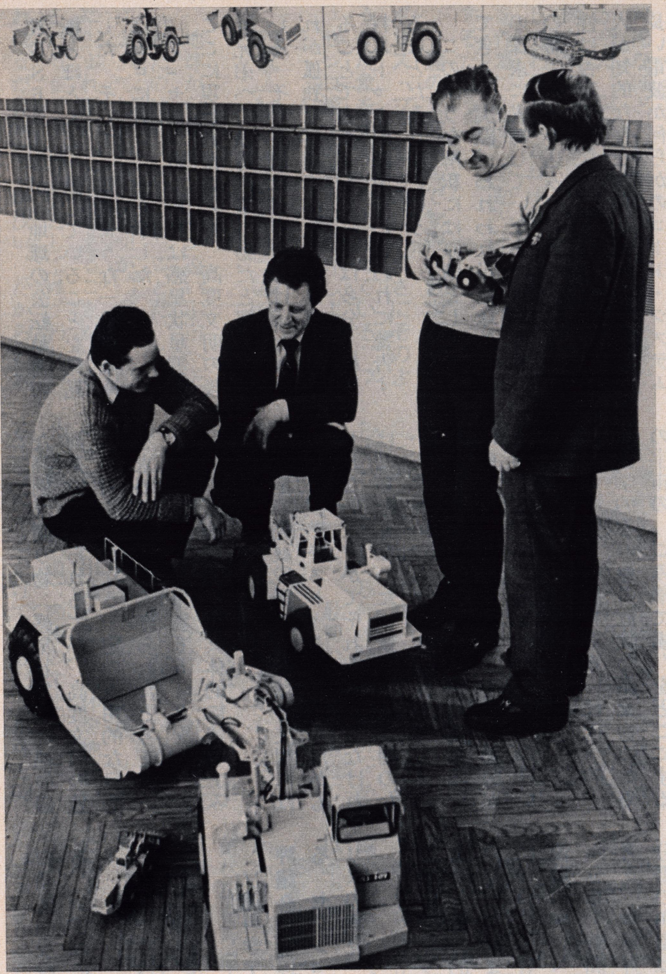
ボリス・フェセンコ博士の論文で何よりも魅力的なのは、その人道的な指向だ。これまで宇宙からの信号の基準について学者たちは、単色性（周波数領域が狭い）、出力の特殊なスペクトル分布、時間の不定性が特徴であると考え、地球外理性の信号がやって来る分野の角度は狭いと予測していた。しかし、その後の研究によって、そのような物理的な基準は一義的なものではないこと、つまり、そのような基準を根拠にして宇宙からの信号が作為的なものか自然のものかを判断することはできないことが分かった。フェセンコ博士はまったく新しいアプローチを提案した。信頼、謙虚、寛容が地球外文明からの信号の特徴だというのである。

それでも私は、惑星状星雲NGS6543は確かにユニークで、黄道の極と一致しているものの、それが遠い宇宙の兄弟からわが文明へあいさつを送るための灯台であるとは考えない。もちろん、時間と空間の一致は感銘深い。だがそれだけでは、この星雲が高度文明の灯台であると結論づけるには不十分だと思う。もしそうなら、不思議な現象はすべて同じ立場から見なければならないだろう。

惑星状星雲の形成は、巨星の進化のまだ十分明らかではない一段階としてではあるが、法則的なものである。そのこと自体は、惑星状星雲の形成への理性的な力の関与を否定するものではない。宇宙飛行学の創始者コンスタンチン・ツィオルコフスキーは、高度に発達した地球外文明はずっと以前に宇宙のわれわれから見える分野を開発し、自然の宇宙プロセスに広範にわたって影響を与えている、と考えていた。彼は書いている——宇宙は「自分を支配する力を自ら自分の中に生み出している。それは自然の他のすべての力よりも強大である。その力とは理性である」

私はこの考えにまったく賛成だが、不思議な現象のすべてを強力な銀河系文明のわれわれに対する関心の兆候だとわれわれの方から考えるのは、あまりにも自己過信ではないかと思う。宇宙は独自の法則によって発展しており、星が天空で燃えているのは、決してわれわれの目を楽しませるためではないのである。

話題を拾う



ブルドーザーにもエアコン

ベロルシア共和国ミンスクのミンスク科学・生産合同“ドルマシ”は大規模な土木工事をするための各種の機械を製造している。新製品の中には45tの土砂を切り取って1回で運べるスクレーパー、1200馬力のタイヤドーザー、生産性の高いタイヤローダーなどがある。この合同の設計家たちが開発した30種類以上の機械はわが国の12の工場で生産されている。

設計者たちは工程の簡略化とコストダウンにつながる機体各部のモノコック化と運転手のための居住性の向上を追求している。土木機械とはいえ運転室にはエアコンが装着され、各装置は倍力システムで作動する。写真下は作業中のタイヤローダーTO18A。



子供11人の大家族

ボルガ沿岸のゴーリキー市に住むレスニコフ夫妻は16歳を頭に11人の子持ち（息子8人、娘3人）。夫のワレリー（40歳）は国立ゴーリキー大学付属の研究所の技師、妻のラリサ（37歳）は主婦専業。もちろん子供たちは家事を手伝い、上の子は下の子の面倒をよくみる。国は一家に大きな住居を家賃免除で提供し、さまざまな援助を与えている。夫が勤める研究所の労働組合も援助してくれる。写真は末っ子オリガの1歳の誕生日に祝福を受ける一家。





ガズリの復旧進む

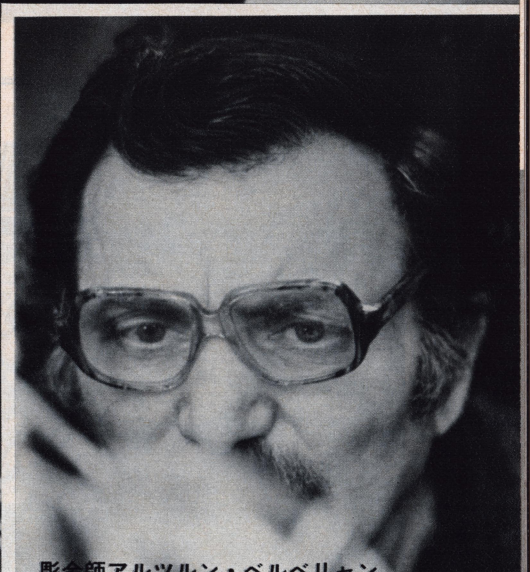
去る3月19日の23時29分（モスクワ時間）、中央アジアで地震が起こり、キジルクム砂漠のガス採掘者のまちガズリ（ウズベク共和国）が破壊されたが、復旧作業が順調に進んでいる。現地の震度は9（12階級震度階）を超えたが、被災者は100人余りだった。数日間で学校、幼稚園、病院、商店が開かれ、輸送機関が動き出し、通信、水道が復旧し、送電が再開された。3日目には1昼夜で3200万立方mのガスを採掘できる230のガス井全部が復旧した。ガスはパイプラインを通って国内のさまざまな地域に送られている。

伝統を継ぐ アルメニアの彫金師

アルメニア駐在本誌記者 アベト・デムリャン　カメラ V・フェドレンコ



ベルベリャンの作品の特徴は伝統と革新の融合。写真はその制作中の一瞬。



彫金師アルツルン・ベルベリャン

アルツルン・ベルベリャン。この人の名はアルメニア民族工芸館の陳列室や、モスクワ、レニングラード、その他のソ連の大都市や欧米の多くの国で開かれた工芸展を訪れた人にはおなじみだ。彼の作った銀や銅の細工品は、昔のアルメニアの名匠の伝統を見事に受け継いでいる。皆さんをこの民芸家の工房に案内しよう。

アルメニア共和国の首都エレバンの中央部に、薄いピンク色の凝灰石を使った新築のアパートがあり、周りにもよく似たアパートが並んでいる。このアパートの一階に入ると、端正で古風な装飾を施した金属張りのドアとその横の奇妙な形の大きな切り株が目につく。思わずドアを開けて、ドアの向こうに何があるか見たくなる。中へ入って見る。玄関の床にはワインを入れる素焼きの大ツボ、時を経て黒ずんだ銅製の水差し、たらい、中をくり抜いた大きなカボチャや、模様の入った臼、美しい東洋の敷物、じゅうたんなど……が置いてある。

玄関から部屋に入ると、そこはまるで昔の皇帝の部屋のようだ。壁には古代アルメニアの戦士の盾が掛かっており、部屋の隅には背の高い銅製の燭台が置かれ、小机の上にはブロンズのカップと神話に出てくる翼のある神々の像がのっている。壁には工具（その多くは百年余り前に作られた）がきちんと並んでいる。部屋の中央に小さな金敷き、その横の机には工具や石膏の原型、銀や銅のかけらがのっている。また制作中のカップや首飾り、さまざまな装飾品の一部もある……これが民芸家アルツルン・ベルベリャンの工房である。

われわれが訪れたために仕事を中断した彼は、隣に来て座り、まるで初めて見るかのように、自分の作品を見回す。自分の作品の出来をあらためて評価しているのか、あらを探しているのか何ともいえない。そして客の口から思わず賛嘆の言葉が出ると、彼は困ったように目を伏せて「いや別に」と静かに言う。

アルツルン・ベルベリャンはこれまでの生涯をずっと好きな仕事に打ち込んできた。父祖代々彫金師である家庭に生まれ育った彼は、自分の祖父も父親もひたむきに守ってきた先祖伝来の職業に、小さい時から引かれてきた。そして彼もまた、その職業にほぼ半世紀ものあいだ携ってきた。祖父や父から彫金の技能を学び、秘けつを知った。

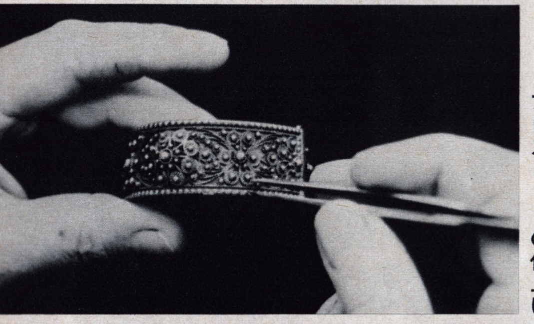
アルメニアの工芸の歴史の中でも、一〇〇〇年の歴史を持つ貴金属細工は重要な地位を占めている。数世紀にわたって形成され現代にいたったアルメニアの貴金属細工は、はっきりした民族的な特徴をそなえ、芸術的伝統と技術をしっかりと守っている。すぐれた手本のもとに何代ものアルメニアの金属細工師が育ったのであり、ベルベリャン家の代々の細工師もそれらの手本に学び、息子に仕事のコツと秘けつを伝えた。

若いころアルツルンはなかなか自分の才能を発揮することができなかった。そもそもベルベリャン一家は、一九一五年のトルコ人による大量殺りくを逃れるために、やむをえずアルメニアから他国へ移住したのだが、移住先では自分の仕事場を持ったり、作品を制作したりすることは夢にも考えられなかった。アルツルンは父から譲られた工具以外何も持っていなかったので、よそで徒弟として働くしかなかった……

アルツルンが制作に完全に身を入れて打ち込めるように



民族的な伝統を継ぐベルベリャンが作った水差し



ブレスレットの仕上げ



ベルベリャン作のペンダント

なったのは、かなりあとのことで、ほかの多くの亡命者たちと、やっと自分の先祖の地のソビエト・アルメニアに戻ってからだ。

アルツルンは語る。

「家庭を持ったのも帰国してからでした。12歳になる娘のアナイトと11歳の息子のアルギシチが真面目で彫金の仕事に愛着をもっているので、本当にうれしい。父や先祖の伝統の跡継ぎがいるというわけですよ。注文が多いときは妻のラーヤも手伝ってくれます。妻も彫金師で、かつては私の弟子でした。でも子供たちが私の仕事を手伝ってばかりいるなんて思わないで下さい。何分まだ普通の中学生なので、水泳に熱中し、英語を勉強したり絵を描いたりでしてね……」

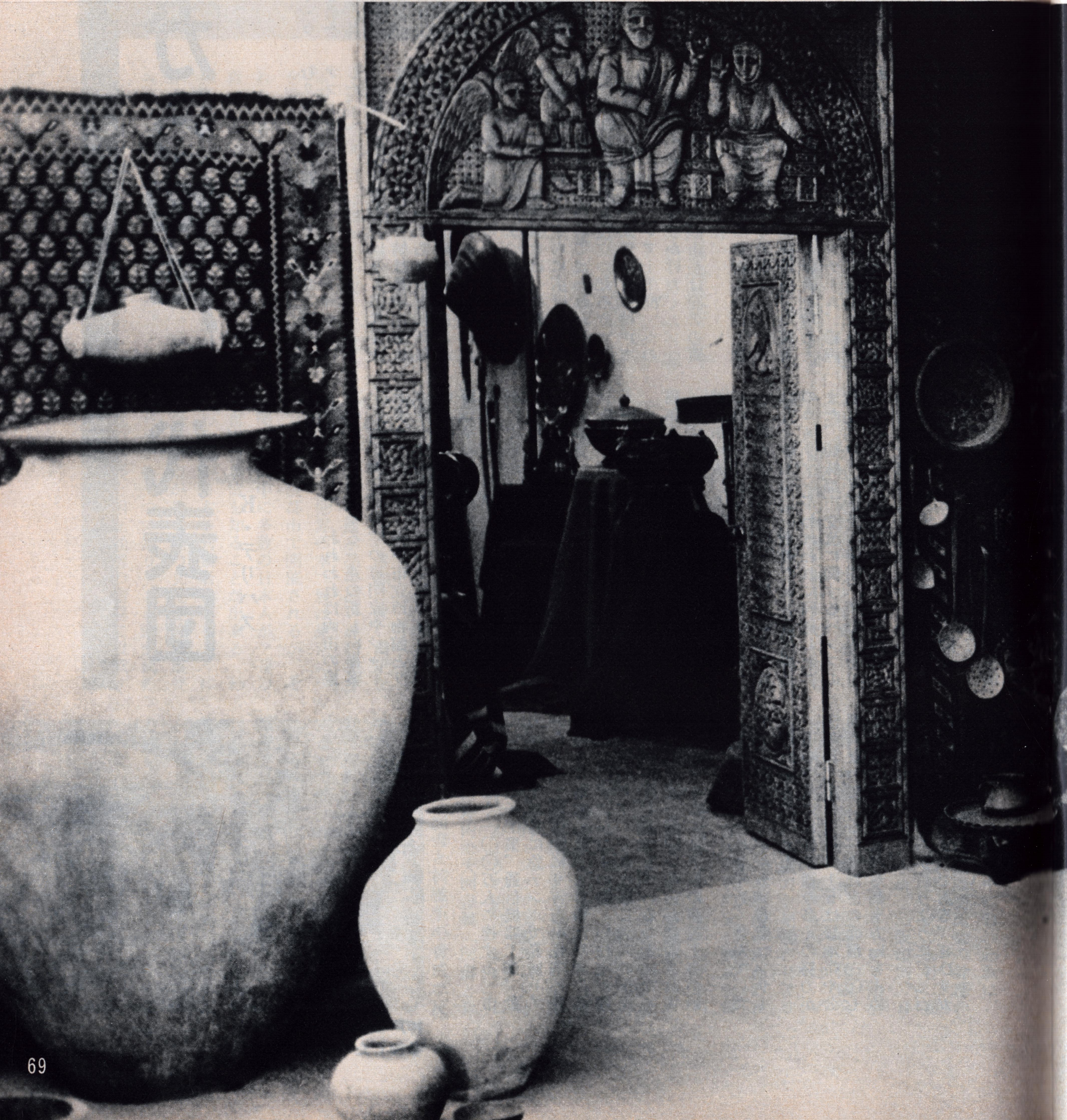
アルツルン・ベルベリャンは帰国後アルメニア人の美術の研究に長い時間をかけた。アルメニアの多くの博物館の常連となり、共和国内の全部の都市を回って、すぐれた建築文化財を丹念に研究した。民族的な装飾のモチーフや現代アルメニアの木彫師、石工、彫金師、チェカンカ（金属打ち出し）細工師の手法を貪欲にとり入れ、美術史家の研究から学んだ。この探求こそ、いわばアルツルンの新しい学校になった。ここで彼は新境地を開拓し、その後の作品のテーマのヒントを得た。

アルツルンの作品は現代的である。と同時に、アルメニア民族がはぐくんできた豊かな芸術的遺産から離れることはない。彼の場合、テーマの新しい解釈や、ほんのかすかな線を使うことで、古い形式の伝統や題材の民族的モチーフを強く押し出すことができる。首飾り、燭台、花びん、イヤリング、ベルト、杯——名工の手から作り出されるこれらの一つ一つの完ぺきな出来、洗練された素朴さ、模様の繊細さはまさに賛嘆に値する。こんな芸術品だから、見る人にはまるで実用品ではないような印象を与える。作品に応じた金属の処理も、アルツルンの作品をすばらしくしている大きな要因だ。ブロンズ、銅、銀が、あるものは光沢のないくすんだ色を出し、あるものは磨き上げられた表面が鮮やかに光り、あるものは錆でほんのり黒みを帯びている。

そして何よりも肝心なのは、どの作品にも、美術に目のある人なら、これはアルツルン・ベルベリャンの作品だと間違いなく言いあてられる独特の味が刻まれていることである。



自宅でくつろぐアルツルン・ベルベリャン



姉妹都市関係樹立10周年

リガ市から神戸へ代表団

K・デリバス



宮崎神戸市長にプレゼントを贈るウルマニス・リガ副市長

去る5月17日、神戸市役所でI・ウルマニス・リガ市ソビエト執行委員会副議長（副市長）と宮崎辰雄神戸市長がなごやかに会談した。リガ市代表団（6名）はリガ・神戸姉妹都市協定締結10周年を記念して、8日間の日程で来日したもの。またこの10周年に合わせてアンサンブル〝ロターリヤ〟を含むリガ市民の観光団とリガの「ラジオテフニク」バレーボールチームも来日した。

会談の席上宮崎市長はリガ市代表団を歓迎し、自分がリガ姉妹都市協定に調印する名誉を担ったちょうど10年後のきょう、リガの使節を迎えることができてほんとうにうれしいと強調した。

さらに宮崎市長は次のように述べた。

「リガ代表団の神戸まつり参加ならびにバレーボール親善試合は、両都市間の親善交流のわくをさらに広げるのに役立つだろうし、ひいてはわれわれ両国間の関係改善にも役立つだろう」

最後に宮崎市長は来年8月に神戸で開かれる「ユニバーシアード'85」へのソ連選手の参加を呼びかけた。

ウルマニス・リガ副市長は記者の質問に次のように答えた。

――姉妹都市関係の発展について神戸市側と行った交渉の成果は？

「これまでリガ市は、神戸市との親善交流の分野でたくさんの経験を積んできた。代表団、スポーツチーム、絵画展や写真展などの交流は定期的に行われている。一九八一年には〝ポートピア81〟に参加した。学術文献の交換も、ラトビア共和国科学アカデミー図書館と神戸市立外国語大学図書館との間で活発に行われている。動物園職員間の学術交流や植物の相互交換も実施されている。

今度訪日して、われわれは両市の協力のわくを拡大する一連の新しい提案をした。例えば医学の専門家やジャーナリストの交換、神戸市立博物館とリガ歴史博物館との間の交流の確立だ。われわれは両市に姉妹校を作る問題を審議する用意があり、その具体的な一歩として、今回、神戸のある学校のために児童画を持ってきた。

さらにことしの秋、神戸市をはじめ日本各地でラトビア共和国の社会・経済発展展、ラトビア民芸展、ラトビア民族アンサンブル〝ダイレ〟の公演などが行われる」

――リガ市民は姉妹都市関係樹立10周年をどのように祝う予定か？

「まず8月に、宮崎市長を団長とする神戸市代表団をわが市に招待している。この日をできるだけ盛大なものにしたい。親善の夕べを催し、神戸紹介の映画を上映したい（そのためリガ撮影所のカメラマンがわれわれに同道した）。また、姉妹都市交流に関するパンフの発行、神戸写真展の開催、歴史博物館内にリガ・神戸交流コーナーを設置することを考えている」

――10年という期間は両市の交流の歴史で決して短くはない。この間リガ市の姿はどう変わっただろうか？

「この10年間にリガ市の人口は10％増え、まもなく一〇〇万人に達する。市の電機・電子工業、通信機器工業、動力機械工業は特に急テンポで発展している。ここ数年間にリガ市の住宅戸数は約$\frac{1}{3}$増加した。1日当たり居住面積九〇〇〇平方m以上の新しい住宅が建てられており、これは毎日50人の市民が居住条件を改善していることになる。多くの学校、病院、商店が建設されている。まもなく地下鉄の建設工事が始まる。

修復工事のため2年近く休んでいたドーム寺院も、オルガン音楽コンサートのため再開される。

市の緑化には従来通り多くの努力が注がれ、市の面積の$\frac{1}{5}$は緑地帯や公園になっている。また市の面積三〇七平方kmのうち、水域が49平方kmを占めている。

日本の友人たちが言うように、〝百聞は一見に如かず〟である。ぜひリガ市に来ていただきたい」



神戸まつりのパレードに参加したリガ市の代表団



会場に展示されたソ連図書の一部

「世界の本」展に参加したソ連図書

――ネベンジャ・ソ連代表団長に聞く

5月18日から21日まで東京・池袋のサンシャインシティ文化会館で開催された「世界の本」展にはソ連の書籍も展示され、ソ連から代表団が来日した。この機会を利用して本誌記者は、代表団長のアレクセイ・ネベンジャ・ソ連国家出版・印刷・図書販売委員会副議長に、最近のソ連の出版事情などについて話してもらった。

現在ソ連では毎年8万点以上、総発行部数約二〇億部の本とパンフが出版されている。毎年二〇〇〇人余りの外国人著者の作品が翻訳されており、翻訳書の発行部数は一億二〇〇〇万部にのぼる。

ソ連では日本人の書いた作品が常時翻訳出版されており、日本の古典文学や現代作家の作品はソ連の読者に好評である。戦後だけでも、ソ連では日本人の書いた本やパンフが七〇四点、計一七〇〇万部以上が出版された。

初めて東京で開催された国際書籍見本市「世界の本」展には約三〇〇〇点を数える広い分野のソ連書籍が出展された。社会・政治・経済コーナーには哲学、科学的無神論、歴史、地理、実務経済、財政学、法律関係の書籍が展示され、マルクス、エンゲルス、レーニンの著作がその中央を飾った。

科学技術書コーナーには英語やロシア語の自然科学書が展示された。

便覧、辞典（一〇〇点）もひとまとめにして展示された。

美術書の中で注目に値するのは、『モスクワのクレムリン』『国立プーシキン美術館の傑作』『ソ連の芸術』『現代ソ連の水彩画』などである。

ソ連諸民族の言語で書かれたものも含めた中学校用教科書、大学用教科書、ロシア語学習者向けの一連の興味深い本は「ロシア語」出版所の出版物である。

日本語で出版された本、ソ連人が書いた日本関係の本、ロシア語に訳された日本人著書の作品は独立したコーナーに展示された。

出展されたわが国の図書に日本の人々は注意深く、好意的に接してくれた。百科事典や辞書類、それに美術書が特に好評だった。

われわれの日本の同業者たち――出版社や図書販売会社の代表者は「世界の本」展へのソ連の参加に深い満足を表明し、ソ連の展示品に高い評価を与えた。この「世界の本」展は東京についで日本の数都市で開催されるが、その開催期間中に多数の日本人がソ連の図書出版事情を知ることが出来る。われわれは、日本の同業者と同じように、書籍見本市が日ソ間の文化交流の重要なパイプの一つであり、ソ日両国民の交流の発展と相互理解の増進に貢献すると確信している。

「世界の本」展開催中にわれわれは、社団法人出版文化国際交流会の幹部の方や岩波書店、講談社、ナウカ社、裳華房、日ソ図書、学研、凸版印刷、日ソ著作権センター、大日本インキ化学工業、その他の出版社、団体、印刷会社の代表者と会い、商談を行った。ソ連の出版組織との協力を発展させようとする日本の出版人の熱意をわれわれは確認した。日本の専門家の参加を得てソ連で印刷業セミナーを開催する可能性について有益な意見が交換された。

ソ連代表団を代表し、日本の出版人の方々の温かいもてなしに感謝したい。同時にこの機会を利用して、一九八五年9月10日から16日までモスクワで開催される第5回モスクワ国際書籍見本市へ参加下さるようご招待したい。この見本市の枠内で大図書展「図書と青年問題」、「図書と核戦争の脅威に反対する諸国民の闘争」が催される予定である。この図書展に参加したい出版社、団体は本をお送り願いたい。最高30点まで受け入れます。

一九八三年9月に行われた第4回国際書籍見本市には90カ国以上から二六〇〇社以上が参加した。来年の国際書籍見本市も極めて盛大なものになるだろうと予想している。日本の出版人の方々をモスクワでお待ちする。



「ほんとにすばらしいおへやだわ……」（V・ザグメンヌイ撮影）

短信アラカルト

60巻のシベリア・フォークロア集成

ソ連科学アカデミー・シベリア部が『シベリア・極東諸民族フォークロア集成』全60巻の出版を準備している。この集成には民族語の多いこの地域の33民族の口碑文学の傑作——三万行の大叙事詩からことわざ、慣用句まで——が収められる。テキストは原語とロシア語の二つの言語で収録される。

各巻には民族歌手の声、歌、古い儀式を録音したレコードがつく予定。そのほか、民族音楽や民族工芸について記述がある巻には多数の解説、注釈、音楽や芸術に関する論文が入る。

第1巻から第10巻までの原稿はことし中に完成し、1—2年後から順次刊行されることになっている。

実験装置内で5カ月過ごす

2人の若い研究者ニコライ・ブグレーエフとセルゲイ・アレクセーエフが、密閉された実験装置〝ビオス3号〟の中で5カ月過ごした。この装置では人間を含む生態系内の物質循環がクローズドサイクルになっており、軌道宇宙ステーション内の一部の生活条件をシミュレートしている。この実験はソ連科学アカデミー・シベリア部クラスノヤルスク生物物理学研究所で行われた。

現代の宇宙船では特殊フィルター、複雑な再生システムが水と空気を浄化しているが、〝ビオス〟では居住研究者の主食にもなった作物（小麦と10種以上の野菜）がこの作業をやってのけた。面積60平方mの菜園は4—5人分の酸素を供給できた。数十の自動システムと数百の計器が研究者たちを助けたが、その多くは同研究所で開発されたものである。

〝ビオス〟システムが役に立つのは地球圏外だけではない。それは北極や南極、砂漠や高山、地下や水中で人間に確実に奉仕するだろう。

ヘビのサーカス

ちょっと例のないヘビのサーカスがウズベク共和国（中央アジア）のグルレン村にある。舞台では巨大なニシキヘビ、コブラ、エファ（クサリヘビの一種）、ギュルザ（同）が演技する。それぞれの〝出し物〟はエキゾチックでスリルに富んでいる。観客はコブラの珍妙な踊りを息を殺して見詰めている。エファは空中に跳躍し、紙の的に穴を開ける。中心的な出し物はシャーという呼び名の3mのニシキヘビの演技だ。このニシキヘビはフルートの音に合わせて調教師のファルハド・ラジャボフの体にぐるぐると巻き付き始め、最後に彼の肩に頭を乗せて眠ったふりをする。

ファルハドの助手は奥さんのシリン。2人はプロの芸能人ではなく、地元の文化会館のスタッフ。この文化会館にアマチュアのサーカス・スタジオがあり、それがこの〝ヘビのサーカス〟の土台になっているというわけだ。

働き者の腕時計

ベロルシア共和国の首都ミンスクの〝インテグラル〟工場で多機能型デジタル腕時計〝エレクトロニクス〟（液晶表示）の生産が始まった。この腕時計は、例えばいつでも脈拍を表示したり、服薬時を知らせたり、毎朝の目覚まし時計にもなる。この腕時計は1週間分のバスまたは近距離列車の時刻表を記憶できる。

アレルゲンのカレンダー

ウラジオストクのソ連科学アカデミー極東学術センター太平洋地理学研究所の学者たちは、花粉でアレルギー症を引き起こす現地の植物の開花カレンダーを作成した。これらの植物の分布地帯は特別の地図に示されている。花粉刺激物についての情報は、夏にサイクロンや台風に頻繁に見舞われるプリモーリエ（沿海）地方の気象条件下では特に重要だ。この時期、アレルゲンは風で遠くまで運ばれるからだ。カレンダーは新しい保養地帯の配置やサナトリウム、ピオネール・キャンプの建設、観光コースの選定のさいに利用される。

リガ市のテレビ塔

ラトビア共和国の首都リガの、市を貫流するダウガワ川の島の一つで、二つの展望台を持つ高さ三六八mのテレビ塔の建設が終わりに近付いている。この塔は同類の構造物の中で第1位の高さを狙うものではないが、建設には技術的に興味深い新機軸が用いられた。塔は直径75mの円に沿って対称的に配置された、高さ二一七mの3本の鉄柱（中心に向かって湾曲）に支えられている。工事の初めには鉄柱と鉄柱の間に高さ二五〇mのエレベーターシャフトと組み合わせたアンテナ部分があった。工事が進むにつれて、重さ約六〇〇tのアンテナ部分はエレベーターシャフトに沿って一〇〇m以上押し上げられた。予定の個所でアンテナ部分はエレベーターシャフトから分離され、3本の支柱によって形成された台の上に据えつけられた。

ノーボスチ通信 特派員報告

揺るがぬ平和こそわが願い

（ワシントン）

このほど米国の著名な実業家アーマンド・ハマー氏はワシントンのナショナル・プレスクラブで次のような趣旨の講演を行った――

ソ連の人々は米国やほかのどんな国とも戦争をしようなどとは考えていない――私はこう信じている。ソ連国民は二〇〇〇万の人命がナチズムの凶手にかかったことを忘れていない。結婚式のあとで花嫁が無名戦士の碑に献花する慣習のある国がソ連のほかにあるだろうか？

世論調査によると、米国民だって核戦争などはしたくないという。それならなぜ話し合いをしないのか？

去る3月2日の選挙演説の中で、ソビエト国家の最高指導者K・U・チェルネンコはいくつかの未批准の条約や、米国政府が中断した（再開すれば米ソの対話の土台に利用できるはずの）交渉を挙げた。こうしてK・U・チェルネンコはわれわれ米国側に率直に手を差し伸べ、第一歩を踏み出した。なぜこれを無視したり、伸ばされたその手を払いのけねばならないのだろうか？

多くの運命がかかっている問題を延び延びにすることは米ソのどちらにも許されてよいことではない。われわれは歯まで武装した世界に住んでいるが、それでもなお世界の年間軍事費は総計七五〇〇億ドルに達しており、しかも大半は核兵器に使われている。最近は宇宙兵器が問題になり始めている。もうこんなことを止める潮時ではなかろうか？

私は世界の将来は私たちが意思を疎通できるかどうかに大きくかかっていると思っている。私の余生はいくばくもないが、私としては相互理解の達成に全力をかけるつもりだ。ソ連と競争するなら、新しい安全なエネルギー源の開発か、世界中の全民族の生活水準を引き上げるとか、子供の教育を改善するとかいった最も崇高な目的達成の面で競争したい。われわれの存在を無に帰するような軍拡競争を打ち切るために競争したい。

パンジシール地区の平定で住民続々帰る

（カブール）

風光明美なパンジシール渓谷へ通じる道路の人の流れは活発だ。渓谷の住民は反革命暴徒のテロを恐れていったん捨てたわが家に続々と戻ってきた。

この地区はここ数年切迫した情況が続いていた。反革命勢力は戦略的に重要な通行困難な山岳地域に根を張ろうと躍起になっていた。彼らはパンジシールを拠点として他の地区に出撃し、道路、工場、発電所に破壊工作を行い、学校や病院に放火し、何の罪もない非戦闘員の住民を無差別に殺りくした。

アフガニスタン政府の正規軍部隊は反革命暴徒を粉砕してテロの火種を消すことに成功した。

反革命軍の拷問室から解放された若い教師アチクラさんは語る。

「これでようやく反革命暴徒が植えつけた恐怖と暴力の雰囲気から救われました。4月革命を支持した者はアフマド・シャフの仲間どもに殺されたり秘密の牢獄に入れられました。革命政府の社会政策は目の敵にされ、学校が破壊され、本は燃やされ、生徒たちは殺されました。愛国的な聖職者たちまで暴徒の手にかかったのです」

パンジシールの住民は集会を開いてアフガニスタン民主共和国にたいする宣戦なき戦争の災害を乗り越える決意を表明し、真の民主主義の原則の上に新社会を建設しようというアフガン人の願いを反映した政府と党の進歩的政策を支持した。

カンプチアの塩

B・モスクビチェフ記者（プノンペン）

「うちの塩の方が塩分がちょっと強いようですね」

ソ連の記者たちがもってきたソ連製「エクストラ」の塩をちょっとなめてみて、製塩場長次席のメアフ・ユンさんはこう言った。

見渡す限り一面に平坦な塩田が広がっていた。カンプチア人民共和国カンポト県にある塩田の面積は五四〇〇haで、年間の製塩量は四万八〇〇〇tにのぼる。古来海岸沿いのカンポト県は海水を蒸発させて塩を作ってきたが、その後大規模な製塩法に変わった。カンプチアの塩はシンガポール、マレーシア、そのほか東南アジアの国々で知られているので、ポル・ポト体制時代に受けた傷からカンプチアの経済が癒えつつある現在では塩は重要な財源になっている。

「うちの塩田では二五〇〇人も働いていて、賃金も悪くないんですが、作業はいまでもきついですね。まあ、ご覧ください」とメアフ・ユンさんがいう。

アイスホッケーのグラウンドほどの塩田で働いているのは大半が婦人だ。木製の大きな雪かきのような道具で塩をかき集めて、小さなピラミッドの形に積んでいた。倉庫へ四方から塩運搬人の長い行列が続いている。両端に塩かごをつるした竹の天びん棒を担いでいる。

メアフ・ユンさんと盛り土の道沿いに車をとばして塩田を視察した。ポル・ポト派は退却のとき海水を引き入れる水路をめちゃめちゃに壊していった。いま使える塩田はわずか四五〇〇haしかないが、これから5年以内にはすっかり復旧することになっている。

ソ連の新聞記事から

（一九八四年5月後半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委員会政治局は定例会議で、安定した確実な食糧フォンドをつくるための土地改良の発展と灌漑・干拓地の利用効率向上の計画のガイドラインを審議し承認した。

この計画は、ソ連共産党中央委政治局の委託により、学術機関と農業・水利事業の専門家の積極的な参加を得て、ソ連政府、連邦構成共和国、自治共和国の省庁が策定中であり、トウモロコシ、野菜、大豆、飼料作物その他の農作物の安定生産のために、ソ連の乾燥地帯の灌漑農業を著しく発展させる一連の広範な措置をとることになっている。また北カフカズ、ウクライナ南部、モルダビア、ボルガ川中下流域に一連の大灌漑施設が建設される。中央アジアの諸共和国、カザフ共和国、西シベリア、ウラル以東地域、カフカズ南部地域、ロシアの非黒土地帯、ベロルシア共和国、バルト海沿岸諸国の水利施設の建設はさらに発展する。

また灌漑地と干拓地の利用効率を引き上げる措置や土地の改良での科学技術進歩の促進、自然保護活動の実施、国民経済のための水資源の再配分が特に重視される。

（プラウダ紙5月24日号）

誤った宣伝を打ち破る

このほどソ連の宗教家代表団が米国訪問を終えて帰国した。クルチツキー＝コロメンスキー・ユベナリー代表団長はV・コンドラショフ・イズベスチヤ紙記者に次のように語った。

「われわれ代表団は米国に18日間滞在した。代表団は数グループに分かれて米国の多くの都市を訪れ、多くの宗教界や社会団体の代表と話し合った。ソ連の国内生活や対外政策についていろいろたずねられた。どこに行ってもソ連に関する真実を知ろうとする気持ちがうかがわれた。これは驚くにあたらない。宣伝の影響で、多くの米国人のソ連観がゆがんだものになっているからだ。われわれはソ連の平和提案を説明し、これらの提案こそ平和への真の道を切り開くものだと言うと、そんなし、またたとえば、米国が最初に核兵器を使わない義務を引き受けるのを妨げているのは何かということについて、われわれと会った人は誰も説明できなかった。しかも、ソ連は他の諸国が同じように行動するかぎり、宇宙へ衛星迎撃兵器を打ち上げない義務を引き受けると声明したのに、レーガン米国大統領はぜがひでも宇宙空間を軍事化しようと努めている。

米国の宗教団体の指導者たちは、われわれを温かく、手厚く迎えてくれ、このような訪問はソ米間を橋渡しするものだと言ったが、われわれはその言葉に全く同感だった。

（イズベスチヤ紙5月27日号）

ペトロドボレツの噴水群

5月27日11時、レニングラード近郊ペトロドボレツの公園一帯にR・グリエル作曲の『偉大なまちの歌』のメロディーが響き渡った。ダイヤのようにきらきら光る数十本の噴水が中天に立ちのぼり、ゆらめく水の歓喜のシンフォニーをつくり出した。

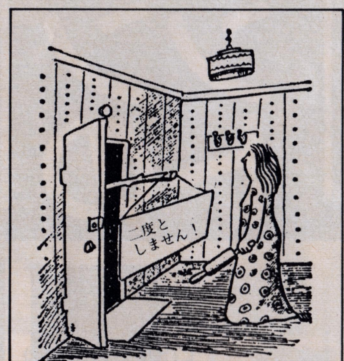
公園、宮殿、噴水のこのアンサンブルが廃虚から再建されたものであり、ここでは破壊的な戦争の傷あとが今も治療を受けているとは、ちょっと信じられない。このほど、昔の版画に基づいて二つの鐘形噴水が復活した。ペトロドボレツのアンサンブルの最後の大噴水施設ライオン・カスケード（滝）の修復も始まった。

噴水の放水が始まる日までに、「モンプレジール」宮殿エカテリーナ館の六つのホールの修復作業が完了した。ラストレリの設計によって建設され、クワレンギが改築したこの建築の傑作を、ファシストたちはがれきの山に変えた。エカテリーナ館の修復は、学術調査を踏まえ、古文献や美術材料、綿密に選択された類似物を使って行われた。

彫刻家、美術家、陶工が苦労のすえ、美しいタイル、〝黄色の間〟の優美な彫刻、〝緑の間〟の青の客間のスコッチ作のすばらしい絵画が復元された。いまやエカテリーナ館は、ピョートル大帝時代から20世紀までのロシアの文化・芸術のパノラマを再現するペトロドボレツ博物館コンプレクスの重要な環となった。

訪問客たちは新しく公開された「ペトロドボレツと劇場」や宮廷用自転車のコレクションを見物し、華やかなカーニバルに参加した。

（イズベスチヤ紙5月28日号）



（V・ルゴフキン作、トルード紙5月18日号）

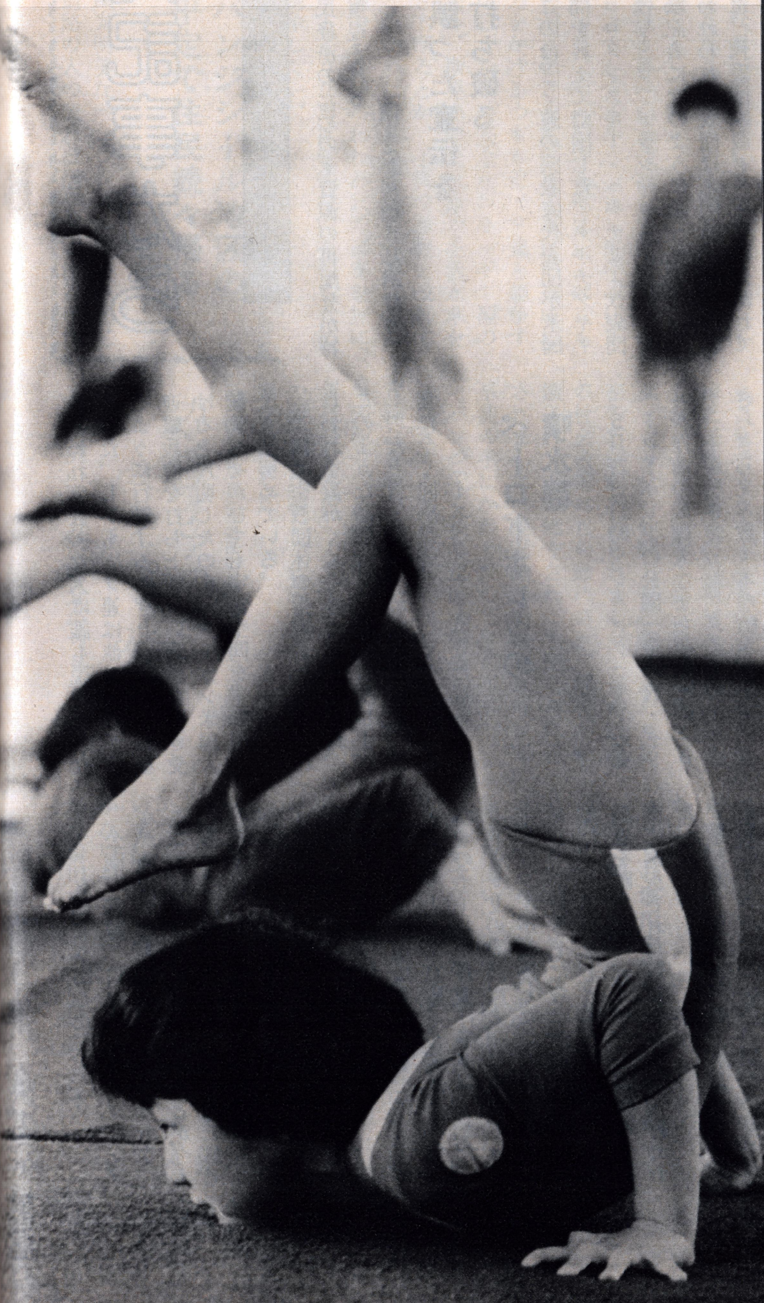
スポーツ

若いスポーツマンのまちタシケント

本誌記者 ニコライ・カバノフ
カメラ F・グリンベルグ



タシケント市民の好きな地元のサッカー・チーム「パフタコル」の立派な後継者たち



体操はタシケントの女の子▶の最も好きなスポーツだ。



放課後スタジアムや体育館に向かう上級生

ウズベク共和国の首都タシケントはさきごろ建都二〇〇〇年を迎えたが、人口二〇〇万人のこの古都はとても若々しく見える。それは街路や広場の現代建築のせいばかりではない。このまちには若者が多いし、体育・スポーツに熱中している人々が多いからだ。

春の朝。市の二四五の全部の普通教育学校では始業前、校庭や運動場で軽い柔軟体操が行われる。七つか八つの動作の簡単な体操で元気になった生徒たちは、足どりも軽く教室へ向かう。

放課後家で食事をし、着替えをしてから多くの子供は体育館へ行く。そこでは陸上、体操、バレーボール、バスケットボールなどの練習が行われている。学校のスポーツ部員の総数はタシケントの学童の半数の約一三万五〇〇〇人で、体育の教師とコーチは大体がタシケントの教育大学や体育大学の出身者である。体育活動のねらいは子供たちの健康増進にある。スポーツ体育用の設備や備品などの費用を負担しているのはウズベク共和国の教育省であり、子供たちは1コペイカも支払わなくてよい。

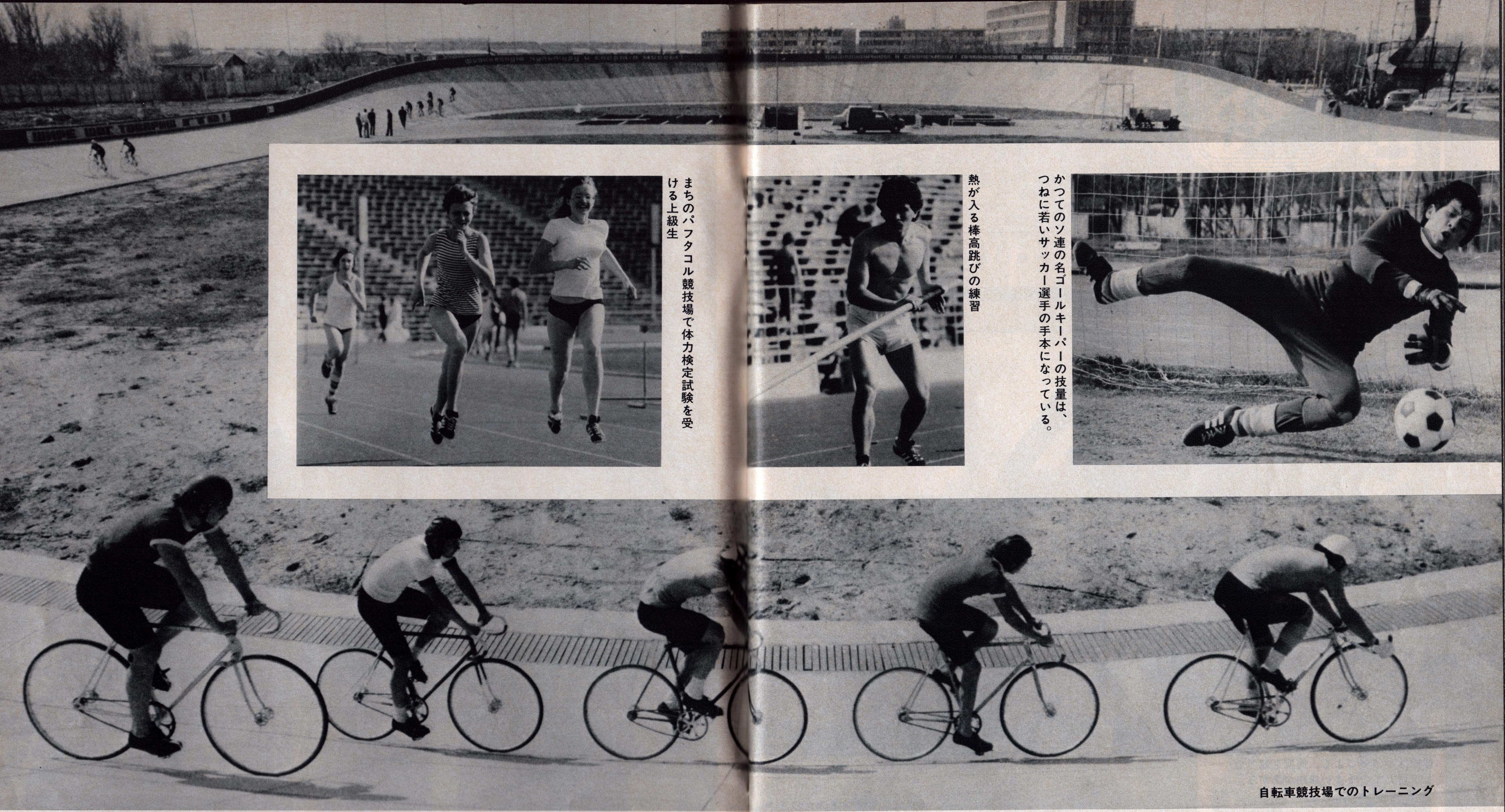
……ここは第11普通学校の体育館。いま9—12歳のグループの柔軟体操が終わって、器械体操の練習に入ったばかりで、子供たちはいささか上気しているようだ。ミハイル・イリイン・コーチが演じた鉄棒の順手車輪を何とかこなそうとけんめいである。慣れた者にはそうむずかしくはないが、慣れない者にとってはかなりきついこの体操を、イリインの教え子たちは次々にやってのける。コーチは満足げにうなずき、体育館のベンチで孫のトレーニングを見ている老人はほほえみ、若いころを思い出している……。

ウズベク人の体育の歴史は古い。今のウズベキスタンの土地に住んでいた諸民族は、古くから乗馬、弓、民族競技の格闘技クラシをやってきた。運動は治療にも使われた。

一九一七年の10月革命前、一般の人々は体育とスポーツを系統だててやるのに必要な条件をもっていなかった。70年前ウズベク人の間の体育理念を分析しようとした一部のロシア知識人の企てや民族的



体操はねばりづよく、何度も繰り返し練習してこそよい成績があがる。



かつてのソ連の名ゴールキーパーの技量は、つねに若いサッカー選手の手本になっている。

熱が入る棒高跳びの練習

まちのパフタコル競技場で体力検定試験を受ける上級生

自転車競技場でのトレーニング

なスポーツ・チーム、団体をつくろうとした動きは、ツァー当局によって弾圧された。

今ウズベク共和国には五五〇万人余りのスポーツマンがいるが、そのうち二二〇万人が女性である。（これだけの数の女性がスポーツをやるなんて、昔から見れば夢みたいである）。また有給の専任コーチ（ボランティアの指導員を除く）は二万人余りいる。ウズベク共和国には一六〇のスタジアム、三二〇〇の体育館、約三〇〇のプール（タシケント市内のそれらの数はそれぞれ16、四二五、46）がある。この共和国が初めて外国選手を招いたのは一九三一年であるが、いまウズベク共和国は62カ国とスポーツ交流をしている。これまでのオリンピックでウズベク共和国の選手は26個のメダルを獲得しており、このことからもウズベク共和国のスポーツのめざましい発展ぶりがうかがえよう。

しかし体育・スポーツへの愛情は子供のころから植えつけるべきで、その点で大きな役割を担っているのは学校である。自宅に近いなじみの集団で運動する方が、子供たちには都合がよい。初級グループには、スポーツの種目によって違うが、1年生（7歳）以上なら希望者は全員加入できる。7—14歳の者には、各自がやっているスポーツ種目で最大限の成績をあげるという課題は出されていない。つまりこの年齢の者は主にさまざまな体育訓練や屋外競技をやる。

校内の一般競技は、体育・スポーツへの関心を高めるよい刺激剤になっている。これらの競技を通じて優秀な選手が明らかになり、そのあと優秀選手を集めて、さまざまな競技会（生徒の地区大会から全ソ学校生徒競技大会まで）で学校の名誉を守る選抜チームが組まれる。こうして未来の「スター」たちは、タシケントを含むさまざまな都市でスタートを切る。ことしタシケントはまたも全ソ学校生徒競技大会の開催地に選ばれたが、これは、タシケントの子供たちのソ連の体育・スポーツの発展への大きな貢献が認められたことにほかならない。

タシケントのカヤック選手たちの練習風景



今日のソ連邦 一九八四年7月1日号

昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可 発行人 加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3—9—13・電話03・447・3536）
定価 一五〇円
（購読料は会費に含まれる）